

新カント学派の遺産・転移するロゴス

目次

はじめに 前期新カント学派と射程

第一章、唯心論／観念論(1900年代以前)

第一節、マールブルク学派の幟

思考的産出による实在

感性的極小の問いかけ

非在の諸相・理^{ロゴス}の要求

第二節、西南ドイツ学派の胎動

真理から多元的価値へ

・現実性と規範・理^{ロゴス}の現実化

・哲学知の復権・絶対的精神

・観念論の意想・判断の判断

形而上学後に残る妥当

個性記述学と生の価値

第二章、超越論的観念論(1900年代)

ヘーゲル主義と価値論

内在主義と現実の化肉

価値関係と形式の論理

第三章、現象学／实在論(1910年代)

内在的^{エシス}Sinnと批判哲学

超越論的価値論の行方

問題・決断主義的転移¹

はじめに 前期新カント学派と射程

本稿では後期新カント学派に焦点を絞る(ただし 1920年代以降の形而上学的回帰には触れない)ので、前期新カント学派の集成であるケーンケの『新カント学派の成立と興隆——観念論と実証主義の狭間のドイツ大学哲学』(1986)の第一部～第三部の目次を掲げ、見取り図としておこう。

第一部 ドイツ観念論からの大学哲学の離脱(1830-1848)

I.フリードリッヒ・アドルフ・トレンデレンブルクの、観念論期と新カント学派期の並立

1. 「有機体的世界論」のロマン主義的起源
2. 論理学の新しい対象と学問論の理念

¹ここでの「転移」は対応説から決断主義への移調＝転移(とくに心的生全体の連関のなかにおいて〔他者の〕状態を位置づけ、理解すること)を指している。

3. 「純粹思考」の破壊ならびに無前提性という問題

II. 「認識論」という自律的学科の成立

1. 認識論的目的設定
2. エドゥアルト・ベネケにおける認識論・カント主義・心理主義
3. 思弁的有神論におけるカント

第二部 三月革命以後の哲学ないし新カント主義の目的設定(1849-1865)

III. 三月革命以後の哲学的潮流と「懐疑的世代」の目的設定

1. 反動期の哲学的影響範囲の差異化：ショーペンハウアーかヘルバルトか？
2. 三月革命以後の哲学(1852-1854)の内的／外的制約
3. 1850年代の「懐疑的世代」
4. 草創期の新カント主義の目的設定：ヘルムホルツ—マイヤー—ハイム(1855-1857)

IV. 「新時代」に向けての病歴梗概

1. 旧観念論と新唯物論を媒介する認識論
2. 哲学の再興隆と1862年のフィヒテ-フェスティバル
3. クーノー・フィッシャーの場合の新観念論と認識論
4. オットー・リープマンと新カント主義目的設定の終わり

第三部 新カント主義の普及(1865-1881)

V. ランゲの唯物論批判からコーヘンの経験批判へ

1. フリードリッヒ・アルバート・ランゲの新カント主義
2. フィッシャー-トレンドレンブルク-論争
3. コーヘンの経験批判とその世界観的前提

VI. 1870年代に新カント主義が速やかに普及したさいの諸前提

1. 「新カント学派世代」の職業観とカント研究の普及
2. 自然主義・厭世主義・祭政一致に抗して
3. アプリオリズムと進化主義のはざまの前期新カント主義理論形成

VII. 新カント主義と実証主義の差異化の段階

1. カント文献学とカント研究史
2. 実証主義と新カント主義のはざまの第四半期の「学的哲学」
3. 1878/1879年危機での「観念論的転回」

以上のように閲覧できる。①まずヘーゲルの学知の再興を図るトレンドレンブルクは「論理学研究」を依拠して、ヘーゲルからカントに遡行する足場を提供した。このヘーゲル主義の学的体系の構想を継ぐのがクーノー・フィッシャーであり、下つてはコーヘン／ヴィンデルバント／リッカート／カッシーラー(ニコライ・ハルトマン)にいたる。②新カント学派と言えば認識論に活動領域を限定したと理解されがちである。そもそも近代哲学は、ロックを嚆矢として認識批判にかかわってきたと言えるが、取り分けてジークヴァルト／ユーベーヴェーク／ベネケのラインから心理学と分かちがたいかたちで、擬-(pseud)つまり多

分に心理主義の混じった)論理主義的認識批判が勃興する。この流れはヘルムホルツ/ディルタイ/ラースに転形しながら受け継がれていく。それはヴィンデルバント/リッカートの前期に接続し、彼らの哲学の通奏低音となっている。裏返していえば、西南カント学派は心理主義=実証主義の「鬼子」(その所以は論述が明らかにするはずである。とくにリッカートが「超越論的心理学」を払拭できなかつたのは、その証左である。第三章、第一項)であったとさえ言えよう。③さらに、カント文献学の進捗を挙げておかななくてはならない。リープマンの(『カントとその垂流』1960年の)「さればカントに帰らなくてはならない」という標語が象徴しているように、哲学史的には、プラトン/デカルト/ライプニッツ/ヘーゲル等が絡み合っ、とくに新カント学派の汎論理主義に影響を与える。これを軸にコーヘン/ナトルプ/ヴィンデルバント/リッカートに影響を与えた後期観念論のフィヒテの主意主義・倫理思想が交差する。④またショーペンハウアー/エドゥアルト・フォン・ハルトマン等の厭世主義者、ないしヘッケル他のような自然主義者にして進化論者なる者たちを批判することで、新カント学派は成立した。新カント学派は、特に厭世主義に対しては理想主義、自然主義に対しては観念論というスタンスを打ち出した。自然主義批判という意味では、ランゲの唯物論批判が一画期を与えたと言える。

このように実証主義/観念論の諸契機を包摂し、はたまた、カント主義からの逸脱の可能性さえはらんだ「ブリコラージュ」として、新カント学派は成立した。つまりカント主義にもかかわらず、可能的経験からの越権さえ厭わなかつた。これらを踏まえ、新カント学派の評価となる、「肯定」「否定」「限定」の三つの答え方を検討したい。まず「肯定」から論じよう。それは新カント学派の共有された問題意識から出てくる評価である。

鍵となる問題意識とは、現代の或る種の物理学至上主義にも見出せる「自然主義」との対決意識であり、それへの応接として、勃興しつつあつた諸学と整合的なかたちで、哲学の問題構制を新たに定式化しようとしたのである。そのため科学基礎論が主題的に論じられた。この科学基礎論の礎を定める側面が「理想主義/観念論」に棹差して説かれた。この点を「肯定」とする捉え方が、新カント学派に対する第一の評価となる。というのもカントの「権利問題」というアプローチが十九世紀後半の自然科学の発達を迎えてなお、哲学的に有効であると了解されたからである。たしかに十九世紀の新カント学派は、批判主義的精神を端緒としたもの(先導的役割を果たしたリープマン)、生理学に陥ったり(カントの立場から唯物論を論評したランゲ)、心理主義に踏み込んだりして(ヘルムホルツ)、カント哲学の埒外に出るものが多かつた。またたとえ批判主義と見なされるものでも、因果性のカテゴリーを以てカントの触発に替え、批判主義的实在論(アロイス・リール)の域にとどまるものもいた。リール等の場合、实在の世界がそのまま主観に与えられるのではなく、直接に知られる知覚与件から、私たちはそれに対応する实在物の存在を信じることになる。これら弥縫を打破して、新カント学派がカントの論理主義的衣鉢を継ぐには、二〇世紀前夜を待たねばならなかつた。カントに従えば、科学的知識は「事実問題」としてはその

まま前提され、科学の可能性の条件のみを「権利問題」として基礎づけるのが科学である²。この着想を生かし、おもに自然科学の基礎づけから諸学の体系にかかわったのが、——コーヘンを始祖とし、ナトルプ／カッシーラー／ニコライ・ハルトマンが継ぐマールブルク学派である。

また〔超越論的弁証論での〕理論的認識の越権³を明らかにするカント哲学の一面から、人間事象[=human affairs]をすべて自然科学モデルで説明することへの批判の視角が生まれた。事実判断と価値判断の区別を積極的に説き、前者のみにかかわる自然科学に制約を及ぼしたのが——ヴィンデルバントからリッカートを経てヴェーバー／ラスク／コーンにいたる——西南カント学派であった。その始祖ヴィンデルバントによる価値への定位には、『判断力批判』が幾許かの影響を及ぼしている。彼は普遍に対してかけがえのない個を重んじる反省的判断力による「趣味判断」に範をとり、個性記述学を構想した。とくにこの学派の学問分類論の特徴は、方法を重視し人文社会科学の基礎づけを行うところにあった。生と認識の関係を論じたラスクは、この問題をカテゴリー論(生のカテゴリー)の文脈でも考究した。

第二の評価は「否定」である。それは流布している科学分類論の誤解に端を発する。ヴィンデルバントにかぎっていえば、価値に関係してくるのは、主として個物である。歴史学と自然科学の二元論に個物以外をも対象とする社会科学を正当に位置づけられない、といった「否定」的評価が導き出されたわけである。

これは、狭い枠組みをヴィンデルバントに押し付け、反復といった積極的論点を見逃した誤解である。ましてやリッカートになると、対象としての価値関係的なものと価値無関係的なものの軸と、個別化的方法と普遍化的方法の軸を交差させているから、都合、中間領域を許す結果となり、普遍化的価値関係的手続き(たる社会学)を認める儀となる。この意想を受けついで現われたのが、マックス・ヴェーバーであり、自然科学至上主義に対する対抗軸を打ち出した。新カント学派概説として、あと検討の余地のある否定的評価は次の二点である。

1900年代の新カント学派の台頭にさいして、導きとなった *Geltung*=妥当概念を退行として難ずるものである。ヘーゲルに対する傾きもあわせて、論者はロツツェを承けた西南ドイツ学派の妥当という鍵概念を見咎めている。形而上学的新カント学派への、ヴァーグナ

² 経験的・記述的分析が人間事象(human affairs)としての思考過程を担うのならば、妥当要求の(事実)心理学的・歴史的発生の問題は自然科学のアナロジーで取り扱われることになる。したがって、「妥当の生成」の方法諒解としては、心理的事実問題が哲学的反省による権利問題を凌駕する外貌を呈す。かくのごとくシェーラーは、心理的意識の分析に即した事実問題に権利問題を回収しているが、これは新カント学派の両義的な性格を伝えるものである。Vgl. Scheler, M., 1971, S. 200.

³ 弁証論とはカントの場合、一方で諸矛盾に絡まる理性の手続きを、他方でこの諸矛盾を暴く理性の手続きの両義性を意味している。«Kritik des dialektischen Scheins» [2]. [Historisches Wörterbuch der Philosophie: Dialektik. HWPh: Historisches Wörterbuch der Philosophie, S. 4096 (Vgl. HWPh Bd. 2. S. 184)] Hreg. von Ritter, Joachim, 1971-.

一(Wagner,G.,1987.)の批判や、その展開をカント哲学の射程の衰微と見なすケーンケのような解釈も生まれる。また第二に 1910 年代の新カント学派は Sinn 概念の発見にさいして、現象学的な対応説に積極的に応接しえたのであろうか。とくにノエマ的 Sinn を介した経験的実在論へのアプローチに正面から対決したのだろうか。

このように見て来ると、科学分類論は実在の形式にかかわり、その形式は 1900 年代の観念論的枠組みのなかでは主観に、1910 年代の実在論的構図のなかでは【客体】に組み入れられた、と見通しをつけられる。とすれば学の妥当性(Geltung)の問題は、観念論と実在論をどう調停するかという、古典的(でいて脱形而上学後の)問題に帰すことが分かる。

ならば、ここで新たに〈観念論の正嫡を継ぎながら、実在論との調停〉を図る評価を探らなくてはならない。すなわち、この超越論的観念論と経験的実在論の往還運動が、後期新カントの学派の枢軸を構成しているのであり、カントの遺産を受け継ぎながら、——科学分類論・経験的実在論との応接をはかっていく、という「限定」的評価も生まれうる。言いかえると形式の論理を客観化する方向に推転させながら、同時に(判断は現実的なものを集約するという)判断論を(多分に心理主義的な)規範意識で説明するがごとき、西南ドイツ学派独自のスタンスを、「限定」的に評価しうるのである。

マイモンをもじっていえば、超越的客観という理念なしには、カント主義に入ることはできず、その前提とともにそこにとどまることもできない。かくのごときジレンマにさいなまれた、カント主義ゆえの限界、つまりところ観念論と実在論の「あいだ」にかかわる問題が、新カント学派の十字架となったのであり、そのもとでの知的格闘を、「限定」的に評価することができる。

1. 唯心論／観念論(1900 年代以前)

〔第一節 マールブルク学派の幟〕

一、思考的産出による実在

新カント学派はヘーゲル主義と距離を保って、唯心論的心理主義に棹差した。マールブルク学派を視野に収めれば、唯心論を意識しつつも厳密には「絶対的観念論」の形態をとらない。以下ではとくにその学派について、ヘーゲルとの距離ないし、ライプニッツ⁴的な含意に、注目したいと思う。そこで問われるのは、観念論的了解である。さて後期新カント学派の創始は 19 世紀末にさかのぼれる。その一派としてマールブルク大学を拠点に、自

4 ヴィンデルバント／ナトルプはプラトンの、カッシーラーはデカルト・ライプニッツの、ヴィンデルバント／リッカート／ラスクはフィヒテの、影響を受けているが、ヘーゲルに規定されている点が多々見られる。Glockner,H.,1969 の「クーノー・フィッシャーの遺言」には、敬意あふれた手稿にフリードリッヒ・シュトラウス博士、エドゥアルト・ツェラー、アドルフ・トレンデレンブルク、コンスタンティン・レースラー、ベレナルド・ズーフアン、エーリッヒ・シュミット、アドルフ・ハウシュトラート(アーノルト・ルーゲ、ヴィルヘルム・ファトケ、ゲルフィウス、ホイザー、ヨハン・エドゥアルト・エルトマン)等の様子が活写されている(Glockner,H.,1969,S.142-144.)。著者グロックナーは、ヘーゲル体系は、シュライエルマッハーとロマン派によってたぐり寄せられた非合理性によって、完結しえなかった旨述べている(Glockner,H.,1969,S.151.)。

然科学の基礎づけに中心に携わる〔論理主義というべき〕マールブルク学派が形成された。ヴィンデルバントの言う、創造を断念したがごとき実証主義的風潮（「現代における哲学の状況と課題について」Windelband,W.,1919(←1907),Bd.II.S.3.）が時代の「学」に論理主義を要請したのである。とくに「思考と実在の同一性」を説くその始祖、ヘルマン・コーヘンは1902年の『純粹認識の論理学』で、ライプニッツの微小徴表論という迂路を経て、可能な意識まで含めれば思考と実在(Realitätが、カントのカテゴリーに準拠したものであることを強調するため、それを実在性と表記する方途も考えられる)が一致するとして、ヘーゲル主義に接近している。例えばコーヘンは「理性的なものは現実的になるべきである」(Cohen,H.2002(←1907),S.331.)というヘーゲルをもどきの観念論を提示している。とくにコーヘンが真／善／美にわたる体系を立てたことは、単に自然科学基礎論に収まらぬ、ヘーゲル主義的性格を表わしている。

この学派の路線は、プラトン主義⁵への傾きをもちながら、教育学でも知られるナトルプ、——のちに階層理論を体系化する——認識を創造的産出と捉えたニコライ・ハルトマンの初期に受け継がれる。また象徴理論を含め文化哲学に多大な貢献をした(ルソーと『実践理性批判』、ゲーテと『判断力批判』を主題にした著作でも知られる)カッシーラーの哲学体系は、ヘーゲル主義へのコミット⁶として理解されるべきである。すなわちトレンデレンブルク(1840年の著作『論理学研究』)を端緒とするヘーゲル的学知の継承である(Orth,E.W.,2002,S.124.)。この著作はコーヘンの体系に確実に影響を与えている⁷。

——コーヘンと同様、後に述べるヴィンデルバント⁸にもヘーゲルの翳が認められる。後述する、ヴィンデルバントの属するハイデルベルクの伝統には、あまたのDenkerがおり、クーノー・フィッシャー、ヨハン・エドゥアルト・ハルトマン、エドゥアルト・ツェラー等が、ヘーゲルの影響を被っている。その他、マールブルク側にはシュタムラー(法哲学：「法律および法律学の本質・『法学理論』)／シュタトラー(法哲学：『カント哲学にお

⁵ ナトルプの『プラトンのイデア論』(1903年)、ニコライ・ハルトマンの『プラトンによる存在の論理学』(1909年)を念頭におかれたい。

⁶ もとよりカント哲学としても、「自然一般」の概念規定が来たるのは、普遍的形而上学に依拠した以外にはありえない(KrV,B166.≐4:230 ページ)。こうした概念で対象性一般の根本性格、つまり可能的経験の根本性格が規定される。つまりそうした限定は、直観の形式・カテゴリー・純粹理性の根本原則に依拠している。

かたや特殊的形而上学として、自然の形而上学(経験的心理学・合理的心理学)ないし実践的哲学(超越論的弁証論・人倫の形而上学・判断力批判=合目的性・文化哲学)がならび立つことになる。

⁷ 詳しくは Orth,E.W.,2001a,S.49-61 参照。絶対的観念論ということで、何をイメージするかは甚だ難しいが、例えば Bolland,G.J.P.J.,1902,S.67-72 の記述を参考にしよう。そこでは、ヘーゲル主義の特徴として、①理性の合理的構造が具体的・歴史的に顕われている点、②特定の現象の構造から理性の構造へと上昇すべき課題を担った点が挙げられている。

⁸ ヴィンデルバントのヘーゲルへの接近はハイデルベルクの学的伝統に関連して触れられている (Vgl.Wiehl,R.,1985,S.419-424.)。ヴィンデルバントの——19世紀の形而上学の失効とともに現われた (Windelband,W.,1907,S.201.)——学知概念を参照されたい。とくに1907年の「歴史哲学」にはヘーゲル G・W・F の『エンチクロペディー』(1817年,邦訳1966年)の影響が見られる。

マールブルク略年表

コーヘン ナトルプ カッシーラー

Cohen, H. 講-73 正教-12	Natorp, P. 81-管 85-外 93-正教	Cassirer, E. 99 学 06→Berlin Hartmann, N. 学 07→	<p>HC-89 カント美学の基礎づけ</p> <p>Na-94 ヒューマニズムの限界内における宗教</p> <p>Na-98 社会教育学</p> <p>HC-02 純粹認識の論理学 Ca-02 ライブニッツの体系</p> <p>Na-03 プラトンのイデア論</p> <p>HC-04 純粹意志の倫理学</p> <p>Ca-06 近代哲学・科学における認識の問題 I</p> <p>Ca-06 近代哲学・科学における認識の問題 II</p> <p>HC-07 カント純粹理性批判解説 Na-07 社会教育学論文集</p> <p>Na-09 哲学と教育学 NH-09 プラトンによる存在の論理学</p> <p>Ca-10 実体概念と関数概念 Na-10 精密科学の論理的基礎</p> <p>St-11 法学理論</p> <p>HC-12 純粹感情の美学 NH-12 体系的方法／生物学の哲学的根本問題 Na-12 カントとマールブルク学派／批判的方法による一般心理学</p> <p>HC-15 哲学体系における宗教概念</p>
----------------------	----------------------------	---	---

る純粹認識の諸原則』)／リーベルト(文化哲学)／キンケル(文化哲学：『観念論と実在論』)／フォアレンダー(哲学史：『カントとマルクス』)／シュタウディンガー(倫理学・政治哲学：『道徳の経済学的基礎』)の名が挙げられる。

例えばシュネーデルバッハ・H によると、カント以後のヘーゲルの観念論は「(1)存在と思考の絶対的なものにおける統一⁹、(2)真・善・美の絶対的なものにおける統一、(3)哲学体系としての絶対的なものにかんする学問」という三つのテーゼによって特徴づけられる(Schnädelbach, H., 1983, S.18.=舟山俊明／朴順南／内藤貴／渡邊福太郎訳, 2009, 8 ページ。下線イタリック)¹⁰。もとより絶対的観念論といえどもエンドクサにおける、存在と思考の非

⁹ ギリシャの原文脈のパルメニスデスの「存在=思考」図式を、相関性の議論と重ねて論じるべきではない、と考える(思考とされうるかぎりの存在は「内在的現実」であって、それが思考と対応する。思考外の存在との一致が想定されているわけではない。その点で忽那敬三的ハルトマン解釈には限界がある)。

なお端緒たる(一者と他者は、純粹に論理的な対象性一般のミニマムと呼ばれる)(Rickert, H., 1921a, S.57; 1924a, S.19.)を参照せよ。端緒は一者と他者が選言をなし、一方に属さずんば、他方に属する相関性をもっている。

¹⁰ 『純粹認識の論理学』は根本命題の統一を非心理学的に説き(Holzhey, H., 2002, S.55-56.)、「自己意識の観念論」として、ヘーゲルの学知概念に即していたとも言われる(Holzhey, H., 2002, S.56.)。ただしヘーゲルの弁証法とびったり重ならない。まず法則によって、はじめて意識は統一されるとした。すなわち同一性をもった絶対から流出してゆくのではなく、客観的生成の法則は、無限に隔てられた定立目標を目指し、精神を展開してゆくのである。第二にコーヘンにとって概念と

同一性を認めなかったわけではない。すなわち同一性と非同一性のイデーにおける同一性、「区別するとは〈他のものではないこと〉 [=異ではないこと] として、〈ないこと〉を措定すること」(Hegel,G.W.F.,1975,S.27.)が説かれるからである。とすれば、非同一性をはらんだ現実的なものが、理想的次元の同一性へと回収されることは見やすい。「理性的なものが現実的であり、現実的なものが理性的である」と言われる所以¹¹である。

二、感性的極小の問いかけ

コーヘンを考える場合、可能世界から最善の「現実」を神が選び取った、とするライブニッツ的発想を無視できない。ライブニッツ主義の流れを汲むコーヘンでは、唯心論的な見地から、思考や表象が、物体とはまったく本性を異にすることが強調された。ライブニッツは、物体をたとえどんなに微細な部分まで観察しても、相変わらず、そこには表象の起源は見出されないとした。

ライブニッツ主義では知覚や表象の根拠が、現存する事物のみに、かぎられるわけではない。見えないものを見えるものにする、——記号における秩序と事象における秩序が対応する——精神自体の「表現(出)的原理」もしくは「表現(出)的本性」が必要となる所以である。これに依拠するときだけ、事物以外の精神は「自分の外に有るもの」を表象できる。モナドは閉じているから、もともと精神に内在している表象は、世界と対応していなければ、虚像でしかない。ところで対象となりうる世界全体は、無限である。ならば、精神の内には無数の事物の表象が対応しなくてはならない。とはいえ、もしこの無数の表象をすべて判明に認識できるのなら、私たちじしんが神となるという背理を犯す。したがって表象の中には、[無数の事物に対応する] 意識されないものがあるにちがいない。こうしてライブニッツは個々の精神(モナド)の内に、意識されざる微小徴表を想定した(以上、山本信,1953,168-169 ページを参照)。

理念の等置、概念の絶対性は、存在と知識の対立を止揚することをイミした。このためヘーゲルの絶対知はプラトンのもの=「無底」(勝義の根拠の要求)anhypothesis(Cohen,H.,2002(←1907),S.429/B.S.406.)と誤解されてしまった。つまりヘーゲル的存在から出発することなく、存在者の全体へとコーヘンは向ったのである。第三にもとよりコーヘンはヘーゲルの矛盾とも無縁であった(Holzhey,H.,2002,S.55-59.)。

なお、『純粋意志の倫理学』がスピノザの『エチカ』(その見地からシェリング/ヘーゲル的な汎神論に疑問を呈している)を、その出発点としたという解釈があることに言及しておく(Holzhey,H.,2002,S.52-54.)。たしかにコーヘン著『ユダヤ教の源泉からの理性の宗教』(1915年)のスピノザ忌避からして、その影響は限定的なものであるが、「エチカ」の幾何学的体系構成法に即して、コーヘンは倫理学の体系を書いたというわけである。もとよりスピノザの人間学的「自然主義」をコーヘンは見咎めなかったわけではない。一方で普遍的精神文化の宗教的解明に携わるスピノザが、その自然概念をめぐってカントと立場を異にしたのは明らかである。分けても道徳法則を当為のかたちで追究したカントとの間には大きな懸隔がある。ただしコーヘンはカント側に立って、彼の神理念の要請に踏み込み、自然と道徳の調和的統一(Cohen,H.,2002(←1907),S.462-463.)を説いた(Holzhey,H., 2002,S.53.の参照指示による)。

¹¹ なおコーヘンは〈理性と現実〉/〈存在と当為〉の区別を設けた点でヘーゲルとちがう。さらに歴史過程における精神の自己展開という考えには馴染まなかった。これはそもそもカントの実践哲学に従い、「そうではなく理性的なものは現実的になるべきである」(Cohen,H.,2002(←1907),S.331/B.S.314.下線ゲシュペルト)という考えをもっていたからである。

コーヘンの無限小は、自由の概念と両立しえた¹²。「純粹意志」はおのれの自律に則した産出を進める。それは、みずからの根源から湧出し、おのれを乗り越えてゆく動勢である。

「かくのごとき、根本的で思考法則的〔根源の判断〕に従えば、〔基本的〕要素じたいならびに内容の根拠じたいが構成されてくるし、さればこの動勢にしても、言わば意志の絶対的根源を、駆動の絶対的根源と呼ぶであろう」。この根源が産出されるのは、この動勢においてである(Cohen,H.,2002(←1907),S.142/B.S.136.)。かくしてそれは、行為として対象化されなくてはならない。つまり行為において意志は際立ってくる。「私たちが意志を、思惟に即すかたちに、もしくは思惟のなかへと、無制約に引き込めば、それだけいっそう区別がは

¹² もとより自由論一般を展開する紙幅はないが——微小徴表に関連して、——自由をどのように捉えるかについての、ありうべき二つの対応を掲げておこう(以下ライブニッツ・G・W・著、谷川多佳子/福島清紀/岡部英男訳、1993(←1695)より。【F】は作中人物フィラレート、【T】はテオフィルを指す)。

i 「或る人が自由である」とは「自分の意志するがまま」或る行為を選びうることであり、それ以外の要素は、無視してもよいという考え方【F:208 ページ】。

ii たとえ「自分の意志するがまま」或る行為を選びえたとしても、その意志を抱くように強制されているのなら自由ではない。したがって強制されざる〈意志それ自体の自由〉こそ自由の本質を成すものである、という考え方【T:208-209 ページ】。

もしiiのような考えをとるとき、意志どおりに行為を遂行しても、意志の自由がないといって、その行為の罪を逃れようとするのなら、人間はまったく不自由な存在となるから、誰にも罪を帰せられなくなる、ゆえに行為の自由に加えて「意志の自由」をもち込む余地はない、と——iはiiに対して、——反論するであろう。つまり「彼の意志に依存するその行為は否応なしに、存在するか存在しないか〔のどちらか〕であり、その存在か非存在かは彼の意志の決定と選択に忠実にしたがわざるをえず、彼はこの行為の存在か非存在かのどちらかを意志することを回避しえないからです」【F:209 ページ】。

しかるにこの反論に対してiiは「意志の自由」をもち込むことが誤りではなく、「意志Aを抱いたら必然的に行為Aが結果する」という発想自体が誤りであると切り返すかもしれない【T:209 ページ】。というのも、たしかに或る意志をもつことがそれを決定せしめる精神過程に因っている【F:210 ページ】にせよ、必ずしも先行する意志に因るのではない、言わば、将来の意志を陶冶できる、とも考えられるからである。ここから、真に自由な行為者は陶冶によって絶え間のない訓練を積み重ね、精神の独立を勝ちえた人、つまり過酷な状況に追いやられても、邪な行為に傾かないように精神の独立を勝ちえた人、克己を為し遂げた人ということになる【T:210 ページ】。

このように考え、二つの途をいわば調停するかたちで無意識の活動までを総合するなら、表面的には気づかれない理由が意志に働きかけている、と想定できるとライブニッツは言う。「理由を明らかにしえぬまま、私たちを一方よりむしろ他方に傾かせるのは、多くの場合、区別もできず見分けもできない非可感的表象です」【T:212 ページ】。「真の善悪の概念を、それらが含む快苦の表象にまで分析し、心が動かされるようにすること、これを私たちは常に為しうるわけではありませんから、決然として次のような原則を自分自身に対して作るべきです。すなわち、理性から結論が引き出されるのを待ち、その結論をひとたび理解したならば、以後はそれにしがらう。当の結論が、その後は通常、可感的な魅力を欠いた、たんなる盲目的思考によってしか気づかれないとしてもです。そしてこのことは、徳を快くて自然なものにする理性に則って行動する習慣を身につけることで、非可感的な傾向性ないし不安に対すると同様に情念に対する支配力をついには獲得するためなのです」【T:218 ページ】。文中出て来る非可感的表象が、微小徴表であって、克己を成し遂げた人格は意志と行為を接合せしめる。そうした微小徴表は不安を指示する欲求の原因となるが、人はそれらを「規制し抑制する」【T:220 ページ】すべを通じて真の自由を享受できるのである(下線強調)。

つきりする」(Cohen,H.,2002(←1907),S.175/B.S.167.下線ゲシュペルト)。

そこには幾許かの、ライプニッツ的な、微小徴表という心理過程と、理性的精神〔の自律〕との両立が反映しているかもしれない(ライプニッツについては山本信,1953,97-98 ページを見よ)。すなわちたとえ無意識的に微小徴表の必然的過程が行為を左右するとはいえ、決定を下す人格は、先行する〔自然因果的〕原因に因り行為するのではなく、有用か有害か、善か悪かという対象[=object]の価値(Leibniz,G.W.,Bd.IV.S.128.=佐々木能章訳,1990, 155-156 ページ)¹³のみ顧慮する。そうして理性的に反省することで、私たちは微小徴表の制約を超えて自由となる。

してみれば理性は自由に意志できる〔人格性を具える〕と同時に、他方で微積分的原理、つまり無限小にかかわる数学を可能ならしめる。ゆえに理性という反省〔能力〕は、微小徴表と次元を異にし、数的認識によって微小徴表に対応する無限小の連続を把握できるのである。——コーヘンにもどれば、一般に「極限法によれば、いわゆる「微分小」は決して本当の量ではなく、有限量の「極限」とされる。その見地から微分小の連続である有限量を見てみれば、「有限量は産出過程の所産である」(Giovannelli, M.,2007,S.40.)。微分小概念の発見によってはじめて、数学と数学的自然科学を総括する、その認識論的意義をしかと理解できるのである(Cohen,H.,1984(←1883),S.11.)。数的「連続」を、思考と判断とにかんする「活動の法則」としたことに、ライプニッツ的着想が表われている。彼の「根源の論理」(後述)は、自由の担い手である有限的な存在者を、創造的に産出する。すなわちコーヘンの理性的存在者は自由に違背することなく(山本信!!)、〔微分法をお手本に〕「無限小」つまり「非」[=μῆ]を介して実在¹⁴を動的に「産出」するのである。

三、非在の諸相・^{ロゴス}理の要求

Holzhey,H.,2002,S.59 で言及されるように、コーヘンにもカント的批判主義¹⁵が見られる。感性的な無限小は微積分¹⁶計算に即して捉えられていたからである(Cohen,H.,1987(←1871),

¹³ 『弁神論』本論第一部 45,邦訳 156 ページ。選択は必然性から独立しており、選択肢が多様な可能性に拓かれていることに加え、「意志は対象が有する善さのみによって決定される」のである。

¹⁴ 「現実性」と「実在性」との等値については Paulsen,F.,1924,S.180-181 を見よ。コーヘンはこれに対し、実在的なものは現実的でないとした(Cohen,H., 1997(←1914),S.487.B.S.420.)。これはカントが第一批判において、「実在性」[=Realität]を、様相のカテゴリー[Vgl.Dasein]ではなく質のカテゴリーとして考えたことに対応する。

¹⁵ ハイデッガーはマールブルク学派が、直観と思考との差異を解消し、超越論的感性論を超越論的論理学に還元したとして批判した(Heidegger,M.,1976, Bd.21.S.271.)。その批判にあるように感性と接合した意識の多様を所産と捉える点では、マールブルク学派はヘーゲルの産出に接近している。

¹⁶ 石川文康は、コーヘンが「非分割者」(Individuum)に人倫的実在を見出しながらも、ライプニッツに言及しなかったのは、モナドの単独性にこだわったからである。石川は、ライプニッツの微小徴表と自由との連関に目をつぶっているし、西南ドイツ学派の個体における、歴史のなかでの数多性も無視している(石川文康,1989,90-91 ページ)。

マールブルク学派の高祖コーヘンの社会主義についてコメントを挟んでおこう。コーヘンは、唯物論史で高名なランゲの社会主義を批判的に継承した(Lübbe,H, 1987 (←1963), S.238-250.)。う

S.544.)。無限小による構成は、同時代のラッセル／フレーゲの論理主義(それはアプリオリニズムと連続する)と足並みを揃えるものであった。コーヘンにおいては微積分法の原則と知覚の「先取」 [=Antizipation]との関係が、無限小と内包量との関係として理解される。すなわち有限量は、微積分法による無限小からの産出過程に由来する。ゆえに微積分法によって顕わとなるものは、有限量の「根源」であるとともに、その「限界」である (Cohen, H., 1984(←1883), § 37.S.31-32.)。このことは実在とは「何かとして」規定される知覚の「先取」であって、実在する感覚とは特定の性質・「質料」(物理的なもの KrV.B751.=6:22 ページ)を指すとするカントの行論と合致する。かくて数学的な感性的形式から「知覚の先取では、純粹実在カテゴリーがそもそも感覚に一致する実在現象、かくのごとき実在に転化するのである」(Giovannelli,M.,2007,S.42.)。カントとともに言うのなら、差異化されぬ空虚な形式が量的に差異化された内容へと移行する。

かつにも大衆受けを狙った、ダーウィニズムに依拠するランゲの社会主義を、学的に改鑄しようと試みたのである。純粹意志という当為の存在(「当為をとおして意志は真の存在を為し遂げ、略取する」(Cohen,H.,2002(←1907),S.27/B.26.)参照)からコーヘンは出発する。法実証主義でもなければ、自然法的でもない、純粹なかたちで、法理論が純粹意志のもとで構想される(「法の形式は法を見出し、発見し、産出する方法的手段である」Cohen,H.,2002(←1907),S64-65/B.S.62.下線ゲシュペルト。)

そもそもコーヘンにとって倫理学は「法と国家」の哲学にほかならなかった。その構想にさいして、彼は——認識論が厳密科学の事実から出発したように、——法・国家の事実からその「駆動の動態的見地」を問う(Cohen,H.,2002(←1907),S.40/B.S.38.法律学は道徳学から区別される(Cohen,H.2002(←1907),S.67/B.63.)、というかたちをとった。ただし、法といっても公共的な生や意志に、その源をもつ。だから公をステージとする倫理学においては、人間を剥き出しの原子論的「個人」として扱わず、それ「全体」との連関が要求される。

この人間としての統一性は道徳的人間性に存しているから、「全体」としての国家とは、人間を道徳的人間性になかで、「現実化」するための歴史的担い手だろう。ところで現実の国家と言えば、権力国家にとどまり、階級の対立状態が不可避である。だからそこでは、民主主義的な意志が国家と協同することがない。

かくのごとき認識から社会主義に向かったコーヘンじしん、重苦しい悪意が自分の倫理学のうえにのしかかっていることを感じていた。つまり、「一方で彼の倫理学が人倫的な[=sittlich]自己意識を、国家に方向づける[=orientieren]のだが、他方彼が自分の理想をつなぎとめる経験国家が、その理想に冷笑を浴びせかけるのを認めざるをえなかった」(Lübbe, H., 1987 (←1963), S.242.)。現実との落差を自覚しながらもコーヘンはおのれの社会主義において、法に準拠すべし、法国家たるべし、という道徳的(人倫的)理想を掲げたのである(Vgl.Holzhey,H.,1998,S.139-154.)。

社会主義のスキームに即すのならば、生産手段の私有という資本主義的秩序の条件下では、所有概念の内実をなす財の支配が、そのまま人格の支配につながるという見方となる。そうすると私有財産制度を永続せしめる法秩序はしりぞけられ、理路として私物の占有が制限される。だからランゲが重視した協同組合による所有は、コーヘンにおいて、せいぜい理想にいたる中間的移行段階にすぎず、より高邁な理想が提示される。

約せばコーヘンは、倫理的観点に立ち、よって法を前面に押し出した〔政治的〕社会主義を目指した。そもそも、その社会主義の出発点がカントの倫理学だったのであり、マルクス主義とは異質だった。——コーヘンの非在が、フィヒテの非我とも関連している(Nicht-Ich, Cohen,H., 2002(←1907),S.208/B.S.198.)ことについては Munk,R.,1998,S.116.石川文康,262 ページを見よ。コーヘンの相関関係(ヘーゲルの止揚と対照的な彼の相関関係。Munk,R.,1998,S.114.)において、他者というものは、学的思考の本性 (Cohen,H.,2002(←1907),S.216/B.S.206.)に由来するものであり、人類や自己の総体によっては回収されないものである。

〈「無」からの産出〉といっても、微分概念というかたちで「無限小」の内包量が、純粹「思考の根本概念、実在のカテゴリー」(Cohen,H.,1984(←1883),S.23.下線ゲシュペルト。ただし実在といっても思考内のカテゴリー)として前提されていたのである¹⁷。これは例えばカント哲学においても、外延量が内包的な微分小によって構成されることと符合する。そのことは、批判期に属す(アディケスの年代比定によれば)1777~1778 頃のレフレクシオン 5582 番¹⁸に鮮やかに示されている。

カントの〔感性的〕無限小による連続の構成は、コーヘンのそれへと通じる。コーヘンの観念論において、思考にとって異質な感性的契機は、思考によって限定される。感覚といえども、思考が感性に向妥当する[=hingelten]ときにかぎって成立する。つまり思考作用によってはじめて、それらが相互に規定しあうので、両者は独立でない。つまり思考による限定は、経験に概念が会うさい「答え」と「問い」という統一を見る(Cohen,H., 1997 (←1914),S.381.B,S.328.下線ゲシュペルト)。してみれば感性とは、言わば思考への〈問いかけ〉である。——逆に言えば、思考の作用は〈感覚を限定しようとする要求〉のかたちをとる。つまるところ、感性は「正確に言えばむしろ純粹思考の要求のごときもの」(Cohen,H.,1997(←1914),S.493.B,S.424.)のうちで可能となろう。感性的契機における「連続」は「連関」

¹⁷ Vgl.Kant,I.,1911,Bd.XIV.S.496,Refl.67.内包的な「単純なもの」[=das Einfache]をカントは「瞬間」と名づけ、運動本来において実在するものを追究しようとした。KANTS früher Schrift <Die physische Monadologie> Kant,I.,1902,Bd.I,473-487.=2:233-258 ページ。[Historisches Wörterbuch der Philosophie: Einfachheit, einfach/zusammengesetzt. HWPh: Historisches Wörterbuch der Philosophie, S. 4763(Vgl. HWPh Bd. 2, S. 386)] (Hreg.von) Ritter, Joachim , 1971-

¹⁸ Refl.5582. χ^2 (アディケスの年代比定による)。M 48'. E II 1032.(Kant.I., 928,Bd.XVIII.S.239-240.)

「(ほかの覚え書きからの補足：分離量は存在しないが分離定量、つまり数は存在する。)

量は定量的な観点において差異〔分離〕があるが、質的な観点においては同様である。すなわち絶対的な始まり部分を除けばその〔質的〕観点において同様である。けれども絶対的な測定における、すなわち実在的な(ほかの覚え書きからの補足：感覚における)〔内包〕量は、それとは別の〔外延〕量と次の点において異なっている。それはすなわち、〔内包〕量はいかなるものにおいても解消されえないが、別の〔外延〕量なら部分が尽くされないとしても、積極的な限界をもっているという点である。空間は(三次元で)限界づけられており、時間は(一次元で)限界づけられている。実在的な〔量の〕産出は瞬間をもっている。つまり実在の産出は一つの要素、つまり外延量の産出は微分小という(ほかの覚え書きからの補足：或る意味で)要素をもっている。(実在的な量の産出は、或る時間のうちに〔加速度を伴って〕平面に描く線のように見せる)。

キャサリン・ディール(ベルリン大学)の「前批判期著作における負量・内包量」(ローゼフェルト・コロキウム URL=http://www.academia.edu/660211/Negative_and_Intensive_Magnitudes_in_Kants_Pre-Critical_Philosophy,2014年10月6日閲覧,p.16-17.)は、以下のようにコメントしている。

「カントはこのレフレクシオン 5582 番において、さまざまな主張をしている。第一に特定の外延量と実在との相違は、前者が「限界」もっているのに対し、後者は〔内包的に〕「無に帰しえない」という点に存している。第二に実在は、たとえ感覚が複雑でないとしても、微分小からの外延量の生成によって、——「瞬間」のうちに生成する。第三に実在は超越論的に考えると、時空と同「本性」である(後略)」。同様にコーヘンにおいても微分小は真の量ではなく、有限との差異の限界にすぎない(Schultess,P.,1984,[Cohen,H.,1984(←1883),p.17*-21*.)。それは時空的連続の幾何学的意味から、各時点で異なる速度をもった物体的意味への移行行き(Cohen,H.,1984(←1883),S.22.)のかたちで演繹される。

[=Zusammenhang]¹⁹を意味し、個々の思考の必然的關係に即して、「根源」(=etwas に対置される操作概念、つまり無²⁰としか言いようがない微分小から生じる。すなわち「思考は統一の産出であるので、統一の思考として〔思考の〕連関によって制約されている」(Cohen, H., 1997(←1914),S.91. B.S.76.下線ゲシュペルト)のである。このことを捉え返せば、無限判断の連続的系列として展開する。

思考において「能産じしん、即所産」(Cohen,H.,1997(←1914), S.29.B.S.26 下線ゲシュペルト)であるにせよ、経験的意識のなかに思考は溶解してゆく²¹のだから、コーヘンの観念形象は、西田幾多郎の「純粹経験」に接近するであろう。コーヘンにおける経験と思考の關係は、例えば西田に、以下のように受容された(板橋勇仁,2004,67 ページ)。

西田は、感覺的経験と思考との根底に両者を成り立たしめる創造的な活動を考えた。他方コーヘンはその観念論的構図において「根源の論理」を示唆した。すなわち、思考が感覺を概念的に規定し、それを根拠づけていくことを「問いと答えの交互作用」(Cohen,H., 1997(←1914), S.378,B.S.326.下線ゲシュペルト)であると見なした。そのうえで思考と感覺は、創造的で動的な交互作用の内でのみ存在しうるとした。その点で『自覚に於ける直観と反省』(1917 年)期の西田²¹は、コーヘンの学徒である。〔またナトルプの「法則」も同様の理²²の要求である²²。〕これらは維となり経となり、理念的次元を紡ぎ出してゆく。

これらとは別の方向から、西南ドイツ学派は、カントの『判断力批判』を範とし、認識の根拠を概念から自由な快感情[=明証感情]に、もしくは「表象ならざる価値」という「非

¹⁹ デイルタイ的な生の連関を想起せよ。

²⁰ 無といっても相対的否定であることは、石川文康,1989,255-256 ページ参照。コーヘンの思考では「神」という「無 un-条件者」「絶-ab 対者」は無限判断を形成する否定的述語である。

神の否定性はユダヤ教の文脈で、はじめて理解されうる。「神の存在と世界の存在のあいだにすでに同一性を前提してしまえば、「創造」という行為はすでになされてしまっているか、そうした行為は格別必要でないか考えるかかのいずれかになってしまう。……そうだとすればむしろ、同一性の思考の残滓を払拭し、神と世界とのあいだのいっさいの媒介を排除することによってはじめて、創造の可能性を確保できる。……したがって、神による世界創造という神と世界との關係が可能であるためには、両者のあいだに或種の深淵が確保されなければならない」(村岡晋一,2008,51 ページ)。神は複数の付帶的属性をもちほしない、ということがらが、否定神学のおおもとにある。

ところでマイモニデスの否定神学においては、神が知覚し生きるといった事態を、被造物こそ知覚させ生かすといった神の行為の結果としてか、それとも「または」[=oder]欠性の否定かという選言關係を問題にした。にもかかわらずコーヘンは神の行為「すなわち」欠性の否定とし、後者を無限判断と等値した。しかるに、この欠性の否定とは、実のところ「壁は見ない」という否定表現のごとく、壁はそもそも見る／見ないという肯定／否定の選言を凌駕しており、コーヘンの解するような「よりポジティブ」な肯定=限定的否定とは理解できない。マイモニデスによれば、「神は無力ではない」(『迷える人々のための導き』第一部 LVI 章,ムンク訳仏訳 p.229.)とは、否定と肯定の双方を否定するかたちの全面否定なのである(『迷える人々のための導き』第一部 LVI 章,ムンク訳仏訳 p.227.)。これを限定的否定ととらえるコーヘンには、ユダヤ教の源流からの逸脱がある(石川求,2015,134-137 ページ)。

²¹ 『善の研究』からこの著作にいたるまでの生成期と、「場所の論理」が開陳される時期では、思考の位相が異なる。

²² Vgl.Natorp,P.,1912,S.197.

在」(「妥当」)に求めたのではなかろうか。〔ちなみに、直接知に学的端緒を見るマールブルク学派ないし現象学と、「超越」を積極的に認めるコーンとは対立する。Cohn,J.,1923によれば、勝義の哲学は「概念」から、法則へといたる。概念が提示する名辞と副表象が結びつくことで、感情と概念的体験が結合し、美的価値形象が生まれる。つまり感情という非在が理^{ロゴス}への要求である。〕西南ドイツ学派の認識論は目的論をとり、認識の目的を客観的に妥当する(真理)価値と定めた。そこから価値の派生態である「当為」は、判断を動機づけることになった。認識活動をこのように理解するならば、なぜ価値妥当と目的論が両立するのか、という難問に直面する。それに応接するかたちで、価値妥当が想定する形而上学的「現実」から、「妥当」へと着眼点を変える必要があった。そのことを、理論的真から〔実践的でもありうる〕多元的価値への転換と言いかえることもできよう。それは、ちょうど西南ドイツ学派の後継を自認する左右田喜一郎にとっての、極限概念という「非在」²³と重なる。〔存在の側から見れば、当為は gap をもって隔てられた「意識一般」にとっての極限概念である。〕「非在」とは理^{ロゴス}への要求である。コーヘン、西南ドイツ学派ともども、それへの要求に沿って、存在者は構成される。とりわけ当為的価値に注目する西南ドイツ学派は、マールブルク学派に比べて心理的な要求に適う、促迫[=urge/affirm]・禁制[=prohibit/prevent]をより強調している。

〔第二節 西南ドイツ学派の胎動〕

さてコーヘンが活躍した時とほぼ同じくして、ハイデルベルク、フライブルク兩大学を拠点にして、ヴィンデルバントのもとにリッカート／ラスク／判断論を集成したバウフ／美学で活躍したコーン／クライス(『現象学と批判主義』)／クローナー(哲学史:『カントからヘーゲルへ』)／日本でも教えたことで知られるヘリッゲル(『原質料と原形式』『形而上学的形式』)等が集った。社会学者マックス・ヴェーバーもその列に数えられ、幾人かと交友をもった。

認識の妥当について評価するというカント的問題圏では、哲学的認識は可能的経験のうちでの原理を探究するという課題を、有することになる。とくに *SEMPER APERTUS*,Bd.II 所収の Wiehl,R.論文(1985,S.419-424.)によれば、ハイデルベルクの伝統(／ヘーゲ尔的思潮)のなかに、価値哲学を位置づけている²⁴。——ハイデッガーによる、ハイデルベルクの

²³ 価値を存在の合理化の極限におき、存在の合理化の動勢をアプリアリに規制するものと考えた。左右田はかくのごとき価値を下敷きに、大正デモクラシーの「文化主義」を基礎づけようとした。しかもそこでの一般的「文化価値」にとどまらず、人格上の要請として一回的・個人的な「創造者価値」をそれに対置した。もとより個人的活動と社会活動の諸領域とは、合致するとは必ずしも考えない。その上で個の尊厳を前面に押し出した。したがって「文化価値」と「創造者価値」の一致は、理念的次元にかぎられるのである。塩野谷祐一,2002,391-398 ページ参照。

²⁴ Lyne,I.,2000 によると初期ハイデッガーへのリッカートの影響としては Heidegger,M., 1978 (←1916),GA1 において、歴史科学を価値関係性に捉えていることが挙げられる。「所与の充溢から歴史的なものを選択するのは、されば或る価値関係にもとづいている」(GA1. S.427.)参照。また兵役後の二つの講義 Heidegger,M.,1987a(←1919a),in;GA56/57; Heidegger,M.,1987b(←1919b),in;GA56/57 参照。ハイデッガーは Heidegger,M., 1979,GA20.S.20 で、明確にリッカートを否定する(「ディルタイ的問題設定がヴィンデルバント・リッカートによって些末化されたこと」に言

伝統の外部に位置する『ニーチェ』(1936-1946年)は、新カント学派の価値哲学がもつ位置価を比定する手段となりうる。1915年に教授資格論文を提出した彼は、もっぱら、ニーチェに価値哲学の尊称を授けている。「西洋思考の根本運動」(Heidegger, M., 1996(←1961), S.63)は、虚無主義の由来を抽出することで、価値の顛倒という思索を見出した。ハイデッガーはそこに、「価値」を発見しつつ、大文字の「存在」[=Sein]を価値として考えたのである。ニーチェは、西洋形而上学の完結と克服との狭間に踏み入れた最初の人物であった。新カント学派は教えを垂れるということにはなかったが、彼に比類のない寄与をしたことも確かである。すなわち心理主義・生物学主義に対抗し、本来／唯一の哲学として、哲学ないし哲学的問いの本質についての、真なる知の痕跡を授ける——そうした役割を果たした。

リッカートは後年、彼の思索の覚醒した *Lebendigkeit* を認めている。リッカートは生の哲学がもつ非合理的特徴に、心穏やかならぬものを感じたならば、いっそうきっぱりと、西洋的合理性、ないしヨーロッパ哲学が作り出した学的論理にまさに問いを提起せんとする思考に対して線を区切らなくてはなるまいに。それを通じて、科学的実証主義の批判に、ならびに自然主義と歴史主義の批判に向かえる。西南ドイツ学派では、ヘーゲル的なスタンスを継承しつつも、『20世紀初頭の哲学』²⁵に見られるように、学的専門化に対向して、諸学を超えた学たる哲学が模索された。そのさい、文化的形象に接する、もしくは歴史的個体に接するの導きの糸が、批判の可能的条件となる「実践的評価」、つまり進歩する人類にとっての文化価値である。このさい注目すべきことは、ヘーゲルの、「論理学」と「哲学史」とをなぞるかたちで、体系が構想された点である。そのことはヴィンデルバントが、前掲著において、「論理学」と「哲学史」の項目を担当していることに端的に現われている。哲学史は進歩する精神の自己認識である。この歴史哲学的な問題意識は、西南ドイツ学派の哲学体系が課題を受け継ぐのである。

以下、継時的なヴィンデルバントの思索の変遷をたどりながら、理念的領域に接した心理学的な促迫／禁制とともに、多元的価値哲学を隈取りたい。

及する)。しかしそれもリッカートに多くを負うが故の〔盾の〕半面であったと言えよう。実際、フーゴ・オット著、北川東子／藤澤賢一郎／忽那敬三訳、1995、125ページでは「フィヒテとヘーゲルの勉強、リッカートの『自然科学的概念構成の諸限界』やディルタイ研究へのたちいった取り組みなどによって、数学への偏愛のために私に生じていた歴史嫌いが根本的に消滅した。私は、哲学は数学と自然科学かそれとも歴史かのどちらかに一面的に方向づけられるべきではない、しかも精神史としての歴史は哲学者を非常に豊饒にしうる、と認識した」と書かれている。この文脈でハイデッガーとの相違も問題になる。ハイデッガーは、真理の主観的性格(Heidegger, M., 1977(←1927a); GA2.S.226-227; 1989(←1927b), GA24.S.314-316.)を強調する〔現存在があるかぎり、真理というものが存在する〕「真理は現存在じしんの存在把握に帰属する」(Heidegger, M., 1979(←1925), GA20.S.314.)ので、具体的主観性のイミで現存在が存在しえぬのなら、真理の理念は決して具体的な担い手を持ちえぬこととなる。

²⁵ 各専門領域についての執筆担当は以下のとおり。Wundt, W., 心理学／Lipps, The. 自然哲学／Windelband, W., 論理学／Buch, B., 倫理学／Lask, E., 法哲学／Rickert, H., 歴史哲学／Tröltzsch, E., 宗教哲学／Gros, K., 美学／Windelband, W., 哲学史。「無時間的超経験的妥当は、ゆえに決して人間の経験存在にもとづけることはできない」(Windelband, W., 1907b, S.537. 下線ゲシュペルト)。

西南ドイツ学派略年表

ヴィンデルバント リッカート ラスク

Windelband, W. 博-70 資-73 正教-76	Rickert, H. 博-88 資-91 正教-94	Lask, E. 講-04 正教-12 没--15	Wi-84 プレラーディエン
			Wi-92 哲学史
			Ri-92 認識の対象 1Aufl.
			Wi-94 歴史学と自然科学
			Ri-96-02 自然科学的概念構成の諸限界
			Ri-04 認識の対象 2Aufl We-04 社会科学と社会政策にかかわる 認識の「客観性」
			La-05 法哲学 Ri-05 歴史哲学
			La-08 論理学に実践的理性の優位はあるか?
			Wi-09 真理への意志
			Ri-10 哲学の概念について
			La-11 哲学の論理学および範疇論
			La-12 判断論 Ri-価値の体系について
			Wi-14 哲学概論

一、真理から多元的価値へ

フィッシャー、ロツツェを師と仰ぐヴィンデルバントは、前者から〔学知の生成を見渡す〕哲学史観の薫陶を受け、後者から価値哲学の構想を授かった。両者に端を発する由来するヘーゲルとの距離のとり方が、とくにヴィンデルバントの「現実」や「学知」という争点を決定している。フィヒテとの関係も取りざたされる²⁶が、あえてヘーゲルとの連続性に注目したい。

①現実性と規範・理^{ロゴス}の現実化 ヴィンデルバントは、アヴェナリウスならびにマッハによって創始された、純粹経験に基礎をおく実証主義的認識論にあらがって、認識のアプリオリな条件は価値にもとづくとした。そこで勝義の認識活動とは、表象作用とは独立な判断作用がされた。判断が認識の枢軸を成す以上、——ディルタイの見地を脇におけば——判断意識としての規範意識にすぎたのである。そのさい、価値を判断作用の導き手とした。ヴィンデルバントは「価値」を、〔意志と感情のなかに内在する〕規範意識に妥当するものとした。認識にとって本質的なのは、表象体系(判断形象)の根拠を問うこと²⁷であり、

²⁶ ハイritz・Mによれば、フィヒテの西南ドイツ学派に与えた影響として

- 1.批判的方法が判断と価値判断とについて、構成的区別をしたこと
- 2.批判的方法の目的論的性格
- 3.規範意識と経験的現実のかかわり方によって規定〔されるあり方〕

が挙げられている(Vgl.Heinz,M.,2002,S.135.)。とくに容認／拒斥の感情についての考えは、フィヒテの道徳論を下敷きにしている(Vgl.Heinz,M.,1997,S.109-129.)。彼においては義務に即して容認／拒斥が語られる(Fichte,J.G.,1977(←1798-1799),GAI/5.S.155.)。この両感情は二元的対立性を示している(Fichte,J. G.,1977(←1798-1799),GAI/5.S.137.)。

²⁷ Vgl.Dilthey,W.,2004(←ca. 1904-1911),Bd.XXIV.S.269.ディルタイでは、フィヒテ流に〔経験に

当為必然性の感情へさかのぼって、その根拠を規範意識に見出した。「……この解説にとって探求される必要がある、はなはだしく変転する過程は、絶対価値にまったく関与しないことなのである。その価値は意識内容に内在するものの、およそ現実²⁸に対する規範として妥当する、と私は確信できる」(Windelband, W.,1884(←1883c),S.321.下線ゲシュペルト)。続けて「イマヌエル・カント」で見られるごとく、観念論的な〈私の統一〉に結実する。すなわちヘーゲルのごとく「真なるものは、しかし、宗教の場合のように、表象と感情の対象となり、芸術の場合のように直観の対象となるにとどまらず、また思考する精神の対象ともなる。かくして私たちはここに合一の第三の形態、すなわち哲学をもつことになる。哲学は〔、〕そのかぎりにおいて最も高い、最も自由な、また最も理性的な形態である」(ヘーゲル G.W.F.著/武市健人訳,1954,84 ページ。下線ゲシュペルト)。哲学とは絶対精神の自己認識のあり方である。「……真理はまさに真理としてみずからを証ししなければならぬというのが答になる。この証しは、ここ論理的なものの範囲内では、概念が自己自身により、しかも自己自身に媒介されたものであること、したがって同時にまたほんとうに直接的なものであることが実際に示されるところにある。……絶対的精神としてわれわれによって認識されるのは、ただわれわれが同時に、神によって創られた世界、自然と有限な精神とを神との区別においては真ならぬものとしてみとめるかぎりにおいてのみである」(ヘーゲル,G.W.F.著,真下信一/宮本十蔵,1996,231 ページ²⁹。下線イタリック)³⁰。

ヘーゲルの観念論は、絶対的な「現実」とも一方で連関している。例えば理想主義(観念論)に言及する文脈でヴィンデルバントは述べる。「諸時代の変転する関心を越えて、ひとつのより高い精神的現実にもとづく持続的価値」(灰色強調引用者。)³¹についての省察こそが、哲学に期待されている、と。ヴィンデルバントにおいて、表象にとっての「絶対的現実」[=absolute Wirklichkeit,絶対的価値]への関与によって認識は理解される(Windelband, W., 1884(←1881),S.132.)のである³²。つまりヘーゲル的な現実的真理のもとに、——絶対精神モ

裏打ちされた] 普遍的知識は意志とともに産出され、観念論の対象へと繰り込まれてゆく。

²⁸ この文脈での「現実」は「価値」ではない。解釈上の不整合を残すが、課題として残しておきたい。ロツツェ的「現実」と比較せよ。

²⁹ ヘーゲルに見られる「汎論理主義」[="Panlogism", Windelband, W., 1919(←1910), Bd.I.S.278.] はヴィンデルバントに影響を与えたフィヒテにも(『知識学』を著したように)共通して見てとられるべきものである。ただし、この文言は『ヴィルヘルム・ヴィンデルバント』(1915a年)には見られない。もとより「汎論理主義」といえども、ギリシャの主知主義とは、大いに懸隔があることには注意を要する(Windelband, W., 1884(←1881), S.120-121.)。なおヴィンデルバントはヘーゲルの現実=真理概念から、多元主義的価値論に蟬脱したのち、ふたたびヘーゲルへの回帰が見られる。「ヘーゲル主義の再興」 Windelband, W., (1919(←1910), Bd.I.S.273-289.参照。

³⁰ 『大論理学』初版の端緒論は絶対精神から展開される。野崎敏郎, 1916, 193 ページと廣松渉, 1980, 29-32 ページを比較せよ。絶対的精神に端緒としての撞着を見る野崎の理解は説得性がない。

³¹ なお九鬼一人, 2006, 87 ページ, 14-15 行の引用「あらゆる時代の変転するところの関心を超越した、より高い精神的真存在[現実態=Wirklichkeit]に基づく永続的価値に対する省察」は Windelband, W., 1909a, S.119.= 吹田順助訳, 186 ページからの引用である。

³² 後年の議論を一旦はさめば諸価値を統一する聖価値は、「超越的現実」(Windelband, W., 1919 (←1902), Bd.II.S.305.下線ゲシュペルト)と言われる。このように価値的省察が根を下ろしてい

デルで——一元的に価値が統括されている。金正旭,2012 の引用指摘によると、「真理を表象と事物の一致と見なすかぎり、真理はむしろ思考のうちにのみしか求めえない。何とならば、かくなる一致は道徳行為のうちにも、美的感情のうちにも、見出しえないからである。しかるにカントとともに真理を精神の規範と理解するならば、理論的真理と同様に倫理的真理や美的真理も存するのである」(Windelband,W.,1884(←1881),S.139-140.)。

ところが「哲学とは何か」になると、ヴィンデルバントは一変して価値多元主義をとる。いわく、批判的哲学は、「学問が存在するかどうか、すなわち普遍的かつ必然的な妥当とともに真理価値をもつ思考が存在するか否かを問う。ないしは道徳が存在するか否か、すなわち普遍的かつ必然的な妥当とともに善価値をもつ意志や行為が存在するか否かを問う。ないしは芸術が存在するか否か、すなわち普遍的かつ必然的な妥当とともに美価値をもつ

表一、ヴィンデルバント『プレルーディエン:哲学とその歴史についての論考と講演、第六版』³³目次,引用で区別するさいに a,b,c を付加

Bd.I		Bd.II	
1877	スピノザの思索に寄せて(S.81-111)	1876	厭世主義と学知(S.218-243)
1878	フリードリッヒ・ヘルダーリンとその運命について(S.230-259)	1877	思考と反省について(S.24-58)
1880	ソクラテスについて(S.55-87)	1882b	規範と自然法則(S.59-98)
1881	イマヌエル・カント—彼の哲学の百年を記念して(S.112-146)	1883a	批判的方法か発生的方法か?(S.99-135)
1882a	哲学とは何か?(S.1-54)	1883b	道徳の原理について(S.161-194)
1899	ゲーテの哲学から(S.168-190)	1883c	永遠の相の下に(S.333-345)
1904	百年の後に(S.147-167)	1894	歴史学と自然科学(S.136-160)
1904	ゲーテのファウストとルネサンスの哲学(S.191-212)	1902	聖なるものについて(S.295-332)
1905	シラーの超越論的観念論(S.213-229)	1907	現代における哲学の状況と課題について(S.1-23)
1908	フィヒテの歴史哲学(S.260-272)	1908	文化的生における本質と価値について(S.244-269)
1910	ヘーゲル主義の再興(S.273-289)	1908	教養階級と文化的統一(S.270-278)
1910	わたしたちの時代の神秘主義(S.290-299)	1910	文化哲学と超越論的観念論(S.279-294)
		1911	共苦と共喜(S.195-217)

る「現実」は理想的／観念的に了解される。つまり判断形象に対応する、精神的「現実」は永続する価値を戴く。

³³ Windelband,W.,1919(←1884),6.Aufl., *Prälu dien, :Aufsätze und Reden zur Philosophie und ihrer Geschichte*, Tübingen:J.C.B.Mohr,Bd.I/II.

直観や感情が存在するか否かを問う」(Windelband,W.,1884(←1882a),S.26.網掛け強調引用者)。ここに前述した金正旭は、価値多元性／分立化という問題構制を見出している。

かく真理価値が妥当に置換されている。この価値多元性の様相を示す、この問題は、「永遠の相のもとに」の、ロツツェの妥当に言及する箇所〔一、第二節、第二項〕まで先送りにする。妥当の発見とは、新たなイミでの理念的次元の開披である(つまり、妥当が態度決定の対象、つまり基準となるのである)。

②哲学知の復権・絶対的精神 次に第二点としてヴィンデルバントは、はじめヘーゲル主義のフィッシャー³⁴を師と仰ぎ、現実的なものが理性的である、というヘーゲルのテーゼを継承した。すなわちヘーゲルの哲学史観にならい、確実な学知は、生の展開から歴史的に大なる目標に向かう意識へともたらされる(Griffoen,S.,1998,S.62.)。言いかえれば当初、ヴィンデルバントは伝統をなぞる——啓蒙主義に感化された歴史の目的論をとっていた。このことが、『20世紀初頭の哲学』で存在論的／認識論的「論理学」と、「哲学史」とを一对のかなめとして、ヴィンデルバントが執筆したことと重なる。その一端³⁵は、「学〔体系〕の文化的意義の歴史である」から読みとれる(Windelband,W.,1884(←1882a),S.19.下線ゲシュペルト)。また哲学という学は文化的財(Windelband,W.,1884(←1882a),S.20.)であり、哲学は「学〔体系〕の理論」(Windelband, W.,1884(←1882a),S.19.)であるという箇所からも、ヘーゲルの学知が連想される。例えば、たんなる表象は「時間的現象界」(Windelband,W.,1884(←1883c),S.319.)に属すから、それを介した認識によっては「永遠な何か」にいたれない。それへいたる道、つまり理的^{ロゴス}「価値」を求め、^{ロゴス}理の実現というヘーゲル的な〈精神の展開〉が想定される所以である。

「事実必然的なものではなくて、妥当するものだけが、私〔の思考と理解 6.Aufl.で加筆 1919〕には、永遠で超時間なものである」(Windelband,W.,1884(←1883c),S.321.ただし 1919, 6.Aufl.,Bd.II.S.342.では下線ゲシュペルト)。

かくのごとく、ディルタイとヴィンデルバントとに、精神哲学という主題の共通性を見て取れる。ヴィンデルバントの行文は、先の引用に続けて、客観的観念論、もしくは学知に言及しているように読める。

「したがって歴史研究が普遍妥当的な認識という学的性格を獲得するとしたら、それは自然科学の場合とちがって、私たちが歴史を理性的価値が展開して実現するものとして考察すること……によっている」(Windelband,W.,1919(←1907),Bd.II.S.20-21.)。

ディルタイの心理学にしても物と心とを截然と区別し、後者に焦点を結ぶわけではない

³⁴ おそらくはフィッシャーを継いで、ヘーゲルのごとく理性的なものとして「現実」[=Wirklichkeit]を等置したことが、ヴィンデルバントの観念論に影響している。

³⁵ 心理主義的基調と、ヘーゲルの「精神」との目的論のバイメタルは1883年の「哲学とは何か?」(Windelband,W.,1884(←1883d))の段階において清算されていない。それに対して1907年の「現代における哲学の状況と課題について」では、文化の目的論的發展が強調される。すなわち「歴史を理性的価値の進歩する現実化の過程、つまり文化の過程として考察する」(「聖なるものについて」Windelband,W.,1919(←1902),Bd.II.S.305.)のように、代わって現われるのが文化の目的論である。

点では、ヘーゲルとヴィンデルバントと歩を同じくする。例えばディルタイが精神科学で念頭においていたのは、人間の心ではなく、ヘーゲル的な「客観的精神」であった。例えば丸山高司は言う(丸山高司,1985,26-27 ページ)。

「彼〔ディルタイ〕は、精神科学を、「歴史的社会的現実」を対象にする科学のことであり、はっきり定義している。つまり「精神」というとき、ディルタイの念頭にあったのは、人間の「心」や「意識」ではなく、ヘーゲルの〔法、道徳、人倫のごとき〕「客観的精神」である」。フィヒテは「巨猛な努力によって、自我がみずからの世界を生み出す発生的連関のうちへ押し入る方向へと推し進めた」(Vgl.Dilthey,W.,1968(←1906/他),Bd.IV.S.203.=8:560 ページ)が、その流れがヘーゲル的な客観的観念論となる。

ただしヴィンデルバントは、こうしたディルタイの観念論／心理学を、内観的なものにするかえて、批判しているという落ち度を免れない。例えばディルタイは「外的」経験／「内的」経験を越えて第三の部類の「超越論的」経験へと拡大してゆく、と述べている。彼の場合、個性記述学〔解釈=理解〕と法則定立学〔法則=説明〕が出合うのは、まさにこの「超越論的」経験においてである。すなわち「なんらかの感覚領域でのいかなる経験においても、外的世界との関係が完全に消失する」ことなく、「いかなる感覚的知覚も内的経験という性格をもちえない……この超越論的経験においては、外的経験や内的経験の場合にくらべて、経験の解釈と普遍的で法則的な関係の探索とは、いっそう分かちがたい」(Dilthey,W., 1982, (←1896/96),Bd.V,S.246-247=3:764 ページ)。

とくにディルタイの場合、個人の生を取り巻く「客観的」「共同体基礎を指し示」すことを通じ、その先行「理解」によって、個性性も心理学的に把握可能になる(Makkreel,R.A., 1975,p.305.)。そのかぎりではヘーゲルに近い。「もとより人間は、人間が何であるかを、まさしく自己についての沈^{グリュューペライ}思や心理学的な実験によってではなく、歴史をとおして経験する」(Dilthey,W., 1982(←1894),Bd.V.S.180.=3:685 ページ)。そもそもヘーゲルの『精神現象学』では、以下のようになっていた。

人倫性[=Sittlichkeit]こそが人々の現実、すなわちポテンツを展開したものであり、一つの精神的統一性を構成する。それは普遍的な自己意識であり、対象となる存在者との同一性において、そうでありうる。この人倫的実体は習俗[=Sitte]である。そうした普遍的意識をじしんの存在と捉え返すことによって、個別的意識は存立する。裏返して言えば、自己意識の行為と定在が習俗をとおして意識されることによってのみ、個別的意識たりうる(『精神現象学』Vgl.Hegel,G.W.F.,1970(←1807),Bd.III.S.264.)。このように歴史的に培われた社会の領域で、自己意識(実践的主体)が現象する。ディルタイの文脈にもどれば、個を特殊と名づけると、それに対して共同体の基盤は、「連関」つまり普遍を成し、理解と説明とは特殊を「連関」に関係づける。

③観念論の企図・判断の判断 さてヴィンデルバントの判断論に関連して、フレーゲの『概念記法——算術の式言語を模造した純粋な思考のための一つの式言語』(1879年=邦訳1999年)に言及しておくのが好便だろう。以下、熊野純彦の解説に準拠して、ヴィンデルバ

ントにおいて「判断の判断」が「価値判断」とされたことを一瞥しよう(熊野純彦,2006, 198-199 ページ)。フレーゲは判断という主張を表示する記号として「┌」(水平線は内容線と呼ばれるのに対し、垂直線は判断線と呼ばれる)という記号を導入する。例えば「この者は人間である」という文を A とするなら「┌A」は「この者は人間である」という判断を、「┌A」は「この者は人間であるということ」という命題内容を表す(フレーゲ・G 著,藤村龍雄訳,1999,11 ページ)。ただし「┌この者」はそれだけでは判断を示さない。ないし、「┌A」は主語「この者」と述語「人間である」とのあいだの「たんなる表象結合」を表現するだけである。後年のタームを使えば「┌」という記号が示すのは、「思想」を判断へと変容させる「主張力」である。

ヴィンデルバントに当てはめるなら、命題内容にあたる表象結合に、主張力に当たる態度決定が加わって初めて判断になるということになる。つまり表象結合での理論的判断についての価値判断を「判断についての判断」と呼び、この高次形象を判断にほかならないとする(Windelband,W.,1921(←1884),S.170.=枝重清喜訳,1928,6 ページ。下線ゲシュペルト)。

ヴィンデルバントは一応、「この者は善い」というような価値判断を「この者は人間である」の類の事実判断から概念上区別した。そのうえで判断は、〈主語表象-述語表象結合態〉という(その実、不完全な)判断について、〈一種の態度〉を表明する「判断についての判断」であり、原基的に価値判断 Beurteilung³⁶である、という見解を『否定判断論』(Windelband, W.,1921 (←1884) ,S.170.=枝重清喜訳,1928, 6 ページ)でとった。例えば「否定判断を問いによって完成せられた表象結合の拒斥または否認とすれば、[判断形式の区分の理論では]まったく十分適っている」(Windelband,W.,1921←(1884) ,S.191.=枝重清喜訳,1928,39 ページ)と言っている³⁷。

ヴィンデルバントでは、表象作用に対する規範意識のかかわりを重視すべきである。ここから先に述べた規範意識(個々人に内在する普遍的意識)であれば近づきうる、普遍的な〔妥当する〕規範が、構造体[=Gefüge]として成立する。つまり妥当する規範は、規範意識が接近しうるものなのである。ただし心理主義に妥協している証左として、判断の態度決定といえども、表象結合に対してなされる。もとよりヴィンデルバントの妥当がロツェを踏んでいることは言うまでもない。ロツェによると、イデア的な命題、つまり真理価値もまた現実的に「有^{エス・キフト}る」。彼は理知体において捉えられた「命題」そのものを、「妥当」という論理的構造体に数えるのである。

ヴィンデルバントは宗教論を雛型に価値哲学を展開している。ヘーゲルの絶対的精神(時期によってその、濃淡はちがう)がそれに投影されて、経験的意識より「高次の」表出、「超越論的統覚」、「絶対的自我」が帰属するとされた (Windelband,W.,1884(←1881),S.135.)。

³⁶ そこにはフィヒテの倫理思想が翳を落としている(Heinz,M.,2002,S.139.Vgl. Fichte, J. G., 1977 (←1798-1799),GAI/5.S.153-156.)。「be=～について」がメタ的判断であることを示している。

³⁷ 事実判断の原基的形態が価値判断なのであるが、この態度は修正され、事実判断と価値判断とは、観照的か、もしくは評価的かの、それぞれに固有な態度、同列に区別されるのは、のちのことに属する(Windelband,W.,1914,244-46.)。

Krijnen,C.,2001,S.110-111の記述に従えば、ヴィンデルバントの認識論は次のような結構をしている。

a)総合とは、まったく一般的なイミでは「多様の統一」のことを指す。それは総合／関係づけの働きから意識を規定する(この点については、Heinz,M.,2007,S.75-90も参照)。

b)意識を総合的意識とするならば、それは一般的妥当の要求をことごとく承認し、その妥当を、「意識一般」の法則、つまり本質的に妥当する理性形式に従って、総合することのうちにもとづける。総合原理の文化哲学的一般化をとおして、理性に規定された切り取り(つまり選択)として、個々の文化的形象を解釈するのである(下線イタリック。)

c)統一化機能のために、アプリアリ性と現象性をヴィンデルバントは、交互概念として規定しえた。つまり形式・妥当は内容・存在の可能性の条件となる。

当為必然性に統制された表象の体系(判断の体系)の根拠を問うことから、規範意識が前面に押し出された。認識とは判断であり、裏返せば知覚表象によっては、概念まで階梯を上りえぬ。表象(ないし内容)とは区別された主観が判断作用を統制しなくてはならない。ただしカントの意識一般「われ思う」が、感性の形式・カテゴリー・悟性の根本原則にのみ与るのに対して、ヴィンデルバントの規範意識は判断一般の諸反省形式³⁸にもかかわる。しかもカント的な統覚の分析的統一(「私は思考する」ということが、私の表象のすべてに伴いえなければならない)(KrV.B131=4:205 ページ。Vgl.B135.)と超越論的(総合的)統一との区別は見られない(Heinz,M.,2002,S.86.)。

こうした心理主義の「残滓」は、ヴィンデルバントの「思考と反省について」³⁹・『否定判断論』(Windelband,W.,1921(←1884),S.169.=枝重清喜訳,1928,5 ページ。例えばジークヴァルトに言及するくだり)等の諸論考から明瞭に読み取れる。したがってこの心理主義の文脈で解すのなら、判断の自由を保ちながらも心理的経験的に働く規範意識は、偽証へと開かれていることになる。そのことは〔端的な〕真理と当為とへの、論理法則の二重化に表われている。

「ここからあらゆる論理法則の二重化が生じる。一方でそれは経験的〔心理的〕意識に

³⁸ カテゴリーと(総合的)反省概念のレベルが平準化され、両者の原理的区別が解消されたことについては、『範疇の体系について』(Windelband,W.,1900.=篠田秀雄訳,1928)参照。Vgl. Heinz,M.,2007,S.86-87.

³⁹ 「無意識的思考と意識的思考をこのように区別するのは、実際、きわめて原理的意義 *Bedeutung* をもっているや否やを明確にすること、はたまたそれにしたがって現に示されるはずだが、意志の影響が実際には、われわれの思考運動の性格にきわめて決定的仕方の変更を加えているや否やを明確にすることは、論理的理論と同様、心理的考察にも重要である」(Vgl.Windelband,W.,1884(←1877),S.176.)。フィヒテの主意主義も垣間見えて興味深い。〔なおリッカートが『判断力批判』に呼応しながら、当為を明証感情に負うとしたように、〕フィヒテは、真理や確実性は感情に負うとした(Vgl. Fichte, J. G., 1977(←1798-1799),GAI/5.S.156.)。Vgl.Windelband,W.,1884(←1877),S.178。「これらの問題に対して新しい心理学は別の立場をとる。それは〔古い心理学に妥協するとはいえ……〕必ずしもどこへでも及びえぬこととして、意志と悟性があたかもそれ自体独立した事物であるかのようにも語る」。これは経験の事實的連関が主意的な運動のただなかにあることをイミしている。

としての規則であり、これにもとづいて真理に向けられた思考はそれぞれ為される。他方で表象過程が進行するにさいして、それに即しているか、または即していないかとはまったく独立に、内的、独立的な意味ないし本質をもつのである。後者は妥当自体と、前者は私たちにとってのフュア・ウンスな妥当と呼ばれる……」(Windelband,W.,1913,S.18.下線ゲシュペルト)。

この二重化は、私たちにとってのフュア・ウンスな妥当の、妥当自体からの逸脱を示唆している。経験的イミでは、真理への意志が心理的に必要となる所以である(Windelband,W.,1913,S.18.)。

「真理は意志から生じるのではなくて、事態そのものから派生する。意志は方法論的見地に立つかぎり、私たちが欲する特殊な真理とは何かをひたむきに裁定する。しかし意志が真理じしんを事態のなかに求めるなら、それは恣意から免れる」(Windelband,W.,1909b,S.14-15.)。

真理に向かいあうのは規範〔意識〕である……これを承けて言う。

「個人がみずから妥当する規範として、承認すべき何かについての理解は例外なく、この規範意識を前提する」(Windelband,W.,1884(←1882a),S.45.)からなのである。

規範〔意識〕は事実に承認のイミでは通用せず、決して経験的現実ではない。当の判断主体は「ひとが獲得したり守ったりするべきものが何であるか」という規範〔意識〕を知っているにもかかわらず、心理的条件を充たせないとき嘘に陥る。裏返して言えば、真理(価値)を語ることは、(論理的)逸脱現象としての嘘と隣り合わせである。「当為と必然の関係、もしくは規範と自然法則の関係において」、この理念的次元を前提する以上、心理的次元との二重化が生じる。つまり対応説と態度決定説とのあいだで、アンチノミーが出来るのである。

二、形而上学後に残る妥当

ヴィンデルバントの多元主義については加藤泰史,2004,119-123 ページ参照。ヴィンデルバント哲学史は、ヘーゲルの幻想の暴露を契機として、実証主義以後の「学問性」への応接を潜り抜けて、構想されたのである。そのさい鍵となるのは——実証主義の洗礼を受け、ヘーゲル以後分立した——諸目的のもとで、多元的哲学史の再構成をいかに企図するか、という問いである。ここで現われる啓蒙的理性は、おのれの限界を自覚しており、歴史的事象をまるまるカヴァーするものではない。ここから、ヘーゲルの「観念論」が解体された結果として、多元的哲学史が構想された(1894.5.1の「歴史学と自然科学」の構想と時期的に合う)。例えばギリシャ時代の主知主義から、諸価値は西洋文化に分立した。諸文化領域に汎通的に見出せる理念的次元が、そこで〈称揚〉されるにいたる。

確認しておきたいのは、ヴィンデルバント哲学が学知の権利づけという、カント/ヘーゲル的問題設定にたずさわっていることである。まずカントの批判哲学の問題構制を確認しておこう。カント以前の哲学は、表象の起源を解明するという発生的説明に与る。表象結合は心理的には、自然必然的過程の産物にすぎないとされる。それに対してカントは、むしろいかにして表象が妥当するのかという権利問題を、言わば価値哲学的に問うたので

ある。[たとえ承認がまるきりありえぬにせよ、よもや実際〔承認〕することはないにせよ、価値評価はいやしくもあるべきである(Windelband,W.,1884(←1882a,S.36。)] それを承けて、ヴィンデルバントは、論理的・倫理的・美感的評価の必然性は事実的なものでなく、当為必然性となした(Windelband, W.,1884 (←1882a),S.40-41.)。

こうした事実と規範との関係に言及したのが、1883年の「批判的方法か発生論的方法か?」(Windelband,W.,1884(←1883a))であった。個別科学は所与の初期条件と、普遍的な原理、つまり公理[=Axiom]を前提として、三段論法のように結論を導き出す。しかし例えば因果律のごとき〈認識の公理〉の妥当性を、個別科学は明らかにしない。またそれとは別途、倫理や美の領域にも公理があるであろう。倫理学の「普遍的目的」、美学の「感情の一般規則」等の前提は、個別科学によってもとづけられない⁴⁰。個別科学の事実⁴⁰に即した「発生論的方法は公理に対して、経験的に通用する、範囲はまるきり限定された様相を示す」(Windelband, W.,1884(←1883a) ,S.270.)のである。批判的方法の見地に立てば、「思考は真であるという目的を、意志は善であるという目的を、感情は美を捉えるという目的を、普遍的に承認されるよう、それらの実現を意図する——こうした仮定のもとで妥当すべきものが諸規範[=Normen]である」(Windelband,W.,1884(←1883a),S.257.)。判断は規範に違背する可能性をもちながらも、なお価値を実現すべき「目的論的必然性」(Windelband,W.,1884(←1883a),S.257.)を具えている。だから違背を規範的に消極的に了解するのである。

〔哲学史観の多元性に対応した、〕「哲学とは何か」の価値多元性／分立への、ターニングポイントとして、「ロツツェからの触発」ということがあるのではなかろうか。西南ドイツ学派の観念論を押さえるには、モナド論にもとづいた、ロツツェの「妥当」概念に触れる必要がある⁴¹。彼の場合、存在・出来事・関係と同列に命題は、「現実」としておかれる。すなわち事物は現実的である。さらに出来事は生起し関係は存立する。これらが現実的であるばかりではない。イデア的に「有る」^{エス・キフト}命題、つまり真理価値もまた現実的である。彼は理知体において捉えられた「命題」そのものを、現実的な「妥当」として捉える。

「妥当という現実態は、(しかしながら、)イデア固有の現実態のあり方なのであって、この〔ヘラクレイトスの〕変転とは関係せず変わることがない」(Lotze,R.H.,1928(←1912), S.514.下線ゲシュペルト)。

つまりロツツェは「妥当する命題を、現実的に[=wirklich]真である、と名づけ」(Lotze,

⁴⁰ 「慣用的な言葉使いを拡げれば、倫理的公理や美感的公理について語りうるであろう。そしてすべての哲学研究の課題は次のように定式化できるであろう。哲学の問題は公理の妥当である、と」(Windelband,W.,1884(←1883a),S.255. 下線ゲシュペルト)。

⁴¹ 彼は、「善」・「絶対的目的」・「存在すべきもの」(シュネーデルバッハ著、舟山俊明他訳、2009、250ページ)といった普遍的理念が実際、論証されるものではなく、哲学的信念の事項に属すると考えていた。したがって、価値実体とは、「かのように」の性格をもつにすぎず、「理念」とどまると見なされた。かくしてロツツェはヘーゲルのような客観的観念論と距離をおく(cf. Willey, T.E., 1978, p.51.)。他方、妥当(=妥当の妥当根拠としての基体)は価値的に妥当するものであり、非-存在化される。対照的に、デカルトにおいては対象の対象性(妥当)は自我に関与せず、妥当ならざる存在者についての真理の原理として、*cogito* に言及される必要があった。

R.H.,1928(←1912),S.511.下線ゲシュペルト)、判断するとき則るべき価値を、「超越的価値」もしくは「妥当」と解した。

彼の場合も、超越論哲学といささか齟齬が見られる。ロッツェは片足を直観の形式におきながら、もう一方の足を理知体においた。例えば言う。

「魂なき実在[=Realität]なるものは存在しない。精神世界にのみ、真に実在的なものがあり、また私たちが魂なきものもしくは物質と名づけるものは、一般にただ私たちにあい対する現象としてのみ存する。さもなくば現実的に^{エクシディレン}存在する場合には、ただ外面上は魂がなくとも、実は精神的生の精気が充ちたもの、すなわち自己意識あるいは自己感得のなんらかの形式において他に対してのみではなく、自己に対して有るもの〔対自存在〕なのである」(Lotze,R.H.,1901,§75,S.93-94.=山本泰教訳,1928,144 ページ。下線イタリック)、と。

〈精神過程と心的属性〉は、魂という「実在的なもの」において、内的関係として反映されている。それを承けて彼は不可知論をしりぞける。「私たちに思考必然的と思われるものにも、おそらく現実にはなんら対応するものが実際、ないであろうという、極めつけの論難は不問にできる」(Lotze,R.H., 1901,§73,S.90.= 山本泰教訳,1928,139 ページ。下線イタリック)。

かくてロッツェにおいては、「善」・「絶対的目的」・「存在すべきもの」といった普遍的理念が肯定された。しかし、理知体において妥当する価値が積極的に考えられていない。つまり彼は片足を直観の形式において、もう一方の足を理知体におきながら、現象体〔可感界〕のあり方は理知体〔可想界〕そのものについて語らぬとしたのである。〔後者はただ原因として、その徴が前者に反映されると信じるのみである。サンタヤナの解釈によると「ロッツェは現象論へと押し出される」(Kuntz,P.G.,1971,p.97.)。〕

ヴィンデルバントの転回は、より広い文脈で見ると、新カント学派観念論的転回(1878/1879年)⁴²と呼応しうる。ケーンケによれば、「哲学とは何か？」(1982年)では、諸価値の妥当そのものを問うことが、ロッツェとジークヴァルトの判断と価値判断の区別を通じて成し遂げられた(Köhnke,K.C.,1986,S.418.)。ヴィンデルバントでは、論理学／倫理学／美学で妥当すべきものの三輻対の要求が金輪際、哲学の自律を迫ることなく、すこぶる倫理的な動機「信じること」⁴³から生じたのである(Köhnke,K.C.,1986,S.420.)。

⁴² Köhnke,K.C.,1986,S.421.ドイツ思想界は社会主義者鎮圧法制定(1878年)をめぐってパニック状態にあった。「規範意識」は、必ずしも民主主義者・共和主義者・社会主義者にとっての敵対概念ではない。この時期を画期として、ヴィンデルバントの視線は、より広範に社会状況を概観するように転調をとげたのである。すなわち「ソクラテスについて」(“Über Sokrates”in; Windelband,W.,1884(←1880),S.54-87.)辺りから、理性的立場を背景に、ヴィンデルバントは非-理想的、反-民主主義的、反-社会主義的、権威主義的哲学の方向に意を唱えるようになる。多元主義的転回の背景にはこうした社会的背景があったのである(Köhnke,K.C.,1986,S.426-427)。

⁴³ 例えば、「宗教的信仰」を思弁的体系のなかに取り込もうとする、ヘーゲルの「信仰と知」的モチーフ(プロテスタンティズム的な神が死して後、「嘗て歴史的なものであった聖金曜日に代わって思弁的な聖金曜日を再興しなければならない」ヘーゲル,G・W・F著,上妻精訳,1993,169

「……すべての論理的、倫理的、美的価値判断は、それらが必然的普遍妥当性を要求するというなら、私たちが上りゆくべき規範意識というものがやはり確信[=Überzeugungen]へと拵えられることを見出す」(Windelband,W.,1884(←1882a), S.43-44.)。

フィヒテ主義⁴⁴と関連して興味深いことに、実践的規範意識から主意主義との連携も窺える。彼は、『西洋哲学史』の〔カント解釈の〕ように、判断作用を通じた〈現象界〉の構成を、個人に内在する規範意識により為されると考え(Windelband,W.,1976,S.468.)、後期新カント学派の価値哲学、西南ドイツ学派を創始した。意識にとっての規範は妥当すべきであり、価値尺度となる一つの理想である。この「意識一般」の法則は、真理を意志するさいに成り立ち、もはや現象界に限定される自然法則ではない。すべからく、その現実化は経験的なものもつ価値を規定すべきなのである。このような決断主義的な態度決定的構えは、①ロツツェ哲学、②フィヒテの倫理学、③カントの『判断力批判』等、もろもろに源を求められる。

三、個性記述学と生の価値

ヴィンデルバントの価値哲学は、事実、価値判断の内容がほかの人によって承認されるかどうかはおいて、各人が承認を要求する〔べき〕超時間的な価値にもとづけることで、価値的な〈理念の相〉を権利づけようとした。理念的次元について、以下のように語る。

「人はこの「理想的/観念的な存在」を、「高次の」現実、真なる存在、オントス・オン[=ὄν τω ὄν存在中の存在]、もしくは物自体と呼んできたが、——たとえ私たちの〔感性的〕経験をとおしては現実的なものとして存在しなくても、それらで、ただ妥当するものを、ずっと念い続けてきたのである」(Windelband,W.,1884(←1883c),S.321-322.)。

……つまり生はうつろい過ぎゆくものならば、空しいではないか。彼はこの自問に答え、永遠の価値にすぎる。

「もし私が〔このような有為転変を〕超えうるといふなら、生の内容によってのみ、私の存^{エクシステンツ}在の価値によってのみ可能である。すなわち——私の生の継時中〈その何か〉を把握しえて私の存在の内容とできるならば、あらゆる時間的条件から超え出る〈その何か〉が有ることによってのみ可能である」(Windelband,W.,1884(←1883c), S.314-315.)。

ヴィンデルバントは、〈反復と習慣づけにもとづく淘汰〉(加藤泰史,2004,106 ページ。)により形成された規範に従って、自然科学のような法則定立学と、〔歴史学(Weber,.M., 1973 [1922])(←1903-1906).S.12, fn.1.=ロツツェ,30-32 ページ)におけるように、〕価値が関係する特殊に焦点を絞る個性記述学とを対置した(九鬼一人,2014(←1989),第一章第一節(3))。

法則定立学については『純粹理性批判』(例えば KrV.A132/B171.=4:236 ページ。)のように

ページが翳を落としているのかもしれない。Windelband,W.,1884(←1882),S.43 の Drang der Überzeugungen という表現に留意せよ。

⁴⁴ Windelband,W.,1921(←1884),S.175.= 枝重清喜訳,1928,13 ページ。「いかなる場合にも表象と評価、すなわち理論的機能と実践的機能とは、ただ抽象のかたちでのみ分かちえるが、しかし実際には同一の不可分で心的活動のまったく、相互に融合する両要素なのである」(下線ゲシュペルト)というくだりにも、フィヒテ主義が窺える。

「アприオリな諸規則に対する条件を含む悟性概念を現象に適用すること」を、規定的判断力が教えるのであり、そこで「特殊を普遍から導出する能力」における普遍は「すでに、それ自体において確実であって、かつ与えられて」(KrV.A646/B674.=5:328 ページ。下線ゲシュペルト)いる。したがって特殊を確定するためには、それを所与の普遍のもとに包摂すればよい。つまり「法則定立学」の定礎として、「規定的判断力」が考えられた。

他方、「個性記述学」は、特殊を端緒とする「反省的判断力」から構想された。つまりカントの『判断力批判』(「反省的判断力」)から、個性的記述学の命題は内容が特殊だとしても、主観的普遍性をもつという着想をえた。ちなみにリッカートに従うヴェーバーも、1913年の「社会学および経済学の「価値自由」の意味」のなかで、価値関係を文化価値〔被〕関係性と把握している⁴⁵。——歴史には大なることの徴づけがされている。一時期のヘーゲルには、大いなること(ナポレオン?)を見た[=hat gesehen]、という確信があった。しかるにヴィンデルバントの場合、価値的に大なる徴(大いなることそのものではない)を、歴史の軌跡に読みとろうとする。そもそも歴史に出来事が現われて、尺度があてがわれると、それは或る一定の大きさに収束してしまう。このさい『判断力批判』の記述が手引きになる。崇高なもの、例えば「広大な嵐にさかまく海原」(KU.S.245.=8:114ページ)は「粗野でまったく規則を欠いた無秩序と荒廃」(KU.S.246.=8:115ページ)において崇高なものである(第二三節)。それはかたちを超出していくダイナミズム、もしくはかたちを超えゆく歴大なるものである。大いなることがらについて、カントは次のように語る。力学的に崇高なものには限界がなく、はたまた数学的に崇高なものは、「絶対的に大なるもの」(KU,S.248.=8:117ページ)である(第二五節)。それについてのカントの叙述をたどろう。

「私たちは、端的に大なるものを崇高と呼ぶ。しかし、大なることと、或る大きさであることは、まったく異なる概念である(大 *magnitudo* と大きさ〔量〕 *quantitas*)。同様に、或るものが大きいと単純に (*simpliciter*)いうことは、或るものが端的に大なる(*absolute*,

⁴⁵ かくのごとくヴェーバーも、或る程度、足並みを揃える。「ヴィンデルバント〔哲学史§2.第4版(1907年)8ページ:ヘーゲルに託して「学の進歩」が語られている。訳書の引用ページ数(S.9)よりはヴィンデルバント原著 S.8 からの誤記。引用された箇所*~*は、ヴェーバーの引用の仕方とちがって、すべてゲシュペルトにより強調されている。〕は、私の考えではまったくすばらしい彼の「哲学史」の実用〔的叙述〕のために、近代ヨーロッパ人の文化価値被関係性[=Kulturwertbezogenheit]から出て来るひとつの特殊な「進歩」概念を用いているが、このことは彼が「哲学史」の主題を限定している仕方(「*〔哲学史とは〕ヨーロッパ人が彼らの世界把握〔と生価値判断と〕を学問的概念というもとに収めてきた過程*」)によるものである。〔このような「進歩」概念を用いることの帰結は同書 15,16 ページが引きあいに出されている。〕」(Weber,M.,1973[1922](←1917),S.525[S.487].=価値自由,75 ページ)。

続けてヴェーバーは言う、「ところでこの「進歩」概念は、一方ではけっしてあらゆる哲学「史」〔うへの出来事〕にとって自明なものでないが、他方、同様な価値被関係性を基礎にする場合には、ただ哲学史についてだけでなく、またほかのいかなる学問史についてばかりか、——ヴィンデルバント(同書7ページ,第1番,第2項)が考えているのとは異なり〔補足:哲学とほかの諸学問のちがいが。後者は^{狂詩曲的}rhapsodischな歩みをはじめ、何度も端緒に立ち戻る繰り返しであるのに対し、前者は確実な進歩を遂げてきた。〕——、およそいかなる「歴史」にも一般的に当てはまるのである」(Weber,M.,1973[1922](←1917),S.525[S.487].=価値自由,75-76 ページ)。

non comparative magnum 比較的に大ではなく、絶対的に大)というのとは、またまったく別のことである。後者は、あらゆる比較を超えて大なる或るものである」(KU.S.248.=8:117ページ。下線ゲシュペルト)。

あらゆる比較を超えた価値をもつものは、端的に大であるはずであって、比較の尺度に応じて小さくなってはならない。ヴィンデルバントは学問分類を方法〔のちがい〕に帰したが、個性記述学は何より、この端的に大きい価値の徴を、歴史に読み取ることに眼目があった。例えばピラミッドのかたちの壮大さは、しかるべき距離においてしか——近すぎても遠すぎてもいけない——立ち現われない。近すぎれば壮大さに焦点を結べないし、さるとして遠すぎれば卑小である。端的に大なるものは、同様に、情感的判断力に適った見地から徴づけられるであろう。大なるものは、そのことがら自体に即して(尺度抜きで)大きい。だが現存する諸事物に、あえて尺度があてがわれたら、有限なものしかなくなる。このように考えると、実のところ、それらのうちに崇高なものはない。「理念」だけが崇高である。主観のうちの〔「理念」に対する〕評価は、客観に対する評価との、取りちがえによって「理念」は崇高たりうる。それは以下のような『判断力批判』第二七節の考えを下絵としている⁴⁶。「……自然における崇高の感情は、私たちじしんの使命に対する尊敬であり、私たちはこの尊敬を、或る種の詐取(私たちの主観のうちの理念に対する尊敬を客観に対する尊敬と取りちがえること)によって、自然の客観に対して証明するのである」(KU.S.257.=8:130ページ)。すなわちヴィンデルバントには、価値(趣味)判断の主観的普遍性⁴⁷を、個性記述学における態度決定の基本とする。

ところでヴィンデルバントは生の哲学と、学問分類論(Vgl. Windelband, W., 1919(←1894) ⁴⁸, Bd. II. S. 145 に法則定立学／個性記述学の対比が見られる)上で対立すると、一般に言われてきた。実際彼は、ディルタイの心理学によって歴史科学は特徴づけられないと述べている。

⁴⁶ 「さまざまな人種について」論文に萌芽が認められる自然史における目的論的原理は、『判断力批判』へと通じている。とくに後者における「体系」概念は、自然や芸術の美しい産物から有機的存在者、はたまた学問・芸術・社会制度や社会構造のあり方にいたるまで射程に収めるが、それらにおいては、「自然目的」と「全体」との相関関係が鍵となっている。しかも、いかにして実用的な人間の知識が、一個の世界市民たる人格を形成するののかという、カント人間学の目的論的構図と重なる。この解釈はディルタイのカント解釈に負っている。ディルタイからアディケスへ／ベルリン、1905年1月10日「なぜなら宇宙やそこに位置する太陽系、このように規定された地球、これらをとおしてによって規定された一個の自然存在者たる人間との相関関係で推移するカントの宇宙的考察から自然科学が成立したごとく、人間学もまた、この連関外に出されて後方に置かれることなぞどありえぬからです」(Dilthey, W., 1905, (Hrsg.) Lehmann, G., 1969, S. 23.)。

⁴⁷ 2014年12月22日、一橋大学にて、院生よりヴィンデルバントの絶対的妥当性を主観的普遍性で理解するのは、無理筋ではないかとの指摘を受けた。そのため、叙述を変更した。

⁴⁸ Windelband, W., 1919, 6. Aufl., Bd. I. S. VII-VIII. によれば、すでに 4. Aufl. において内容の変更を加えていない旨が記されているから、発表当時の「歴史学と自然科学」1894の思想に Windelband, W., 1919, Bd. II. S. 136-160. からさかのぼれる。なお法則定立(nomothetisch)学／個性記述学(idiographisch)の区別は O・リープマン、1882年12月9日(1883年刊)の大学就任講義「哲学の伝統について」の nomokratische Fassung / idiotypische Fassung を承けているものと付度される(Vgl. Orth, E. W., 1998, S. 87.)。

ないし「その対象からすれば心理学は、ただ精神科学としてだけ、また或るイミではあらゆる他のものの基礎として特徴づけられる。しかし、その手続きはまるまる——もしくは方法的手順にしても——徹頭徹尾、自然科学のそれである」(Windelband, W., 1919(←1894), Bd.II.S.143.)としている。表面上の対立に反して、その論争から読み取るべきは、共通の方法的特質である⁴⁹。ディルタイの経験的〔「記述的分析的心理学」⁵⁰の〕方法に関連して、ヴィンデルバント 1894 年の「歴史と自然科学」(1894.5.1)に部分的に先立つ、ディルタイの 1894 年の「記述的分析的心理学についての諸考想」(1894.2.22/1894.6.7)を一瞥しよう。それは類型を求めるが、説明心理学とはおよそ趣を異にする。〔「記述的分析的心理学」とともに挙げられる〕「比較心理学」の示すがごとき、「リア王、ハムレット、マクベスのうちには、すべての心理学の教科書をあわせたよりも、はるかに多くの心理学が潜んでいることは、うんざりするほど聞かされている」(Dilthey, W., 1982(←1894), Bd.V. S.153. =3:653-654 ページ)。彼が精神科学において試みたのは、自然科学と異なる人間事象を「理解」する、新たなアプローチである。その対象領域は心理学的人間学から政治経済学・歴史・哲学・美学にわたる。彼の企ては法則の追求というよりはむしろ、——心的構造の記述を通じた——個体(個性)を研究射程に入れていた。ディルタイは、要素的なもの[=element 生が営まれる固有の環境]という〔個人・原子とは〕中立的な概念を導入し、その観点から自然科学と精神科学を定式化した後、それぞれについて連関を論じることにより、その基礎に言及しえた。自然科学では、「……自然の連関は、仮説の結合にもとづいて、補足的推論を介してのみ、与えられることになる。これに対して精神科学にとっては、心的生の連関は、根源的に与えられたものとして、つねに根底に存している」(Dilthey, W., 1982(←1894), Bd.V. S.143-144. =3:643 ページ。下線イタリック)。

——1895 年の「比較心理学」の「類型論」⁵¹として書かれた文中で——ディルタイは、心理学的平均像ではない、詩的想像力が媒介する「類型的なものの概念」[=der Begriff des Typische](Vgl. Dilthey, W., 1982(←1895/1896), Bd.V.S.279-280.=3:798-799 ページ。Vgl. Dilthey, W., 1978(←1887), Bd.VI.S. 185-188.=5.1.:258-262)に注目している。詩作における類型的なもの、理想的なものは、〔ヒュームの観念とはちがひ〕模写像より勝る。したがって現実的な

⁴⁹ とくにヴィンデルバントのヘーゲル的モチーフについては Orth, E. W., 2001b, S.25-37. を参照せよ。ただし、ディルタイが学問分類論で、あくまで対象の相違に注目したことに留意しなくてはならない。

⁵⁰ 伊藤直樹, 2007 は、ディルタイが、ミュラーの生気論やヘルムホルツの「無意識的推論」を参照して、それらを換骨奪胎し独自の哲学に仕上げたことを明らかにしている。その哲学が論理主義にわたる広表をもちえたことについては、その継承者ミッシュの論考から明らかである。山本幾生, 2016 参照。Weber, M., 1973[1922](←1904), S.188. =客観性, 108 ページの「経験的心理学」(強調引用者)は、ヴェーバーじしんの勇み足を正して(詩的構想力を含む類型の意義を強調する意味で)「比較心理学」とすべきである。

⁵¹ ディルタイによれば、精神的生の同型性・反復性を扱う「記述的心理学」とちがって、「個性、諸個性間の相違のニュアンス、親和性、類型」等、「個別化」の諸原理を扱うのが「比較心理学」である。彼は「記述的心理学」を改鑄し、経済学・〔音韻の法則的变化を調べる〕言語学・〔想像力の作用を扱う〕美学を包括する概念として、「体系的精神科学」を打ち立てる。

もののどんなにたしかな模写に比べても、もとより力強く感じられ、いっそうしみじみと理解される。具体的実相⁵²に接近する——そうした「比較心理学」では、もっぱら詩的想像力をかたどることに傾注された。マックリールの剗切な要約によれば、

「ディルタイが当然問題としたのはまさしくこの心理学の法則定立的性格についての考えであった。内的経験を記述し、個性性の発展を明確にしようとしたディルタイの努力は、彼の心理学を経済学と同様、ヴィンデルバントの個性記述的理想に近づかせたのである」(Makkreel,R.A.,1975,p.219.=大野篤一郎／田中誠／小松洋一／伊藤道生訳,1993,253-254 ページ。Vgl.Dilthey,W.,1982(←1895/1896),Bd.V.S.256.=3:773-774 ページ)。

ディルタイは、——1887 年の『詩学』において——法則の有効性について語り、そもそも法則定立的心理学が妥当するわけではなかった。詩的想像力に範をとり、個人の内的経験の比較がそこでは考えられていたからである(Vgl.Makkreel,R.A.,1975,p.94.=大野篤一郎／田中誠／小松洋一／伊藤道生訳,1993,119 ページ)。

同じくヴィンデルバントも、規範的事実的妥当性については「反復」「習慣づけ」に言及する⁵³。歴史哲学へと続く議論では——加藤泰史,2004,107-108 ページが述べるように——「目的論的連関をもった「反復」の探究が強調され、それゆえに「歴史科学」の「学問性」にも「自然科学」の方法論が積極的な役割を担うとされる」。たしかに「わたしたちの記憶全体が、概念として形成され、普遍妥当的に表現されるべき歴史科学は、それゆえに、その最高の前提条件として、普遍妥当的な価値体系を必要とする」(Windelband,W.,1919(←1907),Bd.II.S.20.)。つまり物体概念や因果法則にもとづく理論的概念構成が、歴史研究の方法と関係していることは疑いない。ヴィンデルバントの歴史学には、反復を基礎とする法則が浸透している。ただし、これが「歴史研究に特有の前提条件を成さないし、またそれ固有の意味ある目標を成しているわけでもない」(Windelband,W.,1919(←1907),Bd.II.S.20.)⁵⁴。

⁵² カント全集の編纂に当たり、ディルタイには心理学的／人間学的動機が認められるが、それはノヴァーリス論に見られる「実相心理学」「人間学」を背景にしていた。ディルタイは、これを「私たちの心じしんの内容を秩序づけ、それをその諸連関のなかで把握して、可能なかぎり説明を試みる心理学」Dilthey,W.,2005,Bd.XXVI,S.198 と定義している。〔「諸感覚が諸表象にかたちづくられ、後者が互いに関係しあうさい従う法則を求めることで、私はほかならぬ形式、すなわちそのうちで心が活動する諸形式を見出す」。その形式のうちで諸感覚が、人間世界観の連関的総体へと変容する説明根拠が存するのである。〕。公的な精神の連関を射程に含むこの学は、倫理学の基礎づけに当たる。ヒンスケによれば、カントの人間学がもろもろの命法の由来になったことと考え合わせると興味深い。

⁵³ 加藤泰史 2004 によれば、ヴィンデルバントは、(自然)淘汰過程[=Selektionsprozeß]を通じて成立する規範を説く文脈で、次のように言っている。「すなわち、表象および感情過程の心理学的法則に従えば、次のような活動形式〔規範〕が承認される客観となることは自明である。自然必然的反復および習慣づけを通じて、頻繁に現われ、しかもより包括的な意義[=Bedeutung]に達するような活動形式がそれである」(Windelband, W.,1884(←1882b),S.227.)。規範意識は、後年の「歴史哲学」(Windelband,W.,1916,S.51.)で言及される「類的記憶」から導き出されるものである。それによる選択は、反復・習慣づけを通じた伝統と同じ成り立ちを示す。

⁵⁴ ヴィンデルバントは、「現代における哲学の状況と課題について」(1919(←1907),Bd.I.,S.20)でこの考えを包括的に叙述したものとして、リッカートの『自然科学的概念構成の諸限界』(1896-1902年,Gr1)に言及している。

だからあくまで自然科学は類型的に反復された事象を研究対象にしているのに対して、歴史における、反復といっても自然現象にかぎった「反復」⁵⁵は問題にされていない(加藤泰史,2004,106 ページ)。反復的に再構成される「伝統」の目的論が問題なのである(加藤泰史,2004,113 ページ)。それがヘーゲルのごとき理性の自己展開を断念している以上、自己を相対化する「多元的哲学史」の可能性に拓かれることになる(加藤泰史,2004,131ページ)。つまり啓蒙後／脱形而上学の哲学的伝統の、啓蒙主義への反復／理念的次元への傾きを継承している。判断の態度決定を促迫／禁制するのである。理念とはそうした次元に端を発する。

2.超越論的観念論(1900年代)

一、ヘーゲル主義と価値論

1900年代の前期リッカートに即して、価値論の構想を分析しよう。[リッカート哲学の]変遷は以下に掲げることである⁵⁶。まず価値の体系の形成期(Rickert,H.,1913b から Rickert,H.,1921a より前：本稿ではこの形成期を中期と呼ぶ。)を挟んで、体系以前の前期と体系確立後の後期に分けられる。——中期・後期を特徴づけるのは〈心理主義からの離脱・「超越的意味」[=der transscendente Sinn,Rickert,H.,1909,S.193.の表題]の導入)による論理主義への傾斜である。まず前期リッカートに注目し、その後、可及的に中期リッカートに触れる(次章 3.)⁵⁷。

⁵⁵ ただしディルタイの類型論は、「反復」を旨としていない。加藤泰史,2004,123 ページの「類型的反復」はディルタイには妥当しない。

⁵⁶ 九鬼一人,2014(←1989)における、前体系期が前期、体系期が中期・後期に当たる。後期に続く晩期リッカートは、形而上的存在(形而上の世界全体)の思考では、此岸の素材を最終的に除くよう、改釈される[=umdeuten]。ただし、認識といっても[あくまで]象徴的認識(Vgl.Rickert, H.,z.B.1927,S.183,Z.35-40.)であったことに注意しなくてはならない(Vgl.Zocher,R.,1963,S.462.)。

⁵⁷ リッカートの『自然科学的概念構成の諸限界』では、『認識の対象』中の真理価値があまり議論されていない。文化科学的認識を扱うそれでは、「歴史的中心」[=historisches Centrum Vgl. Gr1,S.561,usw.]論が重要な位置を占めており、これが次の認識論的「構図」を与えている。

歴史家は客観的価値に対して態度をとることを通じて、研究対象に価値を関係づける。この研究対象そのもの、つまり「精神的存在」が、その同じ価値に態度をとる。その「精神的存在」が「歴史的中心」にほかならない。歴史研究家の認識の基準と「客観」の側の価値が同じとなることで、そうした「精神的存在」のもつ性質を記述できるとする。ただし九鬼一人,2003,67 ページで、「1900-1910 [年] 代の新カント学派がヘーゲルの影響下にあり——ディルタイと並行的に——ヘーゲルの「客観的精神論」を継承するという意味をもっていた」と断じているのは、ヘーゲル受容をいささか単純化しすぎている。

「精神的存在」に与りながら構成されてゆくのが、文化科学の研究対象である。リッカートと歩みを揃えて、文化科学を構想したヴェーバーとの関係を補っておこう。ヴェーバーは、「リッカートによって強調された他人の心的生への原理的接近不可能性」(Weber,M.,1973[1922](←1903-1906), S.12.fn.1.=ロッシヤー,30-32 ページ)に言及する。このヴェーバーのリッカート解釈には、誤解が含まれている。たしかにリッカートの言い分によると、自然科学的手続きをとる心理学者について、このヴェーバーの言は当たっている。「[すなわち] こうした根拠から自然科学的手続きをとる心理学者は、自分の心的生[=Seelenleben]をもって、心的生に例外なく妥当する概念を獲得できるが、……そうしたところで、彼はせいぜい〈他人のそれへの原理的接近不可能性〉にたどりつくぐらいなのである」(Gr1,S.533.)。とは言うものの「歴史家は他者の心的生をまさしく、その個性的特性の観点から記述」できるのである(Gr1,S.533-534.)。この点、向井

表二 リッカート哲学の時代区分

前体系期(前期)	形成期(中期)	体系期(後期)	晩期
1909年より前(『認識の対象』GE1:1892/GE2:1904)	1909年(「認識論の二途」)から1921年より前	1921年(『哲学体系第一部』)から1927年より前	1927年(「叡智界の認識と形而上学の問題」)以降

Krijnen,C.,2002,S.163-165によれば、ヘーゲルとリッカートとの共通点は以下の点に見出される。

第一。個別科学は対象領域に制約を受けており、非反省的前提というものが要求される。他方、哲学は”原理論的に”[=prinzipientheoretisch]理解された全体科学であって、集塊的全体ではなく、具体的総体というイミで全体を規定する。本質的な諸連関をもつために、相関項の抽象的対立は止揚される。それに対応して直接知に定位する直観主義・感情哲学等は否定され、対立の看取にとどまらぬ「概念」[=Begriff]に即して、それへの携わり^{アルバイト}として学は、捉え返される。

第二。論理学を対象性の論理として規定した。それにおいて、思考の客観性が取り扱われる。思考の客観性は概念にうちに存する。ということは、ヘーゲル／リッカートに

守,1997,189ページの記述によると、ヴェーバーは「リッカートの「他人の心的生への原理的接近不可能性」というテーゼには批判的であった。リッカートは、人間は自己の精神生活を直接に観察することはできるけれども、他人の精神生活にはそうすることができないので、ただ「推理の複雑な連鎖」という間接的な仕方、推測するにすぎないという理由から、原理的に他人を理解することは不可能であると主張した」としているが、これは当たらない。なぜなら〔解釈学的〕「理解」の途が残されているからである。

瑣末な点にわたるが、「クニース(一)」でヴェーバーが、かつて消極的だった(Weber,M.,1973[1922](←1904),S.173.=客観性,78ページ)「理解」概念に対して、——精神的現象の理解は、「原理的には「非合理性」が少ない」(Weber,M.,1973[1922](←1903-1906),S.67.=ロッシヤー,139-140ページ)と——肯定的態度をとったことは、ディルタイへの傾倒がひとつの契機になっているのだろう(向井守,1997,308ページ)。だがそのきっかけは、もしかするとリッカートにあったのかもしれない。リッカートの場合、研究者の関係づける価値は、「歴史的な中心」である他者が態度をとる価値と異なる可能性もある。「もしくは：芸術家が時空的に遠く離れている諸過程である場合のように、精神的存在の諸価値[=1.Aufl.Werthe,2.Aufl.Werte]は、記述者の諸価値と同じでない。さらば歴史家／彼は理解するかぎりでは、それに習熟し[=sich in ~ hineinleben]なくてはならない。〔それが理解である。〕それなら、この存在は彼にとって、その一度かぎりで個性的な、為すこと[=1.Aufl.Thun,2.Aufl.Tun]ないし為さんとすることが、次いで／後を追うかたちで歴史家の興味をひくものとなる。彼はそれらに向かって歴史的にのみ観察して振る舞おうとする、つまり〔評価ではなく〕理論的に価値にのみ関係せんとするかぎりでは、それじしんが態度をとる価値以外のなものでもないものを、この存在の描写にさいしても、本質的なものを非本質的なものから区別することに使用することができる」(Gr1,S.566;Gr2,S.500.斜体は Gr1のみ・太字は Gr2のみ)。研究者側の価値は、「歴史的な中心」の価値に接近、ひいては合致するとする。つまり、リッカートは他者の生にテキスト媒介的に入り込み、相手の生を〔解釈学的に〕理解する、と言うのである。

なお精神科学とリッカートの距離は Gr1 よりも Gr2 の方が遠ざかったように思われる。Gr1,S.562の「歴史的な中心」が「記述の精神的中心」であるという表現に、精神科学との近さを見出せる。GE2,S.496の対応箇所にはこの表現が見られない。ただし Gr2,S.505のごとく「人間の精神生活」を視野に入れた議論は、Gr2にも見られる。

としては意識哲学の定式化を借りると、思考の客観性は「概念」、つまり自己意識の統一のうちに存している。

第三。形式的もとづけモデルを拒否する。類概念を抽象的に捉えないヘーゲル／リッカートにとって概念は、具体的なものの可能性の条件であると見なす。形式は対象性の原理としての思考そのものである。理論的理念の構成的な機能を拒絶するカントをさらに発展をさせて、両者ともども認識の最終的のもとづけを取り運ぼうとする。それによって首尾一貫した観念論として哲学を理解することが可能になった。

第四。認識機能的な論理の必然性は、内容をもつ対象知であらんとする認識の要求と結びついている。思考は認識と認識批判とのかかわりをまとめる。あらゆる対象性の原理として、思考は自分じしんのうちに思考を規定するものを含んでいる。したがってヘーゲルもリッカートも概念の真理を問い、概念のうちに含まれている存在に係留する。主観・客観区分は、認識関係外で対立するという両者のかかわり方の極まりとは、まるきりちがっている(認識機能的なかわりである)。”認識機能的”な思考じしんが差異をはらみ、そこから思考と対象とが派生する。意識の外にある、即かつ対自的な意味を語ることはできない。即自とはつねに思考を内在的に規定することである。ヘーゲルの意識の内在は絶対意識のなかでのそれを含みうる点で、リッカートと位相を異にする

第五。対象的論理は”原理論的論理”である。その論理は、分析的であるのみならず総合的でもあり、抽象的であるのみならず具体的でもあり、外的連関をもっているのみならず連関に必然的に内属している。

第六。知の妥当の問題は、二重の相のかたちをとった。つまり真理と^{ゲヴァイスハイト}確實性(後者で何を言いたいのか詳らかではないが、^{エンブフィンドゥング}感 覚 的確實性、つまり経験基底的な認識を考えているものちと思われる。ヘーゲル)、認識の対象と対象の認識(リッカート)という問題である。論理的なものの具体化は、客観性の根拠としての思考で、もとづけられる。もとより、思弁的なヘーゲルと批判的なリッカートのちがいはあったが、思考が「根源の論理」として働いていた。

第七。対象の規定と、知のなかで意識された規定とは、もはや対立することはない。かくのごとき知の妥当規定性は、知に内在する規定性として把握されざるをえない。そこで両哲学者では、体系という意識展開の^{デアグクツイオン}径行^{キョウコウ}き(『精神現象学』緒論「絶望の径行き」!!)がとられることになる。

リッカートは1931年6月9日の講演で、以上のことに関連して、哲学のハイデルベルクの伝統に言及している(Wiehl,R.,1985,S.414-415.)。そこで、カント主義・ヘーゲル主義のなかに、ドイツ観念論の哲学的伝統に沿った統一性を認めたのである。リッカートは、ヘーゲルに従ったハイデルベルクの哲学での、この統一的志向を、歴史的・体系的思考の結合がもたらす形式を手掛かりとして、共に信じていたのである。かくしてヘーゲル哲学の基本的意想が活かされた。「哲学史」と「歴史と体系の結合」(としての論理学)という主題に、ヘーゲル的な学概念が賦与されたのである。これは、リッカート哲学の学的性格と密接に

結びついている(『近代文化の哲学者カント』を想起せよ)。

とはいうものの、形而上学と一体化していたヘーゲル哲学との、リッカート哲学の懸隔をいくら強調しても強調しすぎることはない。そのさい新カント学派的思惟の特徴を成していたのは、形而上学的思弁や実証主義的短慮によってえられるものではない。翻ればヘーゲルは存在の自己展開として絶対精神への経路を理解していたが、カントの場合、批判的態度がそれに対置されるからである。

とりわけリッカートとカントとの並行関係が顕著に認められるのが、認識の原則への問いであったことは、贅言を要さない。Krijnen, C., 2001, S. 49 の記述を要約すると、

「[リッカートの場合] 認識の尺度を構成する原則の妥当を、根拠づけられた知は前提する。したがって価値・反価値に則して認識能力を評価することが、枢要な課題となる。認識の主体としての「理性」へ遡及が、認識の妥当を規定するさいの媒介項である。【客体】といえども、すべて所産であり、認識作用と認識者とが生み出したものである。したがってその原則は、意識のうちに求められる。認識が客観的であるためには、その規則に従って方向づけられなければならない(KrV.B242.=4:295-296 ページ)。かくして主観に基礎づけられた客観性が成立するわけである(KrV.BXVI.=4:34 ページ。コペルニクスの転回)」。

クライネンの記述は観念論に向かい、幾分リッカートの経験的現実とつじつまがあわない。その記述は、实在論とは距離をおく。「経験の可能性 [の条件]」という前提が強調されるが、リッカートの場合、「現実」の实在論的傾向は払拭できないのではないか。このことに関連して、後にクライネン/ライナー・バーストにあらがった論陣を張りたい。すなわち観念論的態度決定説に対向した、(経験的)实在論的解釈を前面に押し出したい。

脱形而上学的態度は、世界観学にも反映している。つまり形而上学後の意味闡明を目指したのである。ニーチェの神の死という認識が、意味や価値に対する問いを先鋭化させた。古典的に形而上学的根拠の源は、統一的な理性意味の拒否、自然主義的(進化論的)還元論に裁量を委ねた。これらは虚無主義をかたちづくり(Krijnen, C., 1998, S. 11-12.)、間接的なかたちでヘーゲルと相対的に距離をおくこと、ひいては脱形而上学化が、新カント学派の趨勢となった。かくして世界の観望に新しい地平が拓かれる。

絶対的観念論という「神の支配」の後、① [もはや絶対精神の自己展開ではなくなった] 歴史認識という問題が前景となる。つまり「理解」と精神科学の可能性という問題である。②現実の総体は「学」という枠をはみ出し、生へと浸潤する。その結果、ディルタイのごとき、世界観学の問題構制が生み出された⁵⁸。そこにおいては③「善」・「絶対的目的」・「存

⁵⁸ なおリッカートの世界観学の、ディルタイとの対質は、Rickert, H., 1924b, S. 21-22 を見よ。「実際、私たちの証人の一人、ヴィルヘルム・ディルタイはおそらく私たちの問題に対しては、まったく違った意義で論究するであろう。それゆえ、彼の文章を——ディルタイならばとるような体系的力点から、そもそも語れば——私たちの思想に関連づけて利用することには、彼は同意に難色を示すだろう。そこで私たちはあらゆる場合に次のようにする。すなわち、ほかの研究者たちが到達した諸成果を、かれらがそこでもつ思想連関から可能なかぎり十分に解放し、彼らが研

在すべきもの」の統一は崩れ去り、現実はもはや神学的に把握されなくなる。これと軌を一にして、実証主義が一定の力をもつようになる(Vgl.Krijnen,C.,2001,S.73-75.)。これらの世界観学のトルソ⁵⁹は、すでに1905年の「歴史哲学」⁶⁰で与えられていることに注意しよう。

すなわち Krijnen,C.,2001,S.123 によると

a) 聖的生への予言論的指図を呈示する哲学を煽り立てるがごときは、金輪際なかった。むしろ理論的なものと非理論的なものを学的に明らかにする〔というより区別する?〕世界観学を構想したのである。

b) 哲学の全課題は、価値論というかたちをとるときにだけ、充たされる。

c) 哲学と理論外の世界観との尖鋭的な対立は回避され、世界観学の概念には、哲学の理論外的世界観への関係が内属することになった。「学的世界観ならびにそれから生じる純理論的世界観とともに、もしくは対抗して、非理論的な世界観が立てられるなら〔中略〕、世界と生とについて究極的な理論的明晰性に達することを期待できよう」(Rickert,H.,1921a,S.33.)。

「されども非理論的な源から作り上げた世界観があるとして、その特性にわたって要求するものが理論的明晰性に他ならないとするならば、哲学にそれ〔明晰性〕を期待してよいのも、もつともである」(Rickert,H.,1934,S.15.)。——世界観学についてはグリフォエン「リッカート、ヴィンデルバント、ヘーゲルと世界観の必要」(1998年)を見よ。彼はリッカートを跡づけるが、キリスト教は、その価値観の中心にあることに驚かされるは変わらない(Rickert,H.,1924b,S.84-93.)。「キリスト教〔的宗教〕の中心に立つものは、神の子たり、人格的愛たることが、とりわけ非合理的な契機としてある」(Rickert,H.,1924b,S.89.)。そのかぎりでは宗教〔的傾向〕のうちでの統一である。とはいうものの、他方、リッカートは脱神学化された理^{ロゴス}にも形而上学の失効を見出している(Vgl.Gr2,S.404-406.)。そこから彼の世界観学は、脱形而上学後の現実の「意味の総体」を探求するものと言うことも許されよう。

〔後年、彼が言うところによれば、弁証論 Vgl.Rickert,H.,1924b,S.153という〕「その問題を論究することによって、宗教哲学の問題を頂点とする包括的世界観学のための基礎が置かれるのである。数学や物理学についての理論はただそのための準備である。根本問題はこうである。すなわち、私たちは世界や神性の「本質」について何を認識することができるか」(Rickert,H.,1924b,S.153.下線ゲシュペルト)と、全世界へ問題が拡張するのであった。この「価値現実」の話は本稿では脇におく。Vgl.Ollig,H.-L.1994,S.131-132.]

内容において開かれた世界観学(Krijnen,C.,2001,S.124.)では——リッカートの多元的な世

究の目的と認めえなかった思想系列のなかにおくのである」。このようにリッカートはディルタイとのちがいを対自化していた。

⁵⁹ リッカートの多元主義については、Rickert,H.,1934,S.255-301を見よ。ハイデルベルクの伝統、もしくは「現実的なものの流れの截り出し」「本質的な構成要素の選択」Rickert,H.,1926,S.36という認識論的結構が、すでにして世界観学を要請していたのである(「非本質的なもの」から「本質的なもの」を区別する)ことについては、Rickert,H.,1899,S.30.)。Vgl.Signore,M.,1994,S.487-491.

⁶⁰ 第二章「歴史的生の諸原理」で「価値学」が要請される。

界観の構成契機それぞれに、独自性を認めることができる(Griffioen,S.,1998,S.61.)。リッカートは、異なりをはらむ生意味について、その問い〔の端緒〕を世界の包括的全体に求めた。そして完結的全体、つまり体系性を志向したのである(Griffioen,S.1998,S.63-64.)。文化が分断されるのは、生の細分化と結びついているが、世界観学をとおして、その克服が目指された(Griffioen,S.,1998,S.64.)。哲学は価値学[=Wertwissenschaft]／世界観学としてのみ、その全体的課題を為し遂げることができる(GE6,S.IX.)。価値学はリッカートにとって、普遍的「世界観」の基礎〔の役割〕を果たすのである(GE6,S.IX.)。すべての哲学は、リッカートでは、第一に価値を、第二に主観によるその現実化を、問題にする。哲学はかくして包括的価値論(Rickert,H.,1927,S.118.)の観を呈する。方やディルタイでは、帰納的方法が導きとなって世界「観望」の学が形成された。ディルタイによれば「世界観の究極の根底は生である」(Dilthey, W.,Bd.VIII.S.78.=4:489 ページ)が、生は歴史的存在であるから「比較歴史的方法のみが〔世界観の〕類型の提示、その変動、発展、交錯に近づきうる」(Dilthey,W.,1977(←1911),Bd.VIII. S.86.=4:497 ページ)。彼の世界観学、世界観の類型化は経験的な生の自己省察、つまり歴史的考察をとおした、ひとつの理性批判と見なされた。たとえ、その軸足が心理学から解釈学に重きを移したとしても、歴史的資料というアポステリオリを手引きとした「類型化」(「比較心理学」)がなされる。

リッカートにもどれば、生の包括的解明のために「人間の、生の目標もしくは生の意味[=Sinn]の把握」(Rickert,H.,1921a,S.25.)をあらかじめ必要とした。つまり世界観の基礎には、指針となる理念的次元、価値アプリオリがあるにちがいない。したがって彼は、世界観学が価値の体系にもとづかなければならぬとした。ディルタイが世界観の類型について、帰納的方法を唱えたのに対して、リッカートは歴史的に開かれた資料とは別に、超時間的価値の体系を要請した。こうしたちがいにもかかわらず、世界の「観望」はディルタイ／リッカートに共通した問題関心であった。例えば文化史に接近した世界観学を構想するリッカートを見てみよう。彼はわざ(タート)を強調し、ゲーテにおける〈わざの精神〉にカント的实践理性の優越ばかりか、トータルな世界観による人格の統一を見出した。

「ファウストの最も深遠な本質は、目的意識をゆるがさず、これまでも明確に活動〔性〕を目指してきた以上、その最も純粋なかたちで、いまやここに貫徹される。

(Faust:10180-10190.)

この地球には／いまだわざなす余地残し／驚嘆せしむ壮挙あるべし／わが力こそただひたむきに傾注すべけれ

メフィストフェレスは、いつものことだが、ファウストの究極の動機を理解していない。彼はそこで、女傑ヘレナに吹き込まれて、ファウストが今望んでいるのは名声だ、と考える。けれどもそのことを、きっぱりたしなめて、ファウストは自分の眼中にあるものは何であるか、はっきりと言い切る。

われは統べて、占有せん／わざをもってすべてとなす／名聞の虚しうす」(Rickert,H.,1922a,23-24 ページ)。

このように人格は統握されつつ、生の具体的わざ(活動)をとおして陶冶されてゆく。そこでレールな心理過程への眼差しも生まれ、超越倫的方法とは裏腹に心理主義への傾きも生まれるのである。つまり世界「観望」へと臨む生は、経験的人格に立脚している。「一切の真に包括的な哲学は、私たちのすべてを包括する生の哲学でなければならない」(Rickert,H., 1922b,S.181.)。このことはリッカートの経験的人格が完結を志向しながらも、無限の多様に直面して有限の制約を課せられることと対応する。そこで生の解明のために世界観を扱わなくてはならない。かくのごとき世界観の基礎には、リッカートの価値〔体系〕への洞察があった。すなわち形式は超時間的であるものの、内容は歴史的に変転する。その条件のもとで、経験的な価値哲学を構想したのである。かくなるものとして世界観学は、価値学、「妥当〔者〕」と「当為」の理論として現われるのである(GE6,S.439,mit Rickert,H.,1921a,S.IX, S.27-29,S.32,S.67,usw.)。

Krijnen,C.,2001,S.124 の世界観学の総括によれば、

「世界観理論としての哲学は、したがって(異定立的に媒介されて)二重の側面をもっている。それは、リッカート解釈に決定的〔に重要〕である。世界観学は価値論にもとづいて意味 [=Sinn] を解明するが、世界全体と連関をもった人間的生は、そうした意味を具えている(GE6,S.439.)。さてこの区別は、哲学にとっての価値の地位がかかわるかぎりでは意義[=Bedeutung]をもっている。哲学はたしかに、生の意味を究明しようとするとはいえ、そのさいやはり価値と出会うことは必然的である。生の意味を哲学的に解明することは、生に意味を授ける価値を明らかにすることであると、想定されてすらいからである(Rickert,H.,1921a,S.142.)。価値概念なくしては、意味・意義に則した学制的規定をなしえない(Rickert,H.,1932,S.101.)。まさにおよそ、その根本には価値理解がある(Rickert,H., 1921a,S.142.)。世界観学は、およそ価値理論を根底においてのみ可能である」。したがって「新たな哲学的人間学は人間への問いかけを前面に押し出し、哲学的人間学を、断然哲学的根本学として仕立て上げた」(Vgl.Krijnen,C.,2001,S.333.下線イタリック)。

このようにして、生に意味を授ける価値を意識にもたらしうると考える。されば(態度決定を行う)超越論的心理学は、価値関係、ひいては世界観学と連携する。「価値は一方においてその特性に即して理解され、他方、価値にもとづいて生の意味は解明されるべきである(Rickert,H.,1913b,S.296,S.299.)。したがって、人間にとっての意味を知ろうとするなら、人間と価値妥当との関係を理解することが重要である」(Vgl.Krijnen, C.,2001,S.124.)。

このさい現実的なものは認識の尺度(対象)としては機能しない。そこで当為という尺度が必要となる(Krijnen,C.,2001,S.356.)。「基体(主語)は現実判断においてあるところの現実的なもの、つまり(経験的)存在者であり、述語は現実判断においてあるところの現実性、つまり「がある存在」(GE6,S.203-204.Vgl.GE6,S.183.)にすぎない。つまり主語が内容に当たり、述語が形式に当たる。世界総体を扱うには形式的価値の領域にも踏み込まざるをえない。かくて主体(主語)たるヘーゲルの絶対的精神は否定され、主体は脱形而上学化された。しかる後、カントの超越論的弁証論を承けるかたちで、「現実性問題」が追究される。

二、内在主義と現実の化肉

振り返れば、ヴィンデルバントにおいては、^{ロゴス}理それ自身がヘーゲルの様相をとどめていた。例えば「ヘーゲル主義の再興」のなかで独立に自存する価値・即自的真理 (Windelband, W., 1919(←1910), Bd. I. S. 285.) に言及しているが、そうした〈現実〉は、物的存在の意味や事実的生起ではなく、ロツツェの妥当である (Windelband, W., 1919(←1910), Bd. I. S. 285.)。これとの対比で言うのなら、リッカート哲学は価値との関係を、^{ロゴス}理への関係として扱った。リッカートは、その関係により、(ヘーゲルの産出ではなく)「超越論的」にかかわりえたのである。とはいえ多分に心理的促迫 *urge* / 禁制 *prohibit* によって制約されている。——リッカート認識論の基幹構図を見てみよう (九鬼一人, 2014(←1989), 第二章第一節)。Krijnen, C., 2001, S. 324. のごとく、主観的恣意にまかせるならば認識課題を欠いてしまうが、いやしくも〔主観的な〕認識ならば「対象の概念」の「統一性」はその契機となる。ヘルマン・ロツツェ流の妥当する「超越的価値」は、客観として主観の認識に対する規矩となる。方や主観には、すべての意識内容を捨象した作用として「意識一般」がすえられる。それに対して客観から、例えば「雪は白くあるべし」のような、「雪は白い」という判断を促す「超越的当為」が顕われる。判断とは、それに応じて、問いに模しうる〈主語表象と述語表象の表象結合態〉に答えることである。こうして「意識一般」は「雪ハ白イトイウコト」という相在を構成し、ひいては「白い雪」という「現実」を内在に取り込む。すなわち価値を介した「現実」へのアプローチ、これが超越論的観念論の構えである。〔(2)では前期リッカート『認識の対象』1. oder 2. Aufl. に禁欲する。〕

リッカートにとって定立された「現実」は、根源的な多様として、彼岸に〈価値〉を想定する。「現実」の定立とは、価値を介した「現実」の化肉 (九鬼一人, 2007/2008) ⁶¹ を意味する。化肉した「現実」こそ経験的文化科学の対象となる ⁶²。

⁶¹ GE3 の「超越論的心理学」に限定するが、そこでの議論は前期リッカートにもあてはまる。なお前期と中期とのちがいについては後述(とくに 3・二)を参照せよ。とくに Gr2 より Gr1 の方では、「表象」が前面に出ている (Gr1, S. 34, S. 35, usw.)。概念的操作としての普遍化と個別化が並列するのは、Gr2 である (Gr2, S. 316.)。かけがいのない個体も Gr2 で強調される (Gr2, S. 317, S. 318, S. 334, usw.)。

⁶² デルタイは、カントが人間学でアポステリオリを強調したと解釈する。ただし自然存在者としての人間と、^{フュアシュテンド}超越論的意味における人間とのかかわりあいも、カントにとって問題であった。そのことは、実践的問題でも感性的契機と接点をもつという論旨と符合している。例えば自然的存在としての人間の、具体的目的たる幸福は、超越論的主観にとって道徳法則と即すときにかぎり、追求されるべきであるとされた。『実践理性批判』KpV. S. 9, Anm. = 7:131-132 ページ, 原注, 『判断力批判』KU. S. 434, Anm. = 9:113-114 ページ, 原注等で、生と価値・幸福の問題が問い直されている。

そもそもカントの『純粹理性批判』の B 版演繹論をひもとけば、悟性が感性に働きかけるさい、生きた〈身体〉が介入する論理構成となっている。すなわち「生産的構想力」が働きはじめる地点で、「手」が線を引くことにより「図式」を構成するくだり(とくに『純粹理性批判』B 版第二四節の「手」で「線」を引く能作を想起せよ)は、身体をもった [=körperhaft] 個人による感性的認識を含意する。——「〔感性的なものの〕無力さの所以は、創造能力に意味を賦与する能力つまり身分けが、^{身体的分別}純粹理性という語感のせいで、ないがしろにされてきたことに根拠を置いて

彼の場合、「現実」という形式が内在領域に帰属すること、しかもヘーゲル主義に比べて、「現実」に絶対性が薄められていることに注意を要す。「すべての学的概念構成の客観性を支えるものは価値の妥当に限定されるており、決して現実の現存ではありえない」(Gr2,S.591.太字は Gr2 のみ。)と言われる。

「現実」について、リッカート研究家ライナー・バーストは以下のように語っている。

「普遍〔的〕学としての哲学的方法的本質は認識である。すなわち(体系に手をつけることではなく)哲学的方法的基礎づけであり、したがって認識論ということになる。それは、認識相関の二つの項、客観と主観、つまり認識される対象と認識する自我を考えに入れなくてはならず、カントがもとづけリッカートによって姿を変えた超越論的観念論へと展開を遂げた。「何か現実的であるものは、ただ思考されうるにすぎない」(Rickert,H.,1934,S.36.)。現実とは「たんなる」思考の形式に「かざられる」。つまり各々の意識と独立な現実的なもの、つまり「超越的実在」〔を想定すること〕は認識論的な背理である (Bast,R.A.,1999,S.XVI.下線イタリック)。

現実的な客観は認識の尺度(対象)としては機能しない。そこで当為という尺度が適用される(Krijnen,C.,2001,S.356.)。

意識に独立な超越的存在者の概念がそもそも有る。その概念に従えば、その存在者は決して意識内容であってはならぬ。それが仮に存在するなら、直接的所与⁶³であるレアールな意味世界の外部、または背後に存在するものとして問われよう(GE6,S.22-23.)。主語は現実判断の位置を占める現実的なもの、つまり存在者である。述語となるのは現実判断が帰属せしめるところの「現実性」、つまり「がある存在」である(GE6,S.203-204.Vgl.S.183.)。

「超越的現実」がとり上げられるのは、あくまで借問の文脈にすぎぬことに注意すべきである。——これに関連して、1904年の『認識の対象』第2版における「現実」の用法について触れておこう。「現実」は、基本的に「異質的連続」と呼ばれる、概念と直観の多様との織物、すなわち経験的現実(ただし後に述べるように、「科学分類論」系列⁶⁴では知覚的表象は論理的に裸である、と解する余地はある)である。「何かが現実的であるという判断の、対象性」「がある」の形式を、表象に与えるのは「判断の対象」である、と後年、定式化されるように(GE6,S.148,「現実性」の概念参照)。『認識の対象』第2版の Kap.III, § 1,S.76 の

いる」。身分けそのものが賦活されるためには、純粹理性を超えた新たな見地へと、引き受けてゆく裁量を、ふるうよう要請されたのである(Kaulbach,C.F.1990,S.296.)。牧野英二,1996はカウルバッハの問題提起を引き受けつつ、それを批判するかたちで「判断力」を管制高地に置いて、(ニーチェ的「身体」の含意を活かしつつ)方向を定める感情に主観的な根拠から、普遍妥当性にいたる回路を探っている。

⁶³ 「内容の内容」、内容相関者は、一種、非論理的な[=alogisch]Xを構成する(Rickert,H.,1921a,S.53;1924a,S.13.)。それ自体は洞察を拒む与件にとどまる。それは「内容性の形式的契機」と対向して、非論理性を示す(Rickert,H.,1924a,S.13;1921a,S.53.)。したがって論理的思考を要求するリッカートでは、学的な現実と日常的な現実(知覚)が区別され、後者が非論理的なものとした。

⁶⁴ 『認識の対象』諸版を「認識の対象」系列と呼び、『自然科学的概念構成の諸限界』『文化科学と自然科学』『歴史哲学』諸版を「科学分類論」系列と呼ぶ。

「超越的現実」に言及する箇所では、事物と表象とが一致する場合を想定した話である。Kap.III, § 2,S.85 の文脈では「認識の対象として超越的現実を要求すること」も、一見もってもらしい要求にすぎないことを強調している。もしくは「判断から独立なるものは超越的現実でないが、認識にとって、主観とはまるきり依存しない「客観的」試金石を作るに足る」(GE2,S.85)。また Kap.III, § 3,S.110 の箇所も参照のこと。「表象が、その記号であり、模写となるべき、超越的現実に対する要求は、いまやいかなる場所にも存在しないからである」。

『認識の対象』第3版でも認識の対象を「超越的現実」と呼んで問いへと向かう。GE3(1915b),S.21 で「超越的現実」という語を使う文脈は以下のとおり。「私たちの問いは、以下のように定式化できる。〔中略〕内在的現実にかかわらなくてはならないのか、それとも認識の諸対象たる超越的諸現実にかかわらなくてはならないのか」(GE3,S.21. Vgl. GE4/5[1921b],S.19. GE6,S.21では「認識の諸対象つまり認識の諸尺度」)。また GE3,S.22-23 では「超越的現実」を実在的と呼ぶ習わしを踏襲しながら、一方で物体界や心的存在は実在ではないなら、「超越的現実」は不要 *ohne transzendente Wirklichkeit auskommt* と断じている。

いずれにおいても「超越的現実」の実在性は、「括弧」に入っていることに注意しなくてはならない。かくのごとく「現実性」は、価値判断が負荷する一種の形式と言える。しかしながら、以下の議論では、これらの引用の強調点をずらす。つまり(意識内【客体】を)実在論的に解釈する試みを企てる。このことは、内在的領域に「現実」が取り込まれるということである。経験的な「現実」が主観的意識の相関項[Vgl.Relationismus]であることは、このイミで言われている⁶⁵。これに関連して次のカントの文章が思い出される。

「現実的なものはたんに可能的なもの以上をもはや含まない。現実的な百ターレルは可能的な百ターレル以上のものをいささかも含まない」(KrV.A599/B627.=5:287 ページ。)

これをふまえてリッカートはいう、「「表象されてある色と表象された色〔の概念〕とはまるきり同一である」(GE1, S. 65/GE2, S. 119. GE1, GE2 とも下線ゲシュペルト)、と。裏返せば、可能的な表象に「現実」の形式が帰属しなくては現実(「がある存在」)となりえない。つまり「ある [=sein]」がたんに連辞として用いられる(「である存在」)なら、いかなる定立もなされず、「がある存在」を含意しないのである。

⁶⁵ 内在的客観(超越的価値ではなく)は認識論的主観の相関項であり、所与的経験はこの意識に「直接的に」与えられている。【客体】を認識する主観なくしては、認識というものはそもそも存在しえない(GE6,S.123,S.64.)。対応説が想定する「超越的現実」を前提にしないときだけ、超越的对象としての価値を立てることができる。「超越的現実」とは認識関係外に存する「即自=an sich」であり、理論的に理解の外に立つことになるだろう。たとえ超越的な認識の対象、価値があるとしても、認識の内部にあるのは、経験の可能性である。理論的に妥当する条件と独立に、意味諸規定の外部には理論的認識はありえない。この理路に即して、①因果、②補完、③ディルタイ的〔抵抗〕対象(Gegenstand)のいずれの対象にいたる道も、内在を媒介項としているがゆえに棄却される(Krijnen,C.,2001, S.189.)。

〔カントの現実性にかかるリッカートの態度表明は GE6,S.140 で為されている。現実という形式は内容をなんら変更しないから、現実にある色と色の可能的表象は、同一であるという具合に、形式-内容図式で改積される。GE2,S.29 ならびに GE6,S.210 も参照のこと。〕

カントで言えば、現実的な神の概念と可能的な神の概念とは同じである。このことに徴すれば明らかなように、ただ思考されるだけでは、現実⁶⁶は定立⁶⁶されない。そこでリッカートは何か現実的な「がある」存在を認識するために、表象のみならず価値措定が必要であるとした。――本論は内在的客観を重視する点で、より経験的実在論的解釈をとっている。このさいカントが言う「超越論的観念論者は、経験的実在論者でありうる」(KrV.A370.=5:76 ページ)という構図が、維持されていることを忘れてはならない。主観に独立な〔内在的〕「現実」は客観(【客体】)と呼ばれる。認識論の主観=「意識一般」は内在的客観を内容とする形式である。カントの言にあるように、内在的客観は経験的な対応[=Entsprechen]項に立ちうる。ただしこの内在的「現実」は論理的／概念的に独立であるにすぎない(Krijnen, C., 2001,S.181-183,下線イタリック)。カントの経験的実在はリッカートの「現実」に当たる。

例えば Krijnen,C.,2001,S.61 は言う。「カントは直接的な対象への差し向けを拒否し、ならびに認識主観たる理性の方へ妥当反省的に向いて、超越論的批判と超越論的形而上学との区別を導く」と。かくのごとくリッカートは、「超越的現実」を却下し、超越論哲学に抵触しない内在的現実を経験的実在と考える。

ちなみにディルタイの「実在性論文」によると、外界の実在性は主知主義的推論では証明できないことを認めたくえで、ふつう蓋然性の程度が低いといわれる結果→原因の遡及に、経験的に高い蓋然性を与えている。批判者が言うように、この推論は、外界の抵抗→抵抗する実在という推論なのではなくて、外界の力が現前しているという、非知性主義的推論による。つまりリッカートの内在主義を超えて、蓋然的推論をディルタイはもち込む点にちがいがあがる。〔ただしその蓋然性がディルタイによって向上しているように、筆者には思えない。〕

1892 年の『認識の対象第 1 版』で、リッカートは、判断において承認される「超越的当為」を、客観的に妥当する当為として(後には「超越的意味」の「声」への呼応して)打ち出した。この「超越的当為」に即して、「意識一般」は判断を下すことを通じ、【客体】は内在的領域に構成される。「認識する自我-主観は、理論的価値を充たすことで、実在を中心にして「転回する」のではなく、実在を認識せんとすればこそ、理論的価値を中心にして「転回する」ことになる」(GE6,S.205.下線ゲシュペルト)。こうした経験的実在論／超越論的観念論では、「客観」/【客体】は、イデアールな価値を規矩として定立されるのである。こ

⁶⁶ カント哲学での「或る物の表象」の「定立[=Position]」と「物自体」の「措定[=Setzung]」については牧野英二,2013,287 ページを見よ。なお田邊のそれとは、ニュアンスが異なる。「措定判断[=das thetische od.setzende Urteil] を簡単に定義すれば、意識内容としての感覚的写象を自我の対象として措定する判断というてよからう」(田邊元,1963,4 ページ)。田邊では純粹経験の事実ではなく客観的知覚として、真偽の区別をもった対象が自我に対して措定される。リールの説く存在判断に近い。

れはプラトンのイデア界を、価値的妥当の世界であるとしたロツツェを承け、リッカートが定式化した価値客観説である。すなわち「私たちの認識活動に客観性を授ける当為を、したがって、すべての個人的意志から独立した妥当を特徴づける [=charakterisiren] ために、超経験的もしくは超越的当為 [=transcendenten Sollen] と呼ぶ」(Gr1,S.682.下線ゲシュペルト)。もとより当為は主体を想定するが、その背後の「超越的意味」は、主観的限定をこうむっていない。「超越論的心理学」は心的実在のかたちで認識作用を扱うのではなくて、その「イレアールな意味」のかたちで扱う」(Krijnen,C.,2001,S.303.)。とくにそのことが明確になるのは、中期以降である。「認識論の二途」(1909年)の「超越的意味」[=Der transscendente Sinn=Sinn₁]については、次章で扱う。]

リッカートの、内在的客観に対し彼岸に有る価値は、普遍的に妥当する。

「したがって私たちは、純粹に個性的な価値を除外し、歴史記述の指導原理として、たんに特定の共同体のすべての成員に事実、共有される価値にかぎるだけでは、十分ではない。そうではなく、自然科学が自然法則の定立にさいして要求する^{エス・ギフト} 何の[=welche] [=2.Aufl.die]或る種の普遍妥当性と、歴史というものが拮抗するというのならば、諾わなくてはならないのは、或る価値は特定の社会の全成員に事実通用するのみならず、価値一般の是認がすべての学問人[=wissenschaftlicher Mensch]に必要な欠くべからざるものとして期待してよい点である、そしてそれゆえ、一回かぎりの個性的現実が何らかの、**経験的に普遍的な妥当以上の価値との関係が必然的な点である**」(Gr1,S.390/Gr2,S.352.斜体は Gr1 のみ・太字は Gr2 のみ・下線ゲシュペルト)⁶⁷。

普遍史に水路づけられ[=canalized]ながら、共同体を異にする⁶⁸「学問人」を含めた「文化

⁶⁷ 詳細には検討していないが Gr2 では、価値関係の理論的性格がより強調されている。Vgl.Gr2, S.333,S.566 では、(Gr1,S.377,S.500 では見られなかった)「**理論的な**」価値への関係づけという表現が見られる。価値関係を実践的評価の一樣相とした Rickert,H.,1905,S.83-84 の記述と比較せよ。

Gr2,S.335 にかぎって次のように述べられている。外延的多様のなか、内包的多様のなかから歴史的に本質的な部分を区別するさい基準となるのは価値関係の原理である。その点で選び出されたものは普遍的価値をもつ。「**価値関係の原理が歴史科学では、およそ本質的な役割を果たすなら、内包的多様の克服の場合と同様、外延的多様の克服のさいにも決定的でなくてはならない。〔中略〕それゆえ、価値関係の原理は内包的に多様な内容をもつ叙述にあたって決定的であるのみならず、外延的に見通しえぬ諸物体、諸過程一般から当該客観を選ぶにあたり決定的である**」(Vgl.Gr2,334-335.太字は Gr2 のみ)。Gr1.は主観の作用が強調されるのに対して、Gr2 では価値関係の手続きの価値の客観性が前面に出る(Gr1, Fünftes.Kap.IV.「認識論的主観主義」/ V.「批判的客観性」→Gr2,Fünftes.Kap.IV.「諸価値の客観性」)。Gr2 では妥当に対する義務意識を倫理的・超論理的なもの(Vgl.Gr2,S.604)と捉える。価値関係の手続きは Gr1 でも語られるが、目的論的方法の比重が大きい(Gr1,S.371-372,S.377 では目的論的方法に言及。理論的価値関係の手続きは Vgl.Gr2,S.318,S.320,usw.S.334-336,S.339.ただし**価値関係の手続きは目的論的方法を排除するものではない**。Vgl.Gr2,S.336-337.目的論も現実科学的因果帰属と両立するとする。Vgl.Gr2,S.338-339.)。

⁶⁸ 少なくともヴェーバーの場合、文化科学の営みを誘導する価値理念が「研究者と彼の時代を支配する」(Weber,M.,1973[1922](←1904),S.184.=客観性,99 ページ)のであって、文の「意味」は、それが理解される〔社会的〕条件に存している。だが、方やリッカートでは文化価値を実現してゆく文化的人間が考えられている。

の人類」にとって一定の価値が通用する(Rickert,H.,1905,S.101.)と見てよかろう。もちろんその形而上学性を含意するものではない(Vgl.Gr1,S.667.)。ここから、志向的な意味を表示するよう、経験的実在論の三要件が要請される。すなわち、「①「排中律」もしくは「二値性の原理」への態度、②相互的な言語使用における「合意」への態度、③「真」なる文の「訂正可能性」への態度」(大庭健,1987,121 ページ)という三要件である。これら実在論的側面は、1910年代以後の現象学との接触にさいし、ノエシス-ノエマの意味成体を介して、前面に出てくる。つまり、対応すべき態度決定の規矩(「超越的意味」)に、ザッハリッヒに則す構えが現われる。

三、価値関係と形式の論理

リッカート哲学の基本スタンスを、カント的「超越論的観念論」として描き出す。そしてヴィンデルバント的(なかなづくヒュームの⁶⁹)系譜につらなるリッカート哲学に、価値主導の「構成」を見たい。

リッカートは、例えば自然史(Naturgeschichte)という個別化的自然科学⁷⁰を、価値には関与しないが、独特な学問分野として位置づけた。この個別化的自然科学について、リッカートは1907年の「歴史哲学」第2版,S.370で、はっきりしない立場をとった。個別化的文化科学は一回かぎりの発展(進化)順を記述するもので、しかも価値を関係づける手続きとした。それに対して自然を扱う個別化的自然科学もあり、後者は価値関係的な手続きをとる〔とも解しうる〕。実際、「歴史哲学」第2版1907,S.369では以下のように言っている。

「普遍化的自然科学のほかに、自然過程を個別化して、たとえ媒体を介して間接的であれ、価値関係的に扱う学科がある。例えば、有機体の発生史・地質学・ことによれば地理学がその例になろう。逆に価値関係があるにせよ、文化的生が普遍化的叙述に与ることがありうる」。

このようにリッカートのテキストには、態度の「揺れ」が見られる。そもそも個別化的文化科学たる歴史学とは、以下のようなものである。

「歴史学の目的は、そもそも一回の発展系列の記述であって、それは一度きりで個性をもった歴史のなかの、多少なりとも包括的な系列を記述したものである。その客観は文化過程自体か、はたまた文化価値と関係をもっている。それによってこの歴史学は実質的に、普遍化的手続きにせよ、個別化的手続きにせよ自然科学と異なっているし、何らかの仕方で客観を体系的に扱うあらゆる文化科学と、方法的にも、原理的に異なっている」(Rickert,H.,1907,S.370.)。

⁶⁹ リッカートは若いころ、アヴェナリウスの門下生だった由。

⁷⁰ ルーは生物学における根拠の問いを、事実の問いよりも重視すべきであったが、そのさい分解と合成を連続させた結果、因果的分析という外貌を呈することになった(カッシーラー・E著,山本義隆/村岡晋一共訳,1996,第一巻,228-229 ページ)。したがって歴史的方法の真のイミは把握されなかった。ビュチュリにしても因果的分析的方法と記述的方法との、仲介的立場を生物学でとつたにすぎない(カッシーラー・E著,山本義隆/村岡晋一共訳,1996,229-230 ページ)。しかも彼は実験に記述的確認の役割を課した。エンテレヒー概念を介して形而上学的立場(生命の独自性)に踏み込んだドリーシュについては、自然哲学の域に属するから記述を省略する。

マックス・ヴェーバーが1907年11月3日付のリッカート宛、ヴェーバーの手紙MWG(II/5) S.414-418.)で見答める⁷¹とおりである。ヴェーバーは、個別科的価値関係の手續きたる「古生物学」にもとづいて、進化論的価値⁷²の研究を以て、科学的研究を僭称する動きを警戒している。その文脈でリッカートが個別的科学のメルクマールを、時空的一回性に禁欲しなかったのはなぜかと、質している。

「個別化的自然科学」は(オイレンブルクや、今次では私たちのアルヒーフでもヘットナーその他や、チュプロフがそうですが、それら)反対者の主たる切り札です。かつて〔貴殿が〕折に触れて、「かけがえのなさ」 [=Einzigkeit] にとりわけ反対なさり、| 究極的には | 73時空的なものと | のみ | 見なして、〔個別化的自然科学を〕規定すると公に明言されたことを、しかと申し上げておきたいのです。私はむしろ貴殿の⁷⁴立場 [=Standpunkt] に賛成いたします」(下線強調)。続けてヴェーバーはリッカートを問い詰める。「ここ〔社会学〕でも | 一純粋に生理学的な一 | 生命保存の見地⁷⁵から見て適したもの⁷⁶を、有意義なもの [=Bedeutsame] として、もちあげるとしたら、〔個別化的自然科学にも価値を認めるべきだと〕異議を申し立てようと思わば可能ですし、そうすると事情は(原理的には)生物学と同じとなります。愚考するに、その種の議論に対して、説明を要すと申せましょう。そもそも貴方が一度たりとも生物学的問題(ドリーシュ、ビュチュリ、ルー等)を攻撃しようとなさらなかったのは〔どうしてでございましょう〕?」(下線強調)。

問題の存在を指摘するにとどめて、そもそも、価値に導かれて対象に「形式」を投入するというのが、リッカート／ヴェーバーの基本的着想であったことを押さえよう。ここでカントが、経験に概念が適用されるときに範型を「図式」 [=Schema] と呼び、「経験的概念は、或る種の普遍的概念に従った、私たちの直観を規定する規則として、構想力の図式につねに直接、関係づけられる」(KrV.A141/B180.=4:244 ページ)としたことが想起される。仮に

⁷¹ 価値関係の手續きと個別化的方法との関係は、Gr2 で強調される。「自然科学的概念構成にとって、それが決してとおり過ぎえない境界を画するものは、われわれが直観と個性のなかで直接体験するがごとき、一回かぎりの経験的現実そのものにほかならない」(Gr1,S.239/Gr2,S.197. 斜体は Gr1 のみ・太字は Gr2 のみ・下線ゲシュペルト)。特殊的(Gr1,S.355)から個性的(Gr2,S.317.)への形容の転換もその間の消息を伝える。「**【文化的歴史科学において】普遍概念が使用されるにせよ、それは個性を表わす手段にすぎないのが常であり、したがって歴史的概念構成の目標としては考慮されないのである**」(Gr2,S.336.太字は Gr2 の下線ゲシュペルト)。Gr2 でも中間領域の議論は維持されるが、普遍化的文化科学を強調する、トーンが落ちているのではないだろうか。ヴェーバーの批判が、この点に関連する。

⁷² 自然主義の形態-進化論的なそれにリッカートは与しなかった、とクライネンは言う。もしこの視角に立つならば、〈自然化された認識論〉が構築されてしまう。リッカートは、自然主義を客観主義として批判してきた。とりわけ個別科学による世界理解は不可能であるとした。価値事象を見るにさいしては、自然主義を貫くかぎり、短慮におわるからである。ここから生物学主義に対する一定限度の批判も出てくる(Krijnen,C.,2001,6.3.3.2.2”Biologismus heute”;6.3.3.2.3”Kritik des Biologismus”)。

⁷³ 以下 | 斜体 | で括った斜体は、ヴェーバーの挿入。

⁷⁴ 書簡表記「彼らの」は「貴方の」の誤り、と全集は判断。

⁷⁵ ヴェーバーは「立場」 [=Standpunkt] を削除し「見地」 [=Gesichtspunkt] に変更。

⁷⁶ 書簡表記「Relevante」は「Relevanten」の誤り、と全集は判断。

リッカート哲学がカント哲学の正嫡であるとするなら、個別化的自然科学においても、価値的「図式」が構成的に、働かなくてはならないだろう。

「思想の全領域では内容は、直接的に与えられた現実における場合と異なる形式をもつのであり、あるいはより精確に言えば、私たちが「知覚する」内容にかぎるなら、そもそもいかなる形式ももたないが、しかしその内容は私たちがそれを語ればすでにして整形されて[=geformt]いるのである」(Rickert,1909,S.178.)。

このように知覚のなかに、内容は限定される。語り出されるかぎり、現実には価値に導かれて、独特な意義を有する「所与性の範疇」を帯びている。

カントでは、犬の表象をまとめて【このもの】さらには「現実」・学的【客体】につくりあげるのは、犬の概念の「図式」である。それがなければ、反省が向けられる【客体】とはなりえないだろう。何かを一匹の犬という【客体】に仕上げるのは犬という概念であり、はたまた、それが経験に適用された「図式」である。大森荘蔵の言葉を借りれば「ここで犬という概念はまさに「犬」という言葉にほかならない。それゆえ、犬という言葉が客観的対象としての一匹の犬を制作するのだ、^{ママ}と言い換えることができるだろう」(大森荘蔵,1986,101 ページ)。

これに対応するリッカート『認識の対象』系列⁷⁷での、所知構成の階梯を簡潔に定式化しておけば、

1. 経験的に与えられた感性の多様を、「客観的」価値を基準にして【このもの】に構成する。[すなわち感性の多様の混沌、もしくは知覚表象の断片は、それ自体、判断以前に属するものであり、経験的【このもの】にまで上りえない。]さらには【このもの】・「現実」⁷⁸を経て【客体】へと構成していく。
2. 主観が、「現実」を価値に関係付けることで、特定の観点から【客体】(現実科学で理解のみならず解明されるもの)を概念媒介的に抽出⁷⁹する。

⁷⁷ 注 64 参照。

⁷⁸ ヴェーバーとの関連で言えば、この線で Burger,T.,1976,p.14 や Merz,P.U.,1990,S.78,fn.98 は解している。ここには「現実」をどの水準におくか、にかんするリッカートの揺れがあるように思われる。同じ点をめぐる問題の重要性は、Merz,P.U.,1990,S.86 においても指摘されている。

⁷⁹ 対応するヴェーバーの論点を挙げておこう。ヴェーバーも模写説に反対して「理念型」を打ち出した。「とにかくおよそシュタムラーのように「認識論〔学〕者」として躍り出ることを意図し、しかもそのさい依然としてことさらカントに依拠するよう欲すなら、「諸公理」を、すなわち、経験を「単純化する」諸原理を「カテゴリー」の地位にまでたかめるようなことは、もとより、けっして許すことのできない稚拙な誤り」であるからして、因果法則はたかだか、方法論的形式として妥当するにすぎない(例えば 1973[1922](←1908),S.309-310=シュタムラー,120-121 ページ。下線ゲシュペルト。)。Nr. 11-12 (4 ページ中)

[11a] Heidelberg 14/VI 04(ハイデルベルク 1904 年 6 月 14 日)リッカート宛ヴェーバー書簡部分
.....Ihre Zustimmung zu dem Gedanken des „Idealtypus“ erfreut mich sehr. In der [11b] That halte ich eine ähnliche Kategorie für| notwendig, um „werthendes“ und „werth-|beziehendes“ Urteil scheiden zu können. |Wie man sie nennt, ist ja Nebensache. |Ich nannte sie so, weil der Sprach|gebrauch von „idealem Grenzfall“, „idealer |Reinheit“ eines typischen Vorgangs, „idealen |Konstruktionen“ etc, spricht, ohne damit ein |Sein-sollendes zu meinen, ferner weil |das, was Jellinek (Allg. Staatslehre) „Idealtypus“ nennt, als nur im logischen Sinn |perfekt gedacht ist, nicht als „Vorbild“. [12a] Im Übrigen muß der

3. 因果のカテゴリーは「現実」に埋め込まれているから、因果法則性(「現実科学」におけるように)を要求するなら、【客体】⁸⁰にとっての問題となる。

議論の混乱を避けるため、知覚表象〔の断片〕に所与性〔の形式〕を与えたものを【このもの】、前科学的所与を「現実」、学的対象を【客体】という具合に、レベル別呼び分

Begriff wieder geklärt |werden, er enthält allerhand bei meiner |Darstellung noch ungeschiedene Probleme. |Ich werde demnächst einmal (im Winter) |die Bedeutung der Kategorie der „objektiven |Möglichkeit“ für das historische Urteil u. den| *Entwicklungs*begriff zu analysieren suchen.(GStAPK /VI HA NI Max Weber Nr.25 |は改行。下線は強調。斜体は挿入)

「.....「理念型」の考えへの貴殿の御賛同はまったくご同慶のいたりであり、 [11b]実際、同様のカテゴリーが、「評価的判断」と「価値関係的判断」の判断を区別しうるためには、重要であると見なしております。それがいかに呼ばれるかは、ごく些末な問題です。それを理念形と呼ぶのは、「イデアルな限界状況」、類型的過程の「イデアルに純粋なもの」、「イデアルな構造」等々に当為的であるニュアンスを籠めることなく語るためです。さらに申せば、イェリネック (一般的国家学) が「理念型」と名づけているものを、単なる模写ではなく、ごく論理的意味で完全なものとして考えているからです。 [12]さらに、その概念は今ふたたび明らかにしなくてはならないので、その概念には、私の叙述一切にかんする、いまだ未決の問題が含まれています。〔ですから〕私はいつか近いうちに (冬になれば) 歴史的判断ならびに発展概念にとって有する、「客観的可能性」のカテゴリーの意義を分析いたさんと存じます。.....」なおリッカートにも価値自由を価値関係性と対比において、自然科学に対応させる文脈がなくもないが、中間領域の自然科学には価値を関係させる。また価値関係的な文化科学の方が、概念的抽象度の高い自然科学より現実に接近していると説く。したがって鈴木宗徳の言うように「(狭義の)価値自由、すなわち自然科学」ではない。またヴェーバーが価値自由を説いていたからと言って、そのことはヴェーバーの社会科学における価値無関係性を含意するでもない。あまつさえ、リッカートは現実に即して、価値を見て取っているのであり(あたかも現象に価値が見出せるかのごとく)、鈴木「社会的現実とは無関係な論理的問題」として価値自由を捉えていたとは、リッカートなら耳を疑う謬見であろう(鈴木宗徳,2007,589-590 ページ)。

判読は野崎敏郎氏のご助力に多くを負っている。氏のご助力がなかったら、解説を放擲していただろう。ここに深甚なる謝意を表す。注：ヴェーバーの「客観的可能性」カテゴリーはヨハネス・フォン・クリースに負っている。とはいえ、リッカートの個別的出来事の因果帰属は、因果法則に基礎をおいており、そこにいくばくかの「客観的可能性」判断との、つながりを認めえる。佐藤俊樹の、ヴェーバーがリッカートの「個別〔性〕的因果関係」を批判したというのは、リッカートその人に当たらない短見である。言うまでもなく、この発想は *cqn* 図式につながる。Vgl.Massimilla,E.,2012,S.149-155.「法則的知識は歴史の因果帰属では、棄却できない媒介的役割を演じているという見通しが、ヴェーバーが受容したクリースの「客観的可能性」の概念と、ぴったりと一致することが、理解されよう」(Massimilla,E.,2012,S.152.)。「客観的可能性」の判読については野崎敏郎,2016,208 ページ参照。

⁸⁰ 以下のリッカートの行文で「現実」にかんして、カント的な経験的实在論(したがって超越論的には観念論)を語れることを示している。「ただ客観的現実という形式のみが、〈経験的实在論の立場から見た質料という所与〉を超える要素となることができる。換言すれば単なる事実の寄せ集めが客観的経験的現実の概念と異なるのは、客観的現実が認識主観とは独立した、規定された秩序ある事^{タートザッヘ}実を呈することによっている。この秩序をとおして、所与に連関が成り立つ。とはいえ、この連関は決して知覚されず、その〔現実を構成する〕連関が内容ではなく形式であればこそ、知覚にとって、よそよそしいものとなっている」(GE2,S193-194.)。

「〔身体的な〕空間を充たす主観以外の主観を決して認めようとしなない者は、唯物論に導かれる。客観を意識内容と同一視する者は純粹内在の立場か絶対的観念論)にいたらねばならない。そして第二の対立の形態から、この二極端にわたるさまざまな立場が生じる」(GE1,S.8-9/GE2, S.13-14.太字はGE2のみ)。リッカートにおける実証主義・絶対的観念論はともに【客体】を意識内容と考える立場であり、それとの対決が彼にとって焦眉の課題であった。

け、それらの構成基準である「超越的意味」(超越的当為)を特に【対象】とする。こうした区別は、リッカートの概念構成論に沿って、〈所知〉の端緒が所与としてあることを押さえるために、ぜひとも必要な手続きである。

他方、「科学分類論」系列の所知構成論が有る。それが知覚につらなる前科学的世界に横たわる、諸概念の沃野を論じているとし、積極的に評価したい。それは最基底に現実という論理的に裸の多様をおく、概念構成の議論である。つまり「現実」(知覚)から派生する「前科学的概念」(「科学分類論」系列では「学的概念」が引き継ぐ)を所与とする。なお学問分類論にわたる批判として、ディルタイは次のように指摘していた。リッカートの現実科学とは歴史学のことである(Dilthey, W., 2004(←nach 1904), Bd. XXIV. S. 286. Gr. 1, S. 327 からの引用)、と。現実科学は、学的概念からなる自然科学とちがっている。それゆえリッカートは自然科学を勝義の学問とはしなかった。かくのごとく学的概念は、人為的構成としておとしめられる。

1. リッカートは「現実」として、意識内容中、特殊なものを考えている。けだし「現実」は模写によって尽くせない(知覚である。Rickert, H., 1910(←1899), Kap. V.)。以下は「異質性と連続との結合」を説く、リッカートの『文化科学と自然科学』第2版のくだりである(『自然科学的概念構成の諸限界』の多様の考えに通じる。Gr1, S. 34/Gr2, S. 32を参照のこと)。「連続は、それが同質なら即座に概念によって支配されうるし、異質なものは、私たちがそれを截り出すとき、つまりその連続を非連続へと変化させるとき、理解されうる。こうして学問には、その途として概念構成の二つのものもまた、明らかになる。私たちは、現実すべてに挿し込まれている異質的連続を、同質的連続か、もしくは異質的非連続に変形するのである」(Rickert, H., 1910(←1899), S. 33.)。〔この箇所は模写を色濃く残した『文化科学と自然科学』第一版、1899年には見られない。構成を予期する第2版の論点である。〕
2. 前科学的価値が関係するせいで、構成の主観性が問われる。前科学的〔個体の〕概念の成立。この点にわたる議論は以下の引用を参照されたい(Vgl. Gr1, S. 354-355/Gr2, S. 316-317.)。「私たちは、それゆえ、いかなる任意の事物ないし過程それぞれにふさわしい個性は、その内容が現実と合致したかたちで、その認識にも到達できないし獲得にも値しない。かくのごとき個性は、十全に規定された諸契機のなかから出てくるものであるし、私たちにとって *Bedeutung* に溢れた〔科学的〕個性とは峻別する必要があり、この通俗的に考えられたものでしかない狭義の個性 [=前科学的概念] を、普遍的類概念がそうでないがごとく現実ではなきこと、のみならず私たちの現実把握ないし前科学的概念構成の産物であることを、明確にしておかなくてはならない」(Rickert, H., 1905, S. 63. 前科学的概念構成については、Gr1, S. 379/Gr. 2, S. 342.)。
3. そのうち学的概念構成の検討がなされる。
「科学が研究にたずさわる以前に、むしろそこかしこで、すでに概念構成が生じており、把捉と疎遠な現実ではなく、前科学的概念構成の産物を、科学は質料 [=本稿のい

う所与]として見出すのである」(Rickert,H.,1905,S.62.下線ゲシュペルト)。かくのごとく前科学的〔個体の〕概念は、一般化的方法／個別化的方法での、概念構成の所与となる。しかるのち、学的概念構成は、特殊な事物、出来事に普遍的価値を結びつけて(Rickert, H.,1905,S.80.)、新たに所与の上に〔学的〕個体概念を構成するのである。

まとめれば、学的概念にたいして、価値形式を介した前科学的〔個体の〕概念という所与を認めうる。つまり所与とは、学的「問いかけ」となる質料である。もとより、「現実」(知覚)ではないが、所与概念を論じることができる。けだしディルタイにおいても、「所与」とは「連関」に媒介されていたのと同じように、リッカートの前科学的〔個体の〕概念とは、学的認識にとっての連関媒介的な「所与」⁸¹である。

前科学的〔個体の〕概念は歴史的中心と重なる。「歴史的資料中の精神的存在がもつ、この傑出した意義[=Bedeutung]を表現すべく、私たちとしてはしたがって叙述そのものの導きとなる価値に態度をとるすべての歴史的对象、つねに精神的存在にちがいない歴史的对象をことごとく、今、なお〔変わることなく〕歴史的中心と名づけよう。さらば叙述中にかくなる対象があれば、歴史は必然的に残りの存在をすべて、叙述の精神的中心たるそれに関係させることを見てとる」(Gr1,S.561-562/ Gr2,S.496.斜体は Gr1 のみ、太字は Gr2 のみ、下線ゲシュペルト)。

かくのごとく理念的な価値を手引きにして、前科学的個体の概念から学的概念が仕上げられる。すなわち、超越論的観念論の構図が、際立っている。見通しを言えば、カントのそれのごとく、实在論と手を切れないだろう。実際、实在論(対応説)的な構えを、1910年代の新カント学派に見出せよう。時代的風潮としては、現象学との接近ということが新カント学派を方向づける。もとより、現象学における意味の発見を過小評価するものではないが、そのスコラ的「志向的内在」という発想には、一種の先祖返り的な「既視感」を覚えずを得ない。

⁸¹ ディルタイの見るところ、思考における関係の言明が、「所与」の表象されたもののうちの関係づけと結合しているのであって、それを当為的に特徴づけるのは相応しくない。それはひとつの覚知である。それ [=覚知] は、いっしゅの気づく働き、さらに立ち入って定義できない意識様態であって、形式としては思考の正しい態度のあり方に伴う (Dilthey, W., 2004(←nach1904), Bd.XXIV. S.277-278.)。要するに「与えられているということ、気づいている」こと、つまり、ディルタイの基本態度である「意識の事実」を含意する。

Dilthey, W., 1990(←1883), Bd.XX.S.153.=2:107 ページのほか「.....私が私のうちで体験しているものが意識の事実として私にとって現に存在する所以は、私がそれを覚知しているからである」(Vgl. Dilthey, W., 1959(←1883), Bd.I.S.394.=1:400 ページ)参照。

すなわちディルタイにとっての「所与」とは、「私のうちで体験しているもの」であるから、例えばカントの「所与」ような感性の多様とは異なる。ディルタイはカントから当時の認識論的論理学を批判的に摂取して、なおかつ当時の心理学的見解にもとづき、所与にはすでに形式や秩序が内在しているとみなした。それは彼のキータームが「構造」あるいは「連関」と呼ばれる。したがって、ディルタイにとって「所与」とは、構造や連関を抱えた統一体〔の「覚知」〕ということになる(Vgl. Dilthey, W., 1982(←1892/1893), Bd.XIX.S..335.=3:562 ページ。有機的生の統一という論点は、1982(←1892/1893), Bd..XIX. S.344-345.=3:575-576 ページ参照)。

なお引用文献については、山本幾生氏のご教示を賜った。

3.現象学／實在論(1910年代)

一、内在的 Sinn と批判哲学

リッカートは、後期ロマン派の個体了解を決して誤解することはなかった(Wiehl,R.,1985, S.415-418.)。彼は、ロマン主義的な一回かぎりの個体を念頭においていたわけではなかった。学を芸術とは分かち有意義性を求める努力をリッカートは追求しつつ(ハイデルベルクの伝統においては、)キルケゴールやニーチェの追従者と争うかたちで、新たな歴史的個体が彫琢されていった。ヤスパースはリッカートとヴェーバーの間に挟まれ、ヴェーバーが哲学者であるか否かについて意見が衝突したが、それは哲学について、リッカートと異なる本質を前提にしていたため生じた軋轢であった。かくのごとく西南ドイツ学派は諸学派に翻弄され、個別専門性にあらがい、普遍的な価値哲学を形成してゆくことになる。つまりリッカートは19世紀の中葉の古色ある新カント学派を、専門哲学の狭隘から解き放ち、哲学をもっぱら認識批判の形式、つまり批判的認識論として有効たらしめんと寄与したのである。

この文化的伝統のなかでの、中期リッカートへの転回に触れよう。中期リッカートは「認識論の二途」中で、前期『認識の対象第2版』(GE2)のごとき判断作用の分析から超越論的当為にいたる途を、「超越論的心理学」[=Transscendentalpsychologie]と名づける。ただし判断作用から超越的对象に向かう分析の方向を指して、「心理学」と呼ぶのである。「[超越論的論理学と]類比的に「超越論的心理学」は心的實在の中の認識作用を扱うのではなくて、その「イデアールな意味」の中のそれを扱う」(Krijnen,C.,2001,S.303.)⁸²。

したがってふつうの意味での心理学的分析ではない(Rickert,1909,S.190.)。ここでは、「超越論的心理学」の限界の指摘をとおして、『認識の対象第2版』の自己批判を行っている点に注目したい。すなわち超越的当為が、それに従う主体、およびそのわざを前提としている点に批判が向けられる。

「当為は純粋な価値ではない。それは命令であるから非存在者である。したがって当為は、これに従って是認し従属する存在、つまり主体を要求する」(Rickert,H.,1909,S.209-210.)。

当為は超越的なものから垂れられるので、主体とかかわって変容をこうむる。当為という妥当ノエシス学が扱う対象は、あくまで[対象の]主観に向けられた側面である(Krijnen,C.,2001,S.320.)。それはラスクのようなノエマではなく、あくまでノエシスである。当為は主観化されているから、認識価値自体をではないのである。

「妥当機能的分析は心的過程の「定在」に関心をもたない。——「その過程とはそれ自体で現実的〔なものである〕である」。それはそれとして心的過程の遂行(機能)に、関心を寄せる」(Krijnen,C.,2001,S.366.下線イタリック)。

ここでの当為が或る種、実的(ルールな)ものとして、捉えられていることが分かる。Krijnen,C.,2001,S.324 よると、主観的恣意だけでは、認識課題を欠くことになるから、内在的な認識領域でも「超越論的对象」が認識課題の「統一」をかたちづくる(KrV,A105.=4:183

⁸² 現実としての所与とその哲学的分析の区別は、Windelband,W.,1913,S.4-5を見よ。

ページ)。越論的心理学が到達しうる(「対象性」たる)「超越的当為」とは、いわば私たちに向いている対象の側面であり、態度決定を迫るものである。

他方、リッカートは「超越論的心理学」とはちがう途として、「超越論的論理学」[Transscendentallogik]を挙げる。——「内在的客観」(=【客体】)といっても、[カント哲学の]可能的経験の域にあるものであり、「現実」とは、第三の意味での「内在的客観」にほかならない。すでにかつて別稿(九鬼一人,2007/2008)で、この「意識一般」と客観とのホーリスティックな関係(相関主義)を解釈するため、Husserl,E.,1984, Bd.XIX/1.S.267 における「もとづけ」の着想を重ねることを提案した。

さてここでは(第3章第一項)、理念的なノエシスについての記述に絞ろう。内在的意味の統一が意識に現われるには、純粹意識の作用が意味的統一を賦与しなくてはならない。内在的意味とは、主観化の極限に立てられた「意識一般」の別名である(時期的には、中期の「哲学の概念について」(1910a)から、後期の『哲学体系第一部』のなかで説かれる)。個人主観的な存在・価値に対して、主観的の極となる項である。この「意識一般」とは、すぐ述べるように純粹な作用形式にほかならず、主観のレアールな心的作用に帰属する。それは現実的な心的内容のように客観化されえず、ごく主観的なものである。この領域が「第三領界」と呼ばれるのは、「現実」と「価値」に次ぐ三番目の独自の領域⁸³だからである。というのも、「第三領界」は「現実」の世界と「価値」の世界とを結ぶ「世界の結節点」[=Weltknoten]という固有な役割を果たす(Rickert,H.,1921a,S.260.下線ゲシュペルト)。すなわち und に模される結合作用⁸⁴のことである。ただしそれは、一足す一の「足す」のように二つの[結合されるものの]区別を無にしてまとめあげるものではない。「結節点」においては、結合される「現実」と「価値」とが、それぞれの差異性を保ちつつ結びついている(Rickert,H.,1910,S.22.)。そのイミで「作用体験」(Rickert,H.,1921a, S.259.)「作用意味」(Rickert,H.,1921a, S.261.)と呼ばれたりする。結局、「作用の意味ないし評価の意味は、レアールな心的存在でも、妥当する価値でもない。そうではなくて、価値にとっては作用に内在する意義〔性〕[=Bedeutung]であり、このかぎりにおいて両領域の結合でありかつ統一である」(Rickert,H.,1921a, S.261.)。

⁸³ 意味の第三領界(Krijnen,C.,2001,S.369-370.)がもつ存在様相の特異性が問題となる。「第三領界」はフレーゲ・ボルツァーノ・マイノング・チザム・ポパー・トゥーゲンハットに認められる。ところでフレーゲが「思想」を第三領界と言う場合、命題内容(もとよりリッカートの超越的意味は命題内容=文章の意味にほかならない。)に即している。しかるにリッカートのそれは、主観的な存在領域という含みがある。したがって意識に即して、存在(妥当)について判断する作用であることが、リッカートの「思想」の際立った特色である。

⁸⁴ クライネンの解釈は一貫して、思考と認識の対象との間にも、異定立の原理・相関関係を見取る、極端に観念論に傾斜した解釈となっている(経験的實在論的読み替えがない)。しかるに「純粹に異質的な媒体」[=ein rein heterogenes Medium](Rickert,H.,1924a,S.59.下線ゲシュペルト)としての Sinn の第三領界のみが、「共相関」と呼ばれてしかるべきである。「認識主観と客観の認識統一体の契機として、交互的含意関係は「認識作用と対象との論理的な根源的相関関係」をかたちづくる」(GE6,S.362.Vgl.1929,S.689.)。認識作用は、認識された【客体】と、認識する主観を必然的に含意している。そこで認識を遂行する契機が認識主観である(Krijnen,C.,2001,S.310.)。

ドラスティックに変化する射映を、一つの対象として把握するためには、作用の統一を必要とする。「思考する主観は……理論的認識が実現される作用を及ぼす」(Husserl,E.1975, Bd.XVIII/1.S.240.)。この点が、形式的論理学と超越論的論理学とにとって肝要である。つまり客観性(認識の客観的内容)は主観から迫られる(Krijnen,C.,2001,S.331.)。意味をとおして客観的内容、経験的対象が統握されるためには、主観がまとまっていなくてはならない。第二の主観もしくは「[私の] 内在的世界」が、普遍的な作用たる第三の主観より〈範囲 Umkreis が広い〉のは、第三の主観⁸⁵、つまり「意識一般」が第二の主観をもとづける部分だからである(GE1,S.8/GE2,S.13.)。とすれば、フッサール流に⁸⁶自我を構成する成素についてホーリズムを見出せる。

もとより、可能的経験の構成は、「超越論的観念論」に則っているはずである。例えばカントの超越論的演繹論中、意味の「統一性」に言及した箇所を一瞥しておこう。『純粋理性批判』B 版演繹論(KrV.B131.=4:204 ページ。第一五項)で概念の統一を質的な統一性、つまり単一性として触れたさい、彼は次のように述べている(もちろん質的な規定性ではないにせよ、或る意味づけのまとまりを、権利問題として先行的に要請する)。

「結合の概念のすべてにアプリアリに先行するこうした統一は、あの単一性のカテゴリー(第一〇項)などでは断じてない。というのも、すべてのカテゴリーは判断における論理的な機能に基礎づけられているが、この機能のうちでは結合が、それゆえ与えられた諸

⁸⁵ この箇所は、第三の主観「私の〈意識作用〉」を抽出する第一段階の文脈だが、それを前提にするときだけ、第二段階の純化された第三の主観、「意識一般」について語りうる。客観的価値と対峙するこの「意識一般」よりは、中期・後期のリッカートにおいて主観〔側〕の極、つまり「内在的意味のあの領界」[=jenes Reich des immanenten Sinnes](Rickert,H.,1909,S.220.)に読みかえられる。こうした現象学的「後退」によって、客観側に「存在」と「価値」が並立することになる(九鬼一人,2014(←1989),78 ページ参照)。現象学的「後退」については http://www.systemicsarchive.com/ja/b/ethische_aesthetik.html,2013年12月11日閲覧,参照。

向井守,1997,151 ページの「認識論的主観」の解釈は、それが認識の論理的前提であることを、無視した議論である。また認識論的主観は心的な「意識の成立[=Entstehung]」に依存しない(GE1,S.36.)のであって、それが——向井守,1997,152 ページが誤って言うがごとく——「表象的」主観を指していないことは明らかである。

⁸⁶ かつて「意義[=Bedeutung]」のカテゴリーは全体に対する生の諸部分の関係を示していて、この関係は生の本質にもとづいている」(Dilthey,W.,1979(←ca.1910),Bd.VII.S.233.=4:258 ページ。Vgl. Dilthey,W.,1979(←ca.1910),Bd.VII.S.243-244.=4:271 ページ)というディルタイの文言に引きつけ、この箇所を解していた。当時はノエマにのみ注意がいき、ノエシスの問題には思いつかなかった。ディルタイ論中の、「具体的な現実のなかでの体験の連関は、意義のカテゴリーにもとづいている。……これらの〔体験や追体験の〕連関を構成するものとしての体験作用[=Erlebnis]のなかに、意義が含まれている」(Dilthey,W.,1979(←ca.1910),Bd.VII.S.237.=4:263 ページ。全体と部分の関係については Vgl. Dilthey,W.,1979(←ca.1910),Bd.VII. S.195.=4:215 ページ。Dilthey,W. 1979(←ca.1910),Bd.VII.S.197=4:218 ページ)という箇所にいささか性急であるが、リッカート/フッサールとの接点を見出そうとした(九鬼一人,2007/2008,29 ページ。連関の客観的観念論的含意については Dilthey,W. 1968(←1906/他),Bd.IV.S.177.=8:532 ページ。)。またディルタイの真意を知るには、「意義は特殊な種類の関係であり、これは、生の内部でその部分が全体に対してもっている関係である」(Dilthey,W.,1979(←ca.1910),Bd.VII.S.233-234.=4:259 ページ)を十分理解しておく必要がある。

概念の統一がすでに思考されているからである。だからカテゴリーはもう結合を前提しているのである。こうして私たちはこの統一を(質的な単一性として、第一二項)より高い次元に、すなわち(それ自身が、判断におけるさまざまな概念の統一の根拠を含んでおり、それゆえ悟性の——しかもそれが論理的に使用される場合にさいしてさえ——可能性の根拠を含んでいるようなもの)のうちに求めねばならないのである」(KrV.B131.=4:204 ページ)。

ちょうど人間学における^{像を創作する}創像的(dichtend)構想力が、あらたに感覚表象を作り出すさい、テーマ (Kant,I,1917(←1798),Bd.VII.S.169=15:85 ^{テーマ} ページ)における意味と思想[=Gedanke]の連関)に統一がもたらされるごときが、それと符合する。このさい、創像的に芸術をつくりだす構想力の統一に注目すべきである。構想力の統一については Kant,I.1997(1781/82?), Bd. XXV.2.Hälfte.S.858.=20:296-297 ページ。なお「手」で「線」を引くことになぞらえられる、図式を生産する創像的構想力は、「意味/感官」に統一をもたらすといわれている。カント『人間学』の射程を知るうえでも興味深い(Vgl.Kant,I.,Bd.VII.S.167-168,S.173-174,176-178,S.180-182,S.185,S.189,S.215,S.224,S.240,usw.=15:83,91,101-102,109,115-117,153,167,189 ページ他)。線を引く能作を論じる B 版演繹論第二四項(Kant,I.,B.154-155=4:222-224 ページ)の創像的構想力とともに、テーマによる統一は理解すべきであろう。

B 版第一五項における質的単一性に関連して、参照を求めている第一二項を見てみよう。

「客観的各認識のうちには[第一に] 質的な単一性/統一^{アインヘイト}と呼ばれうる概念の統一がある。ただしそれは、ちょうど、例えば観劇、演劇、物語におけるテーマの統一のように、認識の多様を総括する統一に限定されて、その概念の単一性のもとに考えられるかぎりにおいてである」(KrV.B114.=4:162-163 ページ)。こうした「意味/感官」の統一に、主観のそのの雛型を見出し、構成の「かなめ」として押さえるには、湯浅正彦の注解が捷徑であるから(湯浅正彦,2003,98-99 ページ。)、それを参考にする。

「質的な単一性」とは、「認識の多様を総括することにおける統一」(KrV.B113-116.=4:161-164 ページ)にはほかならない。この(先にも述べた)「主題の単一性」とはノエシスでの統一だが、内容的にもろもろの場面=ノエマが、時間的前後のつながりにおいて、一貫した理解を可能ならしめる場合であろう。かくて「意識」とは、異種の諸要素間に意味的統一を形成する総合⁸⁷作用において、まとまりを成しているものと理解できる。

さて湯浅正彦,2003,101 ページによれば、この「統一」[同一性]の由来するところの「統覚の統一」は、分析的なものでは実はなく、総合によって可能となると考えられている。かくなる総合は、結局、「自己意識の主観たる一個の「私」そのもの」を産出する心的作用に由来すると考えなくてはならない。しかるにことからの反面で、権利問題としては統覚の統一が総合を可能にしているのである(以上、湯浅正彦より)。

これにならうと、対象が一個の対象として認識されるさいの、対象の統一性も、「意識の形式的統一」に求める以外はない(KrV.A104-105.=4:183-184 ページ)。かくして統覚の統一

⁸⁷ 湯浅正彦,2003,194-195 ページも参照のこと。

と「超越論的対象 x」(KrV.A109.=4:186 ページ)の統一は、表裏一体をなす。つまり経験的に実在する対象は、超越論的にのみ権利づけられる。それゆえ「超越論的観念論者は、経験的実在論者でありうる」(KrV.A370=5:77 ページ)と言われる。

ゾッヒャー,R.(Zocher,R.,1925,S.44.)は、認識の対象と対象の認識との「共相関」が、リッカートに見られると述べ、認識の妥当統一中の主観的契機と客観的契機とに注目している(Zocher,R.,1959,S.49-50)。ちなみにカントの総合判断において悟性のすべての原則が、認識の感性的領域を規定するとしても、主観的なものと客観的なものとを統一するかたちで、超越論的にもとづけている(Krijnen,C.,2001,S.323.)。ただしこれらの論者は、「共相関」と相関主義を厳密に区別しておらず、前者がノエシスの独特性にかかわるのに対し、後者は観念論の域内での、主客の障地取りの相関にのみ与ることを注意しておかなくてはならない。

結論を言うとするれば、リッカートの「意識一般」が、その主観的側面として「内在的意味」[=Sinn₂]をもつ作用契機であるとするれば、リッカートの三重の主観関係は、カント的な文脈における主題の意味統一と通じるだろう。リッカート哲学の主観の統一は、あらかじめテーマ(意味)という制約を予想していた。とするれば「現実」外に「超越的意味」[=Sinn₁]が対峙する。このノエマ的側面を注視しなくてはならない(超越論的論理学から価値の体系／世界観学への移行、第2章第一項参照。)

二、超越論的価値論の行方

ことがらのノエマの面に話を移そう。命題内容としてのノエマ、つまり内在的現実とは異なり、価値として妥当する「超越的意味」[=Sinn₁]⁸⁸は、認識作用から分離しなくてはならない。例えば『自然科学的概念構成の諸限界 第2版』(1913年)で強調されているのは、心理主義の対極にある論理主義である⁸⁹。そこで超越論的論理学が妥当ノエマ学として要請される。それは a「超越的意味」=理論的価値が直接、認識可能であることを前提とし、b 超越性を損なうことなく、その分析を行う途である。「超越的意味」=理論的価値とは何か。端的に言えば、文章⁹⁰の意味すなわち a.超越的価値が直接、認識可能であることを前提とし、b.超越性を損ねることなく、超越的価値(文章の意味)の分析を行う方途である。a に関連して、文章の意味が 1.超越的で、2.価値的であり、「文章の意味を理解する[=verstehen]」という事実に訴えて、その認識可能性を確保できる。したがって a は 1.2.を先決要件とする。こ

⁸⁸ 超越的意味ということで、リッカートは「思惟された何か一般」「客観的な何か」「みづからのうちに係留するロゴス」「純粋に論理的なもの」(Rickert,H.,1921a,S.51;1924a,S.9-10.下線ゲシュペルト)と呼ぶ。

⁸⁹ 『自然科学的概念構成の諸限界 第2版』序文参照。「[その他の点で重要なことは]とりわけ心理的なものから、画然と区切るといふ儀であった。第1版はとくに1896年に公にした[部分の]章ではいささかジークヴァルトの「論理学」と緊密に結合していたが、それがもつ心理学との関連は、今日もはや保持できないのである」(太字 Gr2 のみ。Gr2,S.VII.おそらく Gr1,Zweites Kap.II「心的生の概念的認識」等を念頭においているのであろう。Gr1のこの箇所は1896年に公刊された)。「とはいえ、同時に「精神科学」にとって心理学がもつ「根本的」意味は、科学たる歴史の本質を理解することが心理学的分析をとおして可能になるという考えとならんで、いよいよ縮小してゆくという考えにあらがえないのである」(Gr2,S.VIII.)。

⁹⁰ 文章は財ゆえ、イデアールな命題とは異なり、現実的なものである。

の作業が実質的に超越的価値の分析(b)となり、「超越論的論理学」の具体的実質をなす。ところで文章の意味[=Sinn₁]とはレアールな心的存在ではない(Rickert, H.,1909,S.195.)。理解の時間的な作用とは独立な、無時間的イデアールなあり方をしている(Rickert,H.,1909,S.194.)。——《雪が降る》という文章の意味に比べ、「雪」という物は時間的であるし、「雪が降る」という事件もまた然りである。しかるに「雪ガ降ルトイウコト」は時間的に位置づけられるわけではない。このように考えれば、文章の意味はイデアールと言えよう。「[文章の]意味はあらゆる人間的なものを高く超えて、すべての認識作用、是認作用も超えて存する」(Rickert,H.,1909,S.211.)。かくのごとく文章の意味が超越的である(1.)であるとしても、なぜ価値の亜種と見なされるのか(2.?)。文章の意味は真偽という価値対立性をもっており(Rickert,H.,1909,S.199-200.)、語義[=Bedeutung]には還元できない統一体(Rickert,H.,1909,S.200.)である。このような価値対立性を徴づける一手段として、意味という概念について否定が二種あることにリッカートは注意を促す。およそ概念対が価値概念なら、その否定には対立する反価値概念と、没意味概念があるはずであろう(Rickert,H.,1909,S.204.)。例えば「真」という価値概念に対しては、「偽」と「真偽中立的」のように、二種の否定概念がある(2.)。かくて同様に文章の意味は「反意味」と「無意味」という否定をもつ。ゆえに意味は超越的な価値であることが明らかにされ、超越論的論理学／妥当ノエマ学の結論がえられる。

ところで、フッサールはノエマとノエシスの一致ということで、対応説を堅持する。判断はフッサールによれば Sinn の統一であるが、判断されたそのものは「何ものかについて」という志向されるノエマとして、ノエシスと相関的なかたちで考えられている。あらかじめ言っておけば、ボルツァーノ・マイノングの自体存立説が、判断の基準のなかに判断じしんを密輸入するのに対し、フッサールの意味成体説では、「原信念」の措定を基礎にするから、真偽の先取は免れる。というのも判断作用とは、「存在」について原措定する確実な信念、「原信念」である。その措定に「下線を引くこと」「棒線を引くこと」として肯定・否定を捉えた(Husser, E.,Bd.III.1.§94: §109;Husser,E.,Bd.XIX/1(1),5.Unters.§22.)。そこで考えられているのは、あくまでノエマの核の展開にすぎない。だから「真理とは知性と事物との一致である」という図式において、「明証性が一致のメルクマールとなる」。この明証性は、つまるところ高次直観的に見通された、理念的次元のノエマ／ノエシス意味成体にもとづいている。これはリッカートの価値同様、理念的なものとして了解されている。それゆえ、事態の意味という、理念を介して対象と認識は一致できるのである。およそ、これは〈規矩／理念〉準拠的な対応説的構えと言える。

ここでリッカートをカントと対比してみよう。『諸学部の争い』のなかでカントは言っている。イサクを殺すべし、という神の命令に対峙するアブラハムの振る舞いを、カントは非難がましく扱った。「……アブラハムは、この神の声らしきものに対して、次のように答えねばならなかったであろう。「私が私の善い息子を殺すべきでないことはまったく確かですが、私に現われているあなたが神であることについては、確かではなく、またこれからもたしかになりえないでしょう」、と」(Kant,I,1917/1968(←1798)Bd.VII.S.63,Anm.=18:89 ペ

ージ原注)。カントは、もし神が人間に語りかけたとしても、その語りかけている声が神のものであるか知ることは、人間にはできないと言う。つまり①理性への「呼びかけ」は有無を言わさぬにもかかわらず、②その呼びかけがどういう根拠をもつかについては迷わざるをえない。

リッカートの場合には、(良心に不明瞭ながらも何ごとかを促迫する「呼びかけ」ではなく)当為の「声」は判明なのだから、カントほどの難局に悲観する必要もない。カントとの比較において係争点をまとめれば、まず理論的理性への超越的当為の「声」(「呼びかけ」ではない)は判然としていることを指摘せねばならない①。例えば、或るものについて——私の著作であり、または本であり、または物体であり……という、どの声に従うべきかに指針はないとしても、——その論理的起源、つまり「認識の対象」は比べようもなく判明に、——対峙する統一体として把握される⁹¹。がしかし、この事態を考え直せば、②どの判断を下すかの段で、[どの声に従うべきかの指示は与えられないから] ビュリダンのロバのごとき逡巡に出あう。無限列を断ち切らなくては、認識を完了できぬから、決断を余儀なくされる。先取りすると「行為者相関性」⁹²(DR)が成り立つのである。新カント学派(西南ドイツ学派)は、前科学的個体の概念のさまざまなアスペクトを問う。例えば別々の指示対象(X₁,X₂,X₃,X₄,……)ならざる、一つの指示対象=意義[=Bedeutung]について、「今、この部屋は24度である」「冬場のこの部屋に、暖房がついている」「この部屋で凍えずに済む」……のいずれの判断を下すべきか逡巡してしまう。もしくは「ここに弱者がいます」「ここに圧制者から匿われている友人がおります」……のいずれかでも逡巡してしまう。くめどもつきぬ「密画作業」(大森荘蔵,1985)を完了できないのだから、それにかかる振る舞いも、このものに即した自由な態度決定に拓かれている。

「超越論的論理学」に即してみたように、リッカートの議論には、後発近代思想の主体

⁹¹ Krijnen,C.,2001,S.262.はこの事態を「共相関」として捉えているが、「共相関」は意味の第三領域にかぎって語られるべきである。内在的 Sinn が共相関を成すとは、相関関係ではなく、価値と主観とが出合う^{ところ}域を含意している (GE3,S.442.)。

⁹² センは目的合理的規範(ただしセンの文脈では「帰結主義」(ref.Sen, A.K.,1982,p.31.)の諸契機として、「行為主体中立性」を以下の三つ、「観察者中立性」・「行為者中立性」・「自己評価中立性」に区別している (Sen,A.K.,1982, p.22.)。その「行為主体中立性」に対して、非帰結主義は「行為主体相関性」をもつという論点が指針を与えてくれる。当の「行為主体中立性」として、*b* が行為 Act するのを *a* が許すことができるを、Af_a(*b*)(*a* affirms *b* to Act)とおくと、次の三つが成立しうる。

「観察者中立性」(VN) 人 *i* がこの行為を行ってよいのは、人 *i* がこの行為を行うことを人 *j* が許すことができる場合、かつその場合にかぎる。Af_i(*i*) ⇔ Af_j(*i*)

「行為者中立性」(DN) 人 *i* がこの行為を行ってよいのは、人 *j* がこの行為を行うことを人 *i* が許すことができる場合、かつその場合にかぎる。Af_i(*i*) ⇔ Af_j(*j*)

「自己評価中立性」(SN) 人 *i* がこの行為を行ってよいのは、人 *j* がこの行為を行ってよい場合、かつその場合にかぎる。Af_i(*i*) ⇔ Af_j(*j*)

「行為主体相関性」は、これら三つの各々を否定することによってえられる三種の「相関性」に分類される。その三種とは「観察者相関性」(VR= $\overline{\text{VN}}$)・「行為者相関性」(DR= $\overline{\text{DN}}$)・「自己評価相関性」(SR= $\overline{\text{SN}}$)である。

論⁹³として、『宗教論』をベースにした価値の客観的自存化(実体化)が見られる。その前提として「理論的価値の領域にとどまらず、非理論的〔実践的〕価値の領域でも、内在的意味は超越的価値を前提としてのみ解明される」⁹⁴という具合に〔多元的な〕価値実在論が提起されるのである。

ノエマ的価値という見地から、リッカートの価値体系全体を、理論的価値にかぎらず、査閲してみよう(なお行為者中立性・観察者中立性・自己評価中立性ないしその、それぞれの反対概念である相関性は、活動の領域の価値に即応した振る舞いに根拠をもっている(九鬼一人,2016,16-21 ページ参照))。

カントを指針とする実践的価値をお手本にした科学論は、感覚に対応した無限の多様を断ち切るかたちで決断する。「悟性はみずからの領域の限界絶えず踏み越え(.....)、妄想と幻惑に迷い込む」場合は叱責を受けなくてはなるまい」(KrV.A238./B.297.つまりかくも多様な経験への志向がある)。リッカートは *vita cotemplativa* と *vita activa* というアリストテレス以来の二分法に即しているものの、前者は知的良心の前での自律的な判断行為(すなわち後者)として改釈し直される Vgl.Rickert,H., 1913b,S.298.)。無限の経験に対峙するカントは、汲めども尽きぬ認識の多様を、決断を以て截り取るリッカートである。**無-限的全体**(Rickert,H.,1913b,S.302.)=**行為者相関的／自己評価中立的認識論の卓越性・人間の有限性の自覚・根拠(認識論的もつげの域を根拠は脱すること)の非完結**。このシェーマに対応して認識の材料は「汲みつくしえない全体」(Rickert,H.,1913b,S.302.)へと向かう。

それとならび立つ倫理的領域では、「自己評価中立的」(SN)な徳行為をエンドクサとして認めつつ、みずから選び取る構造を意味している。例えば倫理的な Faktum(「ライオンに人を食べさせるのは残酷である」)に構成的な態度をとるとしても、(時として自己強制のかたちをとる)一種の自律によって規定されるだろう。「その〔倫理的〕領域とは、とにもかくにも自由意志に則した「法則」に従う「自律的」人格性の義務自覚的な意志の領域である」(Rickert, H.,1913b,S.311.)。裏返せば抑止意志という善意志に背いて、なお悪を選び取るところに、「行為者相関的」(DR)な「選択」の余地がある。「選択」した「目的」にあらがいがら、なお善を意志しているという構造に、善意志が卓越するわけ(人間の本有的な理^{ロゴス}の尊重)が求められるのではなからうか。つまり可想界に定位する無限性⁹⁵を認めうる。有限の人間が無限を臨む。その仰望が道德の卓越性と人間の有限性をかたちづくる。**無-限的全体=行為者相関的／自己評価中立的=道德の卓越性・人間の有限性の自覚**。これを承けてリッカートは言う、「倫理的という点では異なる全領界も、同じく、汲めどもつきない」(Rickert, H.,1913b,S.312-313.)と。

この有徳で完備的な人間像にいれ替わって、自己を軸として普遍化が遞減する。それに伴う第二の自然の析出によって、徳の不一致がもたらされる。近代化に伴う世俗化の昂進

⁹³ 安彦一恵,2013, ,28-31 ページ。

⁹⁴ 九鬼一人, 2014 (←1989), 69 ページ。

⁹⁵ 仮に功利主義のように「観察者中立性」(VN)が成り立てば、他律的となり「徳の卓越性」は廃れる。

が、倫理の普遍化可能性に抗して傾向性をもち込み、価値の世俗化を来たすのである。そこで世俗化の前で、欲求や利害に対する公平性が補償しえないという〈経済的〉事実直面する。——かくのごとく成立する目的価値についての、カント学者コースガードの見解は、第三者的立場から見れば、手段としての含意をもちうるのではなからうか。それは外在的である以上、「目的」でありながら、「手段」のなかに組み込むことができる。「目的-手段」に応じて、外在的目的は、「目的」になりうる。それを「外在的手段」の派生形態として捉えることを提唱したい。コースガードが展開しているのは、まさに経済活動で中心となる「交換価値」に現われる、第二の自然という人間の価値的な要素に言及したものと考えられるのである。

コースガードの考察を見てみよう。彼女は「道具、お金、小間使い(chores)」(Korsgaard, Christine, M., 2004(←1996), P.250.)の例を出す。万年筆は内在的に善いと主張することはできない。万年筆は筆記のための手段(使用価値)に即して外在的に善いと判断される。ところが、象牙の万年筆であるなら、物象化により目的が自存化されて、高く評価される(交換価値)。象牙の万年筆が高価なことは、「手段」の物象化・第二の自然が生んだ制度的な事実である。第二の自然は、こうした経路を通じて、「目的-手段」系列を完結せしめる。つまり——価値合理的でありうる非帰結主義の枠内(これが一つの臆断であることを認めるにやぶさかでない)で、合理性を追求しようとするれば、「行為者中立性」(DN)が候補となりうる。その場合はら、一種の身最良⁹⁶が帰結する。仮に「自己評価中立性」(SN)も負荷するなら、「観察者中立性」(VN)が帰結してしまうから、このさい非帰結主義の枠外に出ぬかぎり、「自己評価相関性」(SR)を課さなくてはならぬ。幸福を扱うリッカートの「非倫理的」な愛の学が指示される所以である。完-結的部分=行為者中立的／自己評価相関的=経済の非卓越性・〔物象化による〕世俗的な「目的-手段」系列の完結。「私たちは完-結した現在の生を一つの特殊な領域として画定する場合には、……人格的で活動的な社会的な定在^{ダーザイン}のみ、私たちはかかわる」(Rickert, H., 1913b, S.316.)。

これら活動系列の最終審は、倫理を裏打ちする『宗教論』に求めざるをえない。例えば、中島義道, 2011 は、「自由に因る因果」におけるアンチノミーを責任論的解釈ではなく、むしろ実在的解釈の見地に立って解決しようとする。したがって「可想的因果性は行為の現場、すなわち「いま」行為が実現されつつあるとき、確実に作用している。しかし、それをあとで認識しようとする、それは自然因果性の一項(現象)に姿を変えてしまう」(中島義道, 2011, 147 ページ)のである。「自由に因る因果性」は、可想界から現象界への実在的な因果連関(第三アンチノミーが想定するそれ⁹⁷)に求める必要がある。この論点に与し他の論者と雁行して加藤泰史は、実践的に善を選び取る可能性を、『宗教論』に委ねるべきであろう、と述べる(加藤泰史, 2015, 一三-一四ページ)。かくして完-結的全体としての最高価値は、人格

⁹⁶ 「愛の学」が「幸福」を主要価値としていることから、経済的領域との連関は明らかであろう。

⁹⁷ なおシュヴァイツァー著、斎藤義一／上田閑照訳, 1959 もあわせて参照のこと。

的聖価値に求められることとなる。

「この宗教は、生が個人の部分的な価値から育みえない価値を生に与えることによって、現在および未来の生を支え、確固たるものとする。永遠なるものが時間的なものへ、神的なものが人間的なものへ、絶対的なものが相対的なもの[*das Relative*]へ、完-結的なものが終結なく有限的なものへ、人格の全体が部分へと持ち込まれるのである」(Rickert,H.,1913b,S.320-321.)。

これらは決断主義的な態度決定的構えに基礎をおいている。かくて理念的な価値は確保された。その価値に導かれて経験的な現実を構成するさい、〈規矩／理念〉準拠的な対応説的構えをとるのか(現象学の理路)、評価関与的な態度決定的構え(フィヒテ的な理路)をとるのか、ふたたび、判断行為の自律に関連づけて答えるべき段にいたった。

表三 活動的価値の序列

価値：倫理 主観的振る舞い：自律的行為	非-終結的全体=行為者相関的／自己評価中立的=倫理の卓越性
価値：幸福 主観的振る舞い：愛着—献身	完-結的部分=行為者中立的／自己評価相関的=経済の非卓越性
価値：人格的聖 主観的振る舞い：敬虔	完-結的全体=行為者中立的／自己評価中立的=宗教の卓越性

三、問題・決断主義的転移

以下、現象学に即した〈規矩／理念〉準拠的な対応説を閲覧しよう。

主観-客観の相関関係を想定したのは、新ヒューム主義のエルンスト・ラース(1837-1885)である。ところで新ヒューム主義は前期新カント学派を特徴づける。そのさいラースに遠由する内在説を想起せよ。ラースの共相関論は、意識のうちにとどまることを要求する。そのイミで一種の観念論である。「[デカルト-バークリィの] これら認識論はもはや「主観主義」ではなく、むしろ「主観-客観主義」である。それは正確に解すれば、相対主義ではなく共相関主義[=Korrelativismus]である」(Laas,E.,1879,S.182.下線ゲシュペルト)。ケーンケの記述(Köhnke, K.C., 1986,S.386.)によると、——ラースは『カントの経験の類推』で経験とその対象(つまり世界の経験的表象像)とが主観的意識のうちで成立するとした。しかし彼は、主観とは主観的知覚の客観的秩序である(ただし主観は主客の系列を区別できる)として、カント学徒が勢いを盛り返すよう働きかけた(オットー・リープマンの指摘)。つまり内在的領域での対応説的了解を取り出すことができる。この構図を超越論的観念論／経験的實在論的に反転すれば、現象学の志向的内在との距離はわずかである。

例えばラスクを見てみよう。ラスクの意味は、フッサールのノエマ、リッカートで言えば超越的意味に当たる。フッサールでは、ノエマは広義の「意味」と解され、「ノエマはおのおの、或る「内容」、すなわちその「意味」をもっており、それを通じて「みずからの」

対象に関係することになる」(『イデーニ I』1913年, Husserl, E., 1976, Bd. III/1. S. 297. 下線ゲシュペルト)と論じられたような、対象認識の媒介項である。ただし知覚における「意味」は、対象に対して距離をとれないほど、近いものである。

例えば雪の知覚で現出するのは、「雪」という物体ではないし、実的(レール)な感覚「冷たさ」でもないし、ましてや志向的体験したい「雪が白く見える」でもない。否、対象それじしんの「意味」、知覚ノエマである。或る知覚の現出は、それを受け継いだ可能的知覚への指示を含んでおり、全体の現出は連関をもって知覚的体験の地平で現われる。このことは、知覚的現出のなかに、対象の〔部分的〕断片ならざる、実在する対象それじしんの「意味」が含まれていることを示唆している。

ラスクは、超対立的対象が質料/形式へと技巧的に破壊される以前には、(真理 vs 背理、正当 vs 不当、承認 vs 拒斥等の)価値対立性を超えているとしたが、それは知覚野になかに痕をとどめている。「対立的に分裂した意味に対しては、対立的に分裂した認識、すなわち、判断する認識が対応し、これに対して超対立的意味には、超対立的超判断的認識が対応する」(Lask, E., 1923, S. 396.)。

けだし対象に判断が対立性をもち込むとすれば、それは知覚に見出せよう。ふたたびラスクに傾倒するハイデッガーの言を引く。——講壇を見るような環世界的体験は、その「有意味な現象を説明するのに、それらの本質的な性格を破壊し、それらの意味を揚棄してしまうから、或る理論を立てるといったかたちで行うことはできない。〔理論以前のなそれを矯めて行われれば〕それは……破壊による説明なのである」Heidegger, M., Bd. 56/57: S. 86. = 56/57: 94 ページ。かくのごとく、経験的隔-生的アプローチは、認識をとおして破砕的に対象にかかわる。このことは以下のことがらとも符合する。例えば丸い四角という超越した「もの」(res)はもはや、この経験的实在論では棚上げにされる。つまり経験的实在論によって無対象表象は遮断される。ラスクのきわめて实在論的色彩の強い議論は、カントの「経験的实在論者」(KrV. A370-371. = 5: 76-77 ページ)でもありうる超越論的観念論者の面目を躍如に示している。

もしくはナトルプを見てみよう。彼はフッサールの『イデーニ I』を批判して「絶対主義者の或る面影は、まだ残っているものの、精査してゆけば、この面影も消滅してゆくものである」と述べ、相関主義[=Die Relation ist nicht Relation zwischen Absoluten. Natorp, P., 1911, S. 50, S. 52.] 的に考察して——カントの批判主義的精神を『イデーニ I』にも見出すことができるとした。本質直観を説くところにカントとちがいがあがるものの、彼は「意味」を基軸として「知覚」に实在を見出だした。例えばナトルプが、個別的な経験の「^{ジヒト}見え」が「明晰判明に」知得されるとしたことは、本質直観に近い線で理解され、錯雑した論理的関係も「見え」のなかに認められる点と共通している。そうしたナトルプでは(Natorp, P., 1911, S. 50, S. 52のごとく、)主客の相関関係は、内在的領域における「相対的」陣地取り関係をなぞっている。それは、経験的实在論が含意する。経験的に方向づけていたものは、志向される——客観的価値から派生した文章の意味に対応する経験的对象である。志向的对象に重なる

る意味[=Bedeutung]の把握について、野本和幸の文章をもって語らしめよう。〔この部分だけフレーゲの語法に従うので Sinn と Bedeutung の訳が逆転する。〕

「フレーゲの理論的枠組みでは、意味[=Bedeutung]と意義[=Sinn]・思想は明確に峻別され、固有名の表示対象である意味や述語の意味である概念が、思想の構成要素になることはない。しかしながら、思想は、本来、真偽を問われるべき当のものであり、真理が問題とされる論理学を含む学問においては、真偽いずれかであって第三の途はないものである限り、その思想を表現する文の構成要素が、意味を欠くことは許されない」(野本和幸,2012,369 ページ)。

フレーゲの「思考」とは、文章の意義[=Sinn₁]として経験的客観について「理解」されたものである。

とはいえ、どの判断を下すかの段で、ビュリダンのロバのごとき逡巡にいたる②。旧聞に属するが小林道夫,1996の言い方を借りれば、もろもろの〈意味アスペクト〉に差し向けられるのである。そこで決断主義的な態度決定的構えが出てくる。

「……科学的探究では常に、対象の与えられ方としての「意味」(フレーゲの用語では「意義」Sinn)から「指示対象」(フレーゲの用語では「意味」Bedeutung⁹⁸)への前進が要求されるのである。そこで、指示対象が確定されない段階では対象の理解は意味に支配されざるをえないのであるが、いったん意味と指示対象との結合が実現されるならば、今度はその意味は対象の一面として理解される。「意味は対象の一つの側面を照射するだけ」だからである。指示対象は一つであっても意味は複数あるのである」(小林道夫,1996,142 ページ。下線強調)。

カントを指針とする科学論は、感覚に即応した超越的意味の多様に正対する。良心の「呼びかけ」に応じ、深淵の前に立つカントは、さながらかぎりない「密画作業」の前で逡巡し、決断によって認識を截り取るリッカートと似ている⁹⁹。この態度決定では、自律が前景に出てくる。

妥当根拠は外的なものによって把握される(他律)のではない。理性そのものは必要かつ十分な妥当根拠(自律)をもつのである。この自律ということを反省的に抽出してみれば、リッカートはフィヒテの決断主義の圏内にある。メヌ・ド・ビラン、ないしシュエリング／ショーペンハウアーの主意主義の系列に連なる発想である。ではその態度決定の^{アイデア}意想は対応説といかに協調しうるのか。

まず態度決定を行う超越論的主観に対して、具体的な主観性を賦与するヴァーグナー・G.の提言もある (Krijnen,C.,2001,S.336.)。その結果、具体的主観性は超越論的主観性を包摂しえることになり、ノエマ、ないし妥当ノエマ学は、超越論的論理学に与りえたのであ

⁹⁸ リッカートにおける Bedeutung は、フッサールの「指示する意味」(言語的意味)と同様、語義に用いられる。その点「指示される意味=指示対象」であるフレーゲの Bedeutung と異なる。Vgl.Rickert,H.,1909,S.199-200.

⁹⁹ リッカートの信仰については詳らかでないが、ゲーテのファウストの傾倒に窺われるように、プロテスタンティズム的志向をもっていたことは明らかである。

る。それが超越的意味[=Sinn₁]を扱うので、内在的現実と超越的意味のあいだを内在的意味[=Sinn₂]が架橋する。

こうして内在的意味に支えられた態度決定では、言わばフッサールの「原信念」に「下線を引い」たり「棒線を引い」たりしているのである。つまり真理としての「原信念」は所与であり、フレーゲの言う *Gedanke* に似てくる。そうした *Gedanke, Sinn* に一致を云々するさい、その志向的对象となるのは、主張以前の余剰説¹⁰⁰的な真理(?)である(Gabriel, G. & Schlotter, S., 2013, S.23-39.)。だがそれでは話が済まないのであって、〈規矩／理念〉準拠的な対応説は、無限の多様に対する逡巡に帰着してしまう。そこで「原信念」に対する「承認／否定」という、フレーゲ的な主張力が可能性の中心となる。

リッカートにおける「原信念」的質料、前科学的個体の所与性(Vgl. Gr1, S.354-355/ Gr2, S.316-317.)については、科学分類論の構成に触れたさいに、すでに論じた。それを所与として、学的個体概念(Rickert, H., 1905, S.62.)が彫琢されたのであった。この学的個体概念に対する、言表の引き受けとして「承認／拒斥」という主張力が働く。

あえて「真」を言い立てる必要がないと言われる。「主張力をもって発話される命題を理解している人は、みずから真であると承認することをも同時にしているのです」という具合に、真理の故郷が定められる。「主張力をもって発話される命題が誤った思想を表現しているなら、それは論理学では使用不可能ですし、また厳密に言えば、理解不可能なのです」(Frege, G., 1976, S.127.=6:220 ページ)。

「主張文の形式において私たちは真理の承認を言表しているのである。私たちは〔それを表わすのに〕「真」という語を必要としない。しかも真を用いる場合でさえ、本来主張力はそれに内在しておらず、むしろ主張文の形式に内在しているのである。その形式が主張力を失う場合には、「真」という語ももはや言い立てられない。そういうこと〔「真」を言い立てること〕は、本気で語っていない場合に起こる」(Frege, G., 1918, S.63.=4:209 ページ)。

主張力をもった承認が、より *originel* な次元に属し、対応説的な真理概念は「原信念」として派生する。かくのごとく新カント派の真理概念では、思惟とまったく独立な世界との一致関係が考えられるのではなく、客観的思惟の資格をもつ、思惟じしん [=当為] との一致関係が考えられている(Krijnen, C., 2013, S.41.)。

この超越論的観念論中、〔認識の〕対象についての存在規定性を、妥当において規定づけ、態度決定に根拠をおく(Krijnen, C., 2013, S.42.)。その態度決定とは、具体的主観に即して考えれば、一種の決断と言える。

たしかに倫理的価値と雁行して、リッカートには、理論的価値の实在論的傾斜(真理価値の妥当説)が顕著に見られた。しかしリッカートの論じるところでは、認識の営みでも、倫

¹⁰⁰ ラムゼイを視野に入れた余剰説と態度決定説の対質は、Gabriel, G. & Schlotter, S., 2013 ; Meerbote, R., 1995, "Rickerts Auseinandersetzung mit dem Riehlschen Realismus", *Kant-Studien*, Bd. 86. S.346-362の検討を踏まえた別稿を予定している。

理の領域に模した態度決定が語られる。判断の本質を知るには、「判断が〔心理状態として〕何であるのか、という観点からではなく、判断が何を遂行するのか」(GE2,S.88.下線ゲシュペルト)という実践的観点が重要となる。理論的営為も実践的営為と並行的に論じている点にリッカートの独自性がある(認識の場合も、人格の決断によって真理が承認される)。例えば決断ということに関連して、ハバーマスによるポパー批判を見てみよう。エンドクサたる基礎命題は「私たちに直観的かつ無媒介的に、明証的に与えられていると〔ポパーは〕する」。ポパーによれば全称命題を反証する、「一つの観察結果を表現するこのような基礎命題に対しては、にもかかわらず間主観的承認は強制されない。すなわちこの命題そのものが、その経験的吟味のためにこの命題が役立つべき法則仮説とまったく同じように」無根拠である(ハバーマス・J著,城塚登/遠藤克彦訳,1979,181 ページ)。ゆえに「或る基礎命題の容認が経験にあっても十分に動機づけられているか否かについての決断が表明されねばならぬ」(ハバーマス・J著,城塚登/遠藤克彦訳,1979,183 ページ)。もちろんハバーマスは、この決断の解釈学的背景を労働的条件に遡及するのであるが、彼自身の議論は精彩を欠いている。だから彼に追従することなく、認識も価値判断の一種である、つまり判断は、〈エンドクサ¹⁰¹、前科学的個体の概念〉への一種の態度決定と見なしてはどうだろうか。

実際、文化科学の価値関係の手続きでは、対象のどの面を重視するかは、(超越論的主観を包摂した)個々の経験的主観に任せられる。主観に視点の自律性があるということは、歴史記述が価値評価に委ねられているということである。すなわち部分的にせよ、「行為者相関的」な判断の責任が、決断に委ねられている。歴史家は、価値関係の手続きにおいて「少なくとも彼が個別化的に対象に結びつけた一般的価値に対して、一定の態度をとる」(Rickert,H.,1905,S.83-84)。つまり例えば政治史を書く歴史家は、政治という価値に一定の意味を認めているがゆえに、政治史を書くのである。それが理論的価値関係ということである¹⁰²。よって、「歴史はただ評価する¹⁰³ものに対してのみ存在する」(Rickert,H.,1905,S.84)。このように、歴史学を取り上げてみれば、学知の根底に截り取りを通じた価値判断という決断が嵌入しているのである。

¹⁰¹ 議論の強調点からエンドクサが脇に置かれるかたちとなったが、その〈歴史的解釈学的含意〉を無視するものではない。人がそうした含意をもった無矛盾的思いなしをもっているとき、それは大抵において真なのである。デイヴィッドソン・D著,柏端達也等訳,2010,第15,16,18論文。

¹⁰² 佐藤俊樹,2016は『自然科学的概念構成の諸限界』「歴史哲学」を考慮に入れないばかりか、客観性論文にわたるヴェーバー-リッカート関係を後年の『文化科学と自然科学』第六/七版(1926年)で論じるというあり様である。

¹⁰³ 野崎敏郎は、Wertungを「価値選択」と訳し、「評価」という訳語を斥けている(野崎敏郎,2016,224ページ)。その理由は、価値判断をみずからの生の指針として実践してゆく、含意が出ないからと言う。しかしながら新カント学派に通じているものにとって、「評価」という訳語が実践的含意を含まぬ、と言わんばかりの〔野崎の〕解釈は奇矯である。なおBewertungに「価値査定」という訳語を野崎はあてている(野崎敏郎,2016,224ページ。)が、日本語として照会的価値のニュアンスが強くなりすぎる。Bewertungが期成的・当為的価値相も含むことに留意して、「価値判断」という訳語をあてるべきではないか。これは事態についての判断 Beurteilung(二重判断たる価値判断)と語形上、似ていることを一つの根拠としうる。

判断の一致は、部分的に他者に情報の確かさを委ねる場合でさえ、その情報通の選び方に恣意性が残る。つねに相対性が態度決定説には付きまとう。「P₁は真である」と言った後、「P₂は真であると言うべきであった」と修正するべきことがある、ちょうど「ここに弱者がおります」と言った後に、「ここに圧政者から匿っている友人がいる」と言うべきであったと、先の嘘が白日のもとに晒されるように。誤りうる、嘘をつきうることを自覚するところから、有限存在としての人間のあり様が明らかとなる。無限の真理に向かって啓かれていること＝真理の卓越性は、有限の／限界をもった主体の態度決定の裏返しなのである。

このことはひょっとしたら、認識の共同主観性に対する異議申し立てのように映るかもしれない。先取りしていえば、あらゆる共同主観性を先取りする試みは挫折を余儀なくされるだろう。せいぜいのところ、前科学的個体というエンドクサにすぎりうるだけである。エンドクサに随伴する当為意識は一定限の規矩として働くにすぎない。もちろんエンドクサを最終的に受け入れるかは、個人の知的良心に委ねられる。

最後に、個人の良心に委ねるとはどういうことか、義務論的制約に当てはめて、確認しておこう。ノーマンによれば、カント倫理学は以下のごとく、批判的に検討されている。カントの含意を取上げて浮き上がらせるために、この批判的ケースを取り上げよう。「…普遍性の要求は合理性の要求から導出されうると主張する論拠があると、私は考える。つまりこの主張によれば、私の行為が普遍化可能であるべきだということが、私が理性的に行為するための必要な条件なのである」(ノーマン・R著,塚崎智／石崎嘉彦／樫則章訳,2001,133ページ)。たしかに理性的／合理的であるためには、私の行為は整合的である点で、普遍化可能でなければならない。普遍化可能とは「適切に類似したすべての状況で、同じ仕方で行為せざるをえなくさせるような普遍的な原理の下におかれるのでなければ、合理的ではありえない」ことである。合理的であるためには普遍化可能でなくてはならない。[こうした整合性のみならず、]カントは理由の非個人性をも要求している。「仮に R が私にとって、行為 A を行なうのに妥当な理由であるとすれば、それはまた、万人にとっての理由なのである」(ノーマン・R 著,塚崎智／石崎嘉彦／樫則章訳,2001,134-135 ページ。下線強調)。にもかかわらず普遍化可能性には、以下のような限界が付きまとう。

「困っている他人がいても助けないことを、自分の格率にしている人を想定してみる。カントの主張によれば、その人は自分の格率を普遍化できない。なぜなら、もしその人が困った場合、おそらく他人に自分を助けて欲しいと願うだろうからである。だがそのような事実にもかかわらず、彼は自分の格率を普遍化可能であると、私は提案したい。彼はまったく整合的に次のように言うことができる。すなわち、「なぜ困っている他人を助けるべきなのか、私にはその理由が分からない。私はこの格率によって論理的に、次のような見解に加担することになると認めている。すなわち、私が困った時、なぜ他人が私を助けるべきなのかについて十分な理由が存在しない、ということがそれである。ところで私はたしかに、他人から助けて欲しいと願うだろう。もしそうする立場にある

ならば、私は他人に対して私を助けてくれるように説得を試みもするだろう。しかし同時に私は、他人が私を助けることを拒否しても、それが合理的に正当化されるということも全面的に受け入れる」(ノーマン・R 著,塚崎智/石崎嘉彦/樫則章訳,2001,147 ページ。下線強調)。

自律的に判断し行為する理性的存在者は、他の理性的存在者の権利行使の自由を侵害しないととも、もしそれを侵害したとしたら自分自身の適法的行為をなす自由をも侵害することになる。つまり当の人格が自分のなした行為に対して責任を負うことを承認するのは、他人の追及や強制によってではなく、当人が理性により適法的行為をなすように命じられており、他人の権利行使の自由を侵害せぬように自らに強制していたときである。

実際『人倫の形而上学』のなかでカントは、道徳性を強制という観点から捉えなおしている。

「しかし、それでも人間は自由な(道徳的)存在者であるから、内的な意志規定(動機)という点では、義務概念は自己強制(法則だけの表象による)にほかならない」(Kant,I.,1914(←1797),Bd. VI.S.379-380=11:241-242 ページ。下線ゲシュペルト)。強制は自己にのみ由来するのであって、他人の知るところではない¹⁰⁴。「倫理学は、私が契約で結んだ約定を、たとえ先方がその履行を私に強制することができない場合であっても、それでも履行せねばならないと命令する」(Kant,I., 1914(←1797)Bd. VI.S. 219=11:34 ページ)。強制は他人からなされずとも、私が引き受けなくてはならぬものである。

いやしくも人間が理性的な存在者であるためには、倫理は普遍化可能でなければならないだろう。カントにかぎれば、普遍化可能性のなかの自律は、合理性の指標である。ノーマンの指摘を援用し、 i が困っている他人を助けないことでさえ、 i じしんによって認められる $Af_i(i)$ 、のパラメータ i を普遍化することに通じて[「自己評価中立性」(SN)のかたちで]、カントの自律の形式的定式化を獲得できる。——あなたは困っている他人を助けなくてもよい $Af_i(i)$ としても、他人が困っているあなたを助けずによいと [あなたは] 認める $Af_i(j)$ わけではない、いやあなたは他人が [あなたを] 助けないことを止めさせるべきである(「行為者相関性」)。 $Af_i(j)$ のわけではないとしても、他人が困っているあなたを助けることを拒否したら、他人にはそれが正当化される $Af_j(j)$ 、つまりあなたを助けずともよい理由が他人にはある(「観察者相関性」)。これらのことは、カントにおいて、以下つまり——あなたが困っている誰かを助けなくてもよい $Af_i(i)$ ならば、いかなる他人も誰かを助けずともよい $Af_j(j)$ 場合、かつその場合にかぎる(「自己評価中立性」)——と、矛盾しない。慈善は個人の自律に委ねられるにもかかわらず、慈善を施してもらわなくては、カントじしんには苦々しく思えることと通じている。「私に対する個の責務は、これが欠けると、他者を私の敵と

¹⁰⁴ 所有権の保障は以下のロジックによっている。「所有権を侵害しないように行為せよ」とは、「それぞれの権利者間の権利行使の自由」という単純な内容のものではなかろうか。すなわち、各人はそれぞれ特定の債権、所有権を对人的対物的に有し、Xが自分の権利を行使する自由は、Yが彼の権利を行使する自由を侵害せず、同様に Yの権利行使の自由は Xの権利行使の自由を侵害しないのである」(中島義道,2006,184 ページ)。

私に見なさせ、私が彼を憎むようにするであろうものとして、認識される。不正以上に憤激させるものは決してない。われわれの耐える他のすべての災いは、これに比べれば無である。自己保存が種の保存とともに成り立つかぎり、責務はただ必要な自己保存にのみかわり、その他のものは恩顧と好意である。しかし私はまた、私が穴に落ちてもがいているのを見ながら、冷たく通りすぎて行くすべての人を憎むであろう」(「『美と崇高の感情にかんする観察』覚え書き」 Bd.20:S.36.=18:180 ページ)。

嘘をつくべきではないことに関連した、超越的当為の考察は、紙幅の関係上、別稿に委ねなくてはならない。自分*i*がUでないと判断することを——自分*i*ではUでないと嘘をつくことを——*i*は、認められないとしても、他人に「自分が匿ってもらう嘘をついてもらう」ことについては、自分*i*は認めるにやぶさかでないのであって、*j*が嘘をつかないことを止めてほしいと考える(行為者相関性)。また他人*j*の嘘を自分*i*が許せたとしても、他人*j*には*j*で嘘をつくべきではない理由がある(観察者相関性)。しかるに自分が嘘をつくことを認められないならば、他人が嘘をつくことを認められない場合、かつその場合に限られる(自己評価中立性)。

こうして自己評価中立性(SN)を根幹とする自律モデルのリッカート価値哲学は、心理的なAffirm(承認すること)ができるかに即しているのである。ことがらは主知主義的な問題ではない。まさに経験的人格の誠実性、つまりエンドクサの僭称を自己欺瞞的に遂行してはならないことが問われているのである。これはフィヒテを経由で、ヴィンデルバント／リッカートが問題にするところである。つまるところ、判断する主観が前科学的個体の概念に関するエンドクサ¹⁰⁵に、制約されるとはいえ、究極的には——倫理的には——判断の責任は個人、つまり経験的人格が担わなくてはならないと考える。つまり権利問題として価値的決断によって、観念論的に【客体】がかたちづくられるのである。もちろん、所与については意見の分かれるところだが、ディルタイ的な連関と思考圏が重なるリッカートでも、連関的なアプリオリが介入するはずである。つまり歴史的世界に現われる前科学的個体の概念を、前提とせざるをえないであろう。

もとより前科学的な個体という質料を所与とするかぎり、妥当する価値がエンドクサとして「理念的」な先導概念になり、一見、対応説的な傾きをもつことは、再三繰り返したとおりである。

追記：本論文は、JSPS科研費15K02024の助成を受けたものである。

¹⁰⁵ 繰り返しになるが、この判断による派生態をリッカートの「所与」と見なす。

文献〔全集はドイツ語全集に依拠する。〕

- 安彦一恵,2013,「後発近代思想の一典型としての三木哲学」『日本倫理学会第64回大会報告集』,28-31頁。
- Bast,Rainer A.1999, *Philosophische Aufsätze,Heinrich Rickert*, Tübingen: J.C.B. Mohr. (UTB für Wissenschaft, 2078)
- Bolland,Gerardus Johannes Petrus Josephus,1902,*Alte Vernunft und neuer Verstand oder Der Unterschied im Princip zwischen Hegel und E.v.Hartmann ; Ein Versuch zur Anregung neuer Hegelstudien*,Leiden,:A.H.Adriani.
- カッシーラー・E 著, 山本義隆／村岡晋一訳,1996,『認識問題 4 近代の哲学と科学における』みすず書房。
- Cohen, Hermann, 1987 (←1871), 5.Auf.,*Kants Theorie der Erfahrung*, in;*Werke*, Hildesheim : G. Olms,Bd.I.1.3.Aufl.に準拠。
- Cohen,Hermann,1984(←1883),4.Aufl.,*Das Prinzip der Infinitesimal-Methode und seine Geschichte, Ein Kapitel zur Grundlegung der Erkenntniskritik*,in; *Werke*, Hildesheim : G. Olms,Bd.5,1, 1. Aufl.に準拠。
- Cohen,Hermann,1997(←1914),4.Aufl.,*System der Philosophie,Erster Teil,Logik der reinen Erkenntnis*,in; *Werke*,Hildesheim : G. Olms,Bd.6,2.verb Aufl.に準拠。
- Cohen,Hermann,2002(←1907),6.Auf.,*System der Philosophie,Zweiter Teil,, Ethik des reinen Willens*, in; *Werke*, Hildesheim : G. Olms,Bd.7.2.revidierte Aufl.に依拠。
- Cohn,Jonas.,1923,*Theorie der Dialektik: Formenlehre der Philosophie*,Leipzig: F. Meiner.
- デイヴィドソン・D.著,柏端達也他訳,2010,『真理・言語・歴史』春秋社。
- Dilthey,Wilhelm,1905,“Brief von Wilhelm Dilthey an Erich Adickes“,in;Hrsg.Lehmann,G., 1969,“Beilage Briefwechsel zwischen Wilhelm Dilthey und Erich Adickes(Winter1904-1905)“ *Beiträge zur Geschichte und Interpretation der Philosophie Kants*,Berlin:Walter de Gruyter, S.12-26.
- Dilthey,Wilhelm,1959(←1883), 4., unveränd. Aufl.*Einleitung in die Geisteswissenschaften,I*, in;*Wilhelm Dilthey: Gesammelte Schriften*, Leipzig und Berlin:B.G.Teubner,Bd.I.=牧野英二編集／校閲,2006,「精神科学序説 第一巻」『デイルタイ全集 第一巻 精神科学序説I』法政大学出版局,3-480 ページ。
- Dilthey,Wilhelm,1982, 7., unveränd., Aufl. *Die Geistes Welt, Einleitung in die Philosophie des Lebens,I.Hälfte*,in;*Wilhelm Dilthey: Gesammelte Schriften*, Leipzig und Berlin:B.G.Teubner, Bd.V.
- Dilthey,Wilhelm, 1982(←1894),“Ideen über eine beschreibende und zergliedernde Psychologie“,in; *Die Geistes Welt, Einleitung in die Philosophie des Lebens,I.Hälfte*,in;*Wilhelm Dilthey: Gesammelte Schriften*, Leipzig und Berlin:B.G.Teubner,Bd.V. S.139-240. =丸山高司訳,2003,「記述的分析的心理学」『デイルタイ全集 第三巻 論理学・心理学論集』法政大学出

版局,637-756 ページ。

Dilthey, Wilhelm, 1982(←1895/1896), “[Über vergleichende Psychologie.] Beiträge zum Studium der Individualität“; in; *Die Geistes Welt, Einleitung in die Philosophie des Lebens, I. Hälfte*, in; *Wilhelm Dilthey: Gesammelte Schriften*, Leipzig und Berlin: B.G. Teubner, Bd. V. S. 241-316. = 三木博訳, 2003, 「比較心理学——個性の研究」『デイルタイ全集 第三巻 論理学・心理学論集』法政大学出版局, 757-842 ページ。

Dilthey, Wilhelm, 1968(←1906/他), 4. unveränderte Aufl., *Die Jugendgeschichte Hegels und andere Abhandlungen zur Geschichte des deutschen Idealismus*, in; *Wilhelm, Dilthey: Gesammelte Schriften*, Stuttgart: B.G. Teubner / Göttingen: Vandenhoeck & Ruprecht., Bd. VI. S. 5-251. = 飛田満訳, 2010, 「ヘーゲルの青年時代」『デイルタイ全集 第八巻 近代ドイツ精神史研究』法政大学出版局, 330-619 ページ。

Dilthey, Wilhelm, 1978(←1987), 6. unveränderte Aufl. “Die Einbildungskraft des Dichters——Bausteine für eine Petik“ in; *Die geistige Welt : Einleitung in die Philosophie des Lebens, II. Hälfte*, *Wilhelm, Dilthey: Gesammelte Schriften*, Stuttgart: B.G. Teubner / Göttingen: Vandenhoeck & Ruprecht., Bd. VI. S. 103-241. = 和泉雅人 / 前田富士男 / 伊藤直樹訳, 2015, 「詩人の想像力——詩学のための礎石」『デイルタイ全集 第五巻第一分冊 詩学・美学論集』法政大学出版局, 167-330 ページ。

Dilthey, Wilhelm, 1977(←1911), 5. unveränderte Aufl. “Die Typen der Weltanschauung und ihre Ausbildung in den metaphysischen Systemen“; in; *Wilhelm, Dilthey: Gesammelte Schriften*, Stuttgart: B.G. Teubner / Göttingen: Vandenhoeck & Ruprecht., Bd. VIII. S. 75-118. = 菅原潤訳, 2010, 「世界観の諸類型と、形而上学的諸体系におけるそれらの類型の形成」『デイルタイ全集 第四巻 世界観と歴史理論』法政大学出版局, 485-534 ページ。

Dilthey, Wilhelm, 1979(←ca. 1910), 7. unveränderte Aufl. “Plan der Fortsetzung zum Aufbau der geschichtlichen Welt in den Geisteswissenschaften“, in; *Wilhelm, Dilthey: Gesammelte Schriften*, Stuttgart: B.G. Teubner / Göttingen: Vandenhoeck & Ruprecht., Bd. VII. S. 191-291. = 西谷敬訳, 2010, 「精神科学における歴史的世界の構成の続編の構想 歴史的理性批判のための草案」『デイルタイ全集 第四巻 世界観と歴史理論』法政大学出版局, 209-330 ページ。

Dilthey, Wilhelm, 1982(←1892/1893), *Leben und Erkennen. Ein Entwurf zur Erkenntnis theoretischen Logik und Kategorienlehre*, in; *Wilhelm, Dilthey: Gesammelte Schriften*, Stuttgart : B.G. Teubner / Göttingen : Vandenhoeck & Ruprecht., Bd. XIX. S. 333-388. = 伊藤直樹訳, 2003, 「生と認識——認識論的論理学とカテゴリー論のための草案」『デイルタイ全集 第三巻 論理学・心理学論集』法政大学出版局, 559-633 ページ。

Dilthey, Wilhelm, 1990(←1883), “Die Vorlesung zur Einleitung in die Geisteswissenschaften“, in; *Wilhelm, Dilthey: Gesammelte Schriften*, Stuttgart: B.G. Teubner / Göttingen: Vandenhoeck & Ruprecht., Bd. XX. S. 127-164. = 塚本正明訳, 2003, 「精神科学序説講義——精神科学研究序説。法学、国家学、神学および歴史学」『デイルタイ全集 第二巻 精神科学序説 II』

- 法政大学出版局,77-119 ページ。
- Dilthey,Wilhelm,2004(←nach1904),”Kritik des Erkenntnis- und Wertproblems bei H.Rickert und in der Phänomenologie, in;Wilhelm,Dilthey:*Gesammelte Schriften*, Stuttgart:B.G.Teubner/Göttingen:Vandenhoeck & Ruprecht.,Bd.XXIV.S.267-309.
- Dilthey,Wilhelm,2005(←1865),“Novalis“,in; Wilhelm,Dilthey:*Gesammelte Schriften*, Stuttgart: B.G. Teubner/Göttingen:Vandenhoeck & Ruprecht.,Bd.XXVI.S.173-223.=森本康裕／寺田雄介／野端聡美訳,2015,「ノヴァーリス」『デイルタイ全集 第五巻 第一分冊 詩学・美学論集』法政大学出版局,565-642 ページ。
- Fichte,Johann Gottlieb,1977(←1798-1799), Das System der Sittenlehre, in; Hrsg. von Reinhard Lauth und Hans Gliwitzky unter Mitwirkung von Hans Michael Baumgartner, Erich Fuchs, Kurt Hiller und Peter K. Schneider,*Fichte Gesamtausgabe der Bayerischen Akademie der Wissenschaften, Werke 1798 - 1799*, Stuttgart-Bad Cannstatt:F. Frommann.,Band 5.
- Frege,Gottlob,1918, "Der Gedanke. Eine logische Untersuchung". in: *Beiträge zur Philosophie des deutschen Idealismus*, Deutschen Philosophischen Gesellschaft,Bd. I. 1918–1919, S.58-77=野本和幸訳,1999,「思想——論理探究〔I〕」黒田亘／野本和幸編『フレーゲ著作集 哲学論集 4』勁草書房,203-235 ページ。
- Frege,Gottlob,1976,Hrsg.von Gabriel,G./Hermes,H./Kaulbach,F./Thiel,Ch./Veraart,A.,*Wissenschaftlich-er Briefwechsel*,Hamburg:Felix Meiner Verlag.=フレーゲ・G 著,野本和幸訳,2002,「書簡集付「日記」」『フレーゲ著作集 第六巻』勁草書房。
- フレーゲ・G 著,藤村龍雄訳,1999(←1879),「概念記法」『フレーゲ著作集 第一巻』勁草書房。
- Gabriel,Gotfried,&Schlotter,Sven,2013, ”Von der Abbild-zur Anerkennungstheorie der Wahrheit Frege im Neukantianismus“,in;Hrsg.von Kublica,T.,*Bild,Abbild und Wahrheit,von der Gegenwart des Neukantianismus,Studien und Materialien zum Neukantianismus*, Würzburg: Königshausen und Neumann, Bd.30.S.23-39.
- Giovanelli,Margo,2007, “Kants Grundsatz der’ Antizipation der Wahrnehmung’ und seine Bedeutung für die Philosophie des Marburger Neukantianismus “, in;Hrsg.von Heinz. M/ Krijnen,C. ,*KaNeukantianismus/Fortschritt oder Rückschritt?,Studien und Materialien zum Neukantianismus*, Würzburg: Königshausen & Neumann, Bd.23.S.37-56.
- Glockner,Hermann,1969,*Heidelberger Bilderbuch,Erinnerung von Hermann Glockner*,Bonn:H. Bouvier u.Co.Verlag.
- Griffioen,Sander,1998, ”Rickert, Windelband, Hegel und das Weltanschauungsbedürfnis” ,in; Hrsg. von Krijnen,C/Orth,E.W.,*Sinn,Geltung, Wert,Neukantianische Motive in der modernen Kulturphilosophie, Studien und Materialien zum Neukantianismus*, Würzburg: Königshausen & Neumann,Bd.12.S.57-72.
- ハバーマス,ユルゲン著,城塚登／遠藤克彦訳,1979,「分析科学的理論と弁証法」アドルノ／ポパー他著『社会科学の論理——ドイツ社会学における実証主義論争』河出書房新

- 社,161-197 ページ。
- Hauptabteilung,Nachlaß Max Weber.Geheimes Staatarchiv preußischer Kulturbesitz, GStAPK と略記。
- ヘーゲル G・W・F 著,武市健人訳,1954、『歴史哲学 上』『ヘーゲル全集 10』岩波書店。
- Hegel,Georg Wilhelm Friedrich,1970(←1807),*Phänomenologie des Geistes, Theorie-Werkausgabe ; Werke / Georg Wilhelm Friedrich Hegel* ; Frankfurt am Main : Suhrkamp,Bd. 3.
- Hegel,Georg Wilhelm Friedrich,1975, hrsg. von Georg Lasson,*Wissenschaft der Logik*, Leipzig : F. Meiner,(Philosophische Bibliothek, Bd. 56-57.),Teil 2.
- ヘーゲル G・W・F 著,上妻精訳,1993,『信仰と知』岩波書店。
- ヘーゲル G・W・F 著,真下信一／宮本十蔵訳,1996,『小論理学』『ヘーゲル全集 1』岩波書店。
- Heidegger,Martin,1977(←1927a),*Sein und Zeit*, Frankfurt am Mein:Vittorio Klostermann,GA2.
- Heidegger,Martin,1978(←1916),“Der Zeitbegriff in der Geisteswissenschaft”,in;*Frihe Schriften*, Frankfurt am Mein:Vittorio Klostermann.,GA1.S.413-433.
- Heidegger,Martin,1979(←1925),*Prolegomena zur Geschichte Zeitbegriffs*, Frankfurt am Mein: Vittorio Klostermann ,GA20.
- Heidegger,Martin,1987a(←1919a),“Die Idee der Philosophie und das Weltanschauungs problem”, in;*Zur Bestimmung der Philosophie* , Frankfurt am Mein:Vittorio Kloster mann, GA56/57. S.3-117.= 北川東子訳,1993,「哲学の理念と世界観問題」『哲学の使命について ハイデッガー全集 第 56/57 巻』創文社,3-125 ページ。
- Heidegger,Martin,1987b(←1919b),“Phänomenologie und transzendente Wertphilosophie”,in;*Zur Bestimmung der Philosophie* , Frankfurt am Mein:Vittorio Klostermann,GA56/57.S.121-203.= 北川東子訳,1993,「現象学と超越論的価値哲学」『哲学の使命について ハイデッガー全集 第 56/57 巻』創文社,127-214 ページ。
- Heidegger,Martin,1989(←1927b),*Die Grundprobleme der Phänomenologie*, Frankfurt am Mein: Vittorio Klostermann, GA24.
- Heidegger,Martin,1995(←1976), 2Aufl.,*Logik—Die Frage nach der Wahrheit*. Frankfurt am Mein:Vittorio Klostermann,GA21.
- Heidegger,Martin,1996(←1961),*Nitzsche*, Frankfurt am Mein:Vittorio Klostermann,GA6.1.
- Heinz,Marion,1997,“Die Fichte-Rezeption in der Südwestdeutschen Schule des Neukantianismus, in;Hrsg.von Schrader,W.H.,Fichte im 20.Jahrhundert.200 Jahre Wissenschaftslehre— Die Philosophie Johann Gottlieb Fichtes,S.109-129.
- Heinz, Marion,2002,“Fichte und die philosophische Methode bei Windelband“,in; Hrsg.von Pätzold,D/Krijnen,C.*Neukantianismus und das Erbe des deutschen Idealismus:die philosophische Methode,Studien und Materialien zum Neukantianismus,Würzburg:* Königshausen & Neumann, Bd.19.S.135-146.
- Heinz,Marion,2007,“Nomalbewusstsein und die Kantischen Urteilsformen“,in;Hrsg.von Heinz.M/ Krijnen,C. ,*Kant im Neukantianismus/Fortschritt oder Rückschritt?,Studien und Materialien zum Neukantianismus*, Würzburg: Königshausen & Neumann, Bd.23.S.75-90.
- 廣松渉,1980,『弁証法の論理』青土社。

- Holzhey, Helmut., 2002, "Entzauberung des Pantheismus, Cohen Kritik an Hegels und Schellings Metaphysik", in; Hrsg. von Pätzold, D., /Krijnen, C., *Der Neukantianismus und das Erbe des deutschen Idealismus: die philosophische Methode, Studien und Materialien zum Neukantianismus*, Würzburg: Königshausen & Neumann, Bd.19.S.49-64.
- フーゴ・オット著, 北川東子 / 藤澤賢一郎 / 忽那敬三訳, 1995, 『マルティン・ハイデガー 伝記の途上で』 未来社。
- Husserl, Edmund, 1975, *Logische Untersuchungen, Erster Band, Erster Teil, Prolegomena zur reinen Logik*, *Husserliana*, Haag: Martinus Nijhoff, Bd. XVIII/1.
- Husserl, Edmund, 1976, *Ideen zu einer reinen Phänomenologie und phänomenologischen Philosophie, Erster Buch, Allgemeine Einführung in die reine Phänomenologie, I Halbband*, *Husserliana*, Haag: Martinus Nijhoff, Bd. III/1.
- Husserl, Edmund, 1984, *Logische Untersuchungen, Zweiter Band, Erster Teil, Untersuchungen zur Phänomenologie und Theorie der Erkenntnis*, *Husserliana*, Bd. XIX/1. Haag: Martinus Nijhoff.
- 石川文康, 1989, 「コーヘンの非存在論」『理想』理想社, No.643, 84-94 ページ。
- 石川求, 2015, 「ヘルマン・コーエンの誤解あるいは逸脱をたどる」『思想』2015年1月号, No.1089, 125-151 ページ。
- 板橋勇仁, 2004, 『西田哲学の論理と方法 徹底的批評主義とは何か』法政大学出版局。
- 伊藤直樹, 2007, 「ディルタイとヘルムホルツ」日本ディルタイ協会編『ディルタイ研究』, 2006/2007, 18号, 22-37 ページ。
- Kant, Immanuel, 1902(←1756), *Metaphysice cum geometrica iunctae usus in philosophia naturali, cuius specimen I. continet monadologiam physica*, in; Hrsg. von der Königlich Preußischen Akademie der Wissenschaften, *Kant's gesammelte Schriften*, Berlin: Georg Reimer, Bd. I. S. 473-487. = 松山壽一訳, 2000, 「自然モナド論」『カント全集』岩波書店, 第2巻, 233.-258 ページ。
- Kant, Immanuel, 1904(←1781A/1787B), *Kritik der reinen Vernunft*, in; Hrsg. von der Königlich Preußischen Akademie der Wissenschaften, *Kant's gesammelte Schriften*, Berlin: Georg Reimer, Bd. III / IV. = 有福孝岳訳, 2001-2006, 『純粹理性批判 上・中・下』『カント全集』岩波書店, 第4~6巻。→略号 KrV
- Kant, Immanuel, 1908(←1788), *Kritik der praktischen Vernunft*, in; Hrsg. von der Königlich Preußischen Akademie der Wissenschaften, *Kant's gesammelte Schriften*, Berlin: Georg Reimer, Bd. V. S. 1-163. = 坂部恵 / 伊古田理訳, 2000, 『実践理性批判』『カント全集』岩波書店, 第7巻, 117-357 ページ。→略号 KpV
- Kant, Immanuel, 1911, *Reflexionen zur Mathematik, Physik und Chemie und physischen Geographie*, in; Hrsg. von der Königlich Preußischen Akademie der Wissenschaften, *Kant's gesammelte Schriften*, Berlin: Georg Reimer, Bd. XIV.
- Kant, Immanuel, 1913(←1790), *Kritik der Urteilskraft*, in; Hrsg. von der Königlich Preußischen Akademie der Wissenschaften, *Kant's gesammelte Schriften*, Berlin: Georg Reimer, Bd. V. = 牧野

- 英二訳,1999-2000,『判断力批判 上・下』『カント全集』岩波書店,第 8~9 卷。→略号 KU
- Kant,Immanuel, 1914(←1797),*Die Metaphysik der Sitten* in;Hrsg.von der Königlich Preußischen Akademie der Wissenschaften,*Kant's gesammelte Schriften*, Berlin:Georg Reimer,Bd.VI.S. 203-493.=樽井正義/池尾恭一訳,2002,『人倫の形而上学』『カント全集』岩波書店,第 11 卷。
- Kant,Immanuel,1917/1968(←1798),*Der Streit der Facultäten in drei Abschnitten von Immanuel Kant*,in;Hrsg.von der Königlich Preußischen Akademie der Wissenschaften,*Kant's gesammelte Schriften*,Berlin:Georg Reimer,Bd.VII.S.1-116=角忍/竹山重光訳,2002,『諸学部の争い』『カント全集』岩波書店,第 18 卷,1-156 ページ。
- Kant,Immanuel,1917(←1798),*Anthropologie in pragmatischer Hinsicht*, in;Hrsg.von der Königlich Preußischen Akademie der Wissenschaften,*Kant's gesammelte Schriften*, Berlin:Georg Reimer,Bd.VII.S.117-333。=渋谷治美訳,2003,『実用的見地における人間学』『カント全集』岩波書店,第 15 卷,1-332 ページ。
- Kant,Immanuel,1928, *Reflexionen zur Metaphysik, Teil 2*,in;Hrsg.von der Königlich Preußischen Akademie der Wissenschaften,*Kant's gesammelte Schriften*, Berlin:Walter de Gruyter, Bd. XVIII.
- Kant,Immanuel,1991,*Bemerkungen in den Beobachtungen über das Gefühl des Schönen und Erhabenen* 《Neuherausgegeben und kommentiert von Marie Rischmüller,Hamburg:F.Meiner。=久保光志訳,2002,『美と崇高の感情にかんする観察』への覚え書き』『カント全集』岩波書店,第18卷,157-253ページ。
- Kant,Immanuel,1997(1781/82?),”Die Vorlesung des Wintersemesters 1781/82[?] aufgrund der Nachschriften Menschenkunde,Petersburg, in;Hrsg.von der Berlin-Brandenburgischen Akademie der Wissenschaften,*Kant's gesammelte Schriften*, Berlin: Walter de Gruyter,Bd.XXV.2.Hälfte. S.849-1203.=中島徹訳,2002,『人間学講義』『カント全集』岩波書店,第20卷,287-434ページ。
- 加藤泰史,2004,「多元的哲学史の構想——ヴィンデルバントと西洋哲学史の問題」哲学史研究会編『西洋哲学史観と時代区分』昭和堂,80-136 ページ。
- 加藤泰史,2015,「カントと価値の問題」加藤泰史・舟場保之編『カントと現代哲学 現代カント研究 13』カント研究会,晃洋書房,1-17 ページ。
- Kaulbach,Christian Friedrich,1990,*Philosophie des Perspektivismus*,Tübingen:J.C.B.Mohr.
- 金正旭,2012,「ヴィンデルバントの判断論」『実存思想論集』第 27 号, 119-134 ページ。
- 小林道夫,1996,『科学哲学』産業図書。
- Köhnke,Klaus Christian,1986,*Entstehung und Aufstieg des Neukantianismus:die deutsche Universitätsphilosophie zwischen Idealismus und Positivismus*,Tübingen:J.C.B.Mohr.
- Korsgaard,Christine,M.pbk.2004(←1996),*Creating the Kingdom of Ends*,Cambridge;Cambridge

- University Press.
- Krijnen,Christian,1998,“Philosophieren im Schatten des Nihilismus.Ein Hinführung zum neukantianischen Beitrag“, in;Hrsg.von Krijnen,C/Orth,E.W.,*Sinn,Geltung,Wert, Neukantianische Motive in der modernen Kulturphilosophie, Studien und Materialien zum Neukantianismus*, Würzburg: Königshausen & Neumann, Bd.12.S.11-34.
- Krijnen,Christian,2001,*Nachmetaphysischer Sinn, Ein problemgeschichtliche und systematische Studie zu den Prinzipien der Wertphilosophie Heinrich Rickerts*,*Studien und Materialien zum Neukantianismus*, Würzburg: Königshausen & Neumann,Bd.16.
- Krijnen,Christian,2002,“Abusoluter oder kritischer Standpunkt ? Das methodisch-genetische Problem des Anfangs der Philosophie bei Hegel und Rickert“, in; Hrsg.von Pätzold,D/ Krijnen,C. , *Neukantianismus und das Erbe des deutschen Idealismus:die philosophische Methode*,*Studien und Materialien zum Neukantianismus*, Würzburg: Königshausen & Neumann,Bd. 19. S.161 -180.
- Krijnen,Christian,2013, “Vom Abbild zum Begriff—Wahrheit als Übereinstimmung des Denken mit sich“ ,in;Hrsg.von Kublica,T.,*Bild,Abbild und Wahrheit,von der Gegenwart des Neukantianismus*,*Studien und Materialien zum Neukantianismus*, Würzburg:Königshausen und Neumann, Bd.30.S.41-58..
- 九鬼一人,2003,『真理・価値・価値観』岡山商科大学。
- 九鬼一人,2006,「新カント学派とカント」坂部恵・有福孝岳・牧野英二編『カント全集別巻』岩波書店,81-96 ページ。
- 九鬼一人,2007/2008,「化肉した価値——リッカートの「現実態」への諷——」日本デイルタイ協会『デイルタイ研究』第19号,25-41 ページ。
- 九鬼一人,2014(←1989),『オン・デマンド版 新カント学派の価値哲学』弘文堂。
- 九鬼一人,2016,「加藤泰史論文の批判的継承——カント的対比から多元的価値分類へ——」『岡山商大論叢』第52巻1号,1-22 ページ。
- 熊野純彦,2006,『西洋哲学史 近代から現代へ』岩波新書。
- Kuntz,Paul Grimley,1971,*Santayana's Reading of Lotze's Logk and Metaphysik Revealed in Marginalia*,in;Ed.by Kutz,P.G.*Lotze's System of Philosophy*,Bloomington/London:India University Press.
- Laas,Ernst,1879,*Idealismus und Positivismus : eine kritische Auseinandersetzung*,Berlin:Weidmann.
- Lask,Emil,1923(←1911),*Die Lehre vom Urteil*, in;*Emil Lask: Gesammelte Schriften* , Tübingen: J.C.B.Mohr,Bd.II.S.283-463.
- Leibniz,Gottfried Wilhelm,1875-1890,*Essais de Théodicée, sur la Bonté de Dieu, la Libreté de l'Homme et l'Orgine du Mal*,in;Hrsg.von C.I. Gerhardt, ,*Die philosophischen Schriften von Gottfried Wilhelm Leibniz*, Berlin:Weidmannsche Buchhandlung, Bd.IV.=佐々木能章訳,1990,『宗教哲学：[弁神論] 上 ライプニッツ著作集 第六巻』工作舎。
- ライプニッツ・G・W.著,谷川多佳子／福島清紀／岡部英男訳,1993(←1695),『人間知性新論

- ライプニッツ著作集 第四巻』 工作舎。
- Liebmann, Otto, 1883, "Über philosophische Tradition : eine akademische Antrittsrede gehalten in der Aula der Universität Jena am 9. December 1882", Strassburg : K.J. Trübner.
- Lotze, Rudolph Hermann, 1901, 3. Aufl., *Grundzüge der Metaphysik, Diktate aus den Vorlesungen*, Leipzig: S. Hirzel=山本泰教訳, 1928, 3. Aufl., 『形而上学綱要』 理想社。
- Lotze, Rudolph Hermann, 1928(←1912), 2. Aufl., herausgegeben und eingeleitet von Georg Misch. *Logik : drei Bücher vom Denken, vom Untersuchen und vom Erkennen* .(Philosophische Bibliothek ; Bd. 141 ,System der Philosophie ; Teil. 1), Leipzig : F. Meiner.
- Lübbe, Hermann, 1987 (←1963), "Neukantianischer Sozialismus", in; Hrsg. von Ollig, Hans-Ludwig, (), *Materialien zur Neukantianismus-Diskussion*, Darmstadt: Wissenschaftliche Buch-Gesellschaft, S.219-263.
- Lyne, Ian, 2000, "Rickert and Heidegger: On the Value of Everyday Objects", in; *Kant-Studien*. Vol.91, S.204-225.
- 牧野英二, 1996, 『遠近法主義の哲学——カントの共通感覚論と理性批判の間』 弘文堂。
- 牧野英二, 2013, 『「持続可能性の哲学」への道——ポストコロニアル理性批判と生の地平』 法政大学出版局。
- Makkreel, Rudolf A., 1975, *Dilthey——Philosopher of Human Studies*, Princeton and London: Princeton University Press.=大野篤一郎／田中誠／小松洋一／伊藤道生訳, 1993, 『デイルタイ 精神科学の哲学者』 法政大学出版会。
- 丸山高司, 1985, 『人間科学の方法論争』 勁草書房。
- Massimilla, Edoardo, 2012, *Max Weber zwischen Heinrich Rickert und Johannes von Kries, Drei Studien, Studien und Materialien zum Neukantianismus*, Würzburg: Königshausen & Neumann, Bd.13.
- Meerbote, Ralf, 1995, Rickerts Auseinandersetzung mit dem Riehlschen Realismus, *Kant- Studien*, Bd.86.S.346-362.
- 向井守, 1997, 『マックス・ウェーバーの科学論——デイルタイからウェーバーへの精神的考察——』 ミネルヴァ書房。
- 村岡普一, 2008, 『対話の哲学 ドイツ・ユダヤ思想の隠れた系譜』 講談社選書メチエ。
- Munk, Reiner, 1998, "Alterität im Denken Hermann Cohens", in; Hrsg. von Krijnen, C/Orth, E. W., *Sinn, Geltung, Wert, Neukantianische Motive in der modernen Kulturphilosophie, Studien und Materialien zum Neukantianismus*, Würzburg: Königshausen & Neumann, Bd.12.S.109-120.
- 中島義道, 2006, 『カントの法論』 ちくま学芸文庫。
- 中島義道, 2011, 『悪への自由：カント倫理学の深層文法』 勁草書房
- Natorp, Paul Gerhard, 1911, *Philosophie, ihr Problem und ihre Probleme : Einführung in den kritischen Idealismus*, (Wege zur Philosophie, Ergänzungsreihe . Einführungen in die Philosophie der Gegenwart ; Nr. 1), Göttingen: Vandenhoeck & Ruprecht.

- Natorp,Paul,1912,“Kant und die Marburger Schule.” in; *Kant-Studien* , Bd.17.S.193-221. Reprinted by Reuther &Reichard, Berlin, as a separate offprint from Kant-Studien.
- Natorp,Natorp,1917/1918,“Husserls » Ideem « zu einer reinen Phänomenologie“,*Logos*, Bd.VII, S.224-246.
- ノーマン・R 著,塚崎智/石崎嘉彦/樫則章訳,2001,『道徳の哲学者たち』ナカニシヤ出版。
- 野本和幸,2012,『フレーゲ哲学の全貌』勁草書房。
- 野崎敏郎,2016,「ヴェーバー『職業としての学問』の研究:完全版」晃洋書房。
- Ollig,Hans-Ludwig,1994, “Das Problem der Religion und die Philosophie des Neu kantianismus“, in;Hrsg.von Orth,E.W./Holtzhey,H.*Neukantianismus:Perspektiven und Probleme,Studien und Materialien zum Neukantianismus*, Würzburg: Königshausen & Neumann,Bd.1.S.113-135. 大森荘蔵,1985,『知識と学問の構造』放送大学教育振興会。
- 大森荘蔵,1986,『思考と論理』放送大学教育振興会。
- Orth,Ernst Wolfgang,2001a, 'Trendelenburg und die Wissenschaft als Kulturfaktum' in; Hrsg.von Wolfgang Marx, Ernst Wolfgang Orth, *Hermann Cohen und die Erkenntnistheorie,Studien und Materialien zum Neukantianismus*, Würzburg: Königshausen & Neumann, Bd.18.S.49-61.
- Orth,Ernst Wolfgang,2001b, "Kultur und Vorstellungsmassen Ansätze zur Entwicklung eines neuen Kulturbegriffs im 19 Jahrhundert bei Johann Friedrich Herbart“,in;Hrsg.von Hoeschen,A./ Schneider,L.,*Herbarts Kultursystem, Perspektiven der Transdisziplinarität im 19.Jahrhundert, Trierer Studien zur Kulturphilosophie*, Würzburg: Königshausen & Neumann, Bd.5.S.25-37.
- Orth,Ernst Wolfgang,2002,Hegelsche Motive in Windelband und Cassirers Kulturphilosophie,in; Hrsg.von Pätzold,D./Krijnen,C.,*Der Neukantianismus und das Erbe des deutschen Idealismus:die philosophische Methode,Studien und Materialien zum Neukantianismus*, Würzburg: Königshausen & Neumann. Bd.19.S.123-134.
- フーゴ・オット著,北川東子/藤澤賢一郎/ 忽那敬三訳,1995,『マルティン・ハイデガー : 伝記への途上で』(ポイエーシス叢書, 29) 未来社。
- Paulsen,Friedrich,1924, 7. Aufl..*Immanuel Kant : sein Leben und seine Lehre*, Stuttgart:Frommann: Frommanns Klassiker der Philosophie, 7.
- Rickert,Heinrich,1892,*Der Gegenstand der Erkenntnis:ein Beitrag zum Problem der philosophischen Transcendenz*,Tübingen:J.C.B.Mohr. →略号 GE1
- Rickert,Heinrich,1896-1902,1.Aufl.,*Die Grenzen der naturwissenschaftlichen Begriffsbildung, eine logische Einleitung in die historischen Wissenschaften*,Tübingen:J.C.B.Mohr.
- Rickert,Heinrich,1899,*Kulturwissenschaft und Naturwissenschaft*,Tübingen:J.C.B.Mohr.
- Rickert,Heinrich,1904,2.Aufl.,*Der Gegenstand der Erkenntnis,Einführung in die Transzendentalphilosophie*, Tübingen:J.C.B.Mohr.→略号 GE2
- Rickert,Heinrich,1905, "Geschichtsphilosophie", in;Hrsg.von Windelband,W.,*Die Philosophie im Beginn des 20 Jahrhunderts,Festschrift für Kuno Fischer*,1Aufl.,Heidelberg:Carl Winter's Universitätsbuchhandlung,S.51-135.

- Rickert, Heinrich, 1907, 2. Aufl., "Geschichtsphilosophie", in; Hrsg. von Windelband, W., *Die Philosophie im Beginn des zwanzigsten Jahrhunderts, Festschrift für Kuno Fischer*. Heidelberg: Carl Winter's Universitätsbuchhandlung, S. 321-422.
- Rickert, Heinrich, 1909, "Zwei Wege der Erkenntnistheorie : Transscendentalpsychologie und Transscendentallogik", *Kant-Studien*, Bd. XIV. S. 169-228.
- Rickert, Heinrich, 1910a, "Vom Begriff der Philosophie", *Logos*, Bd. I. S. 1-34.
- Rickert, Heinrich, 1910b, 2. umgearbeitete und vermehrte Aufl., *Kulturwissenschaft und Naturwissenschaft*, Tübingen: J.C.B. Mohr.
- Rickert, Heinrich, 1913a, *Die Grenzen der naturwissenschaftlichen Begriffsbildung, eine logische Einleitung in die historischen Wissenschaften*, Tübingen: J.C.B. Mohr. 略号 → Gr2
- Rickert, Heinrich, 1913b, "Vom System der Werte", in: *Logos*, Bd. 4, S. 295-327.
- Rickert, Heinrich, 1914, "Über logische und ethische Geltung", in: *Kant-Studien*, Bd. IX. S. 131-166.
- Rickert, Heinrich, 1915a, 1. Aufl., *Wilhelm Windelband*, Tübingen: J.C.B. Mohr. = 杉正俊訳, 1931(2. Aufl. に依拠), 『ヴィルヘルム・ヴァインルバント』 哲学論叢, 岩波書店。
- Rickert, Heinrich, 1915b, 3. völlig umgearb. und erweit. Aufl., *Der Gegenstand der Erkenntnis: Einführung in die Transzendentalphilosophie*, Tübingen: J.C.B. Mohr. 略号 → GE3
- Rickert, Heinrich, 1921a, *System der Philosophie, Erster Teil : Allgemeine Grundlegung der Philosophie*, Tübingen: J.C.B. Mohr.
- Rickert, Heinrich, 1921b, 4. und 5. verb. Aufl., *Der Gegenstand der Erkenntnis: Einführung in die Transzendentalphilosophie*, Tübingen: J.C.B. Mohr. 略号 → GE4/5
- Rickert, Heinrich, 1922a, "Goethes Faust und der deutsche Idealismus", Für die Zeitschrift 'Kaizo', in; *Kaizo*, Bd. 4, Tokio, Nr. 4. S. 170-184.
- Rickert, Heinrich, 1922b, 2. unveränd. Aufl., *Die Philosophie des Lebens, Darstellung und Kritik der philosophischen Modeströmungen unserer Zeit*, Tübingen: J.C.B. Mohr.
- Rickert, Heinrich, 1924a, 2. umg. Aufl., *Das Eine, die Einheit und die Eins. bemerkungen zur Logik des Zahlbegriffs*. Tübingen: J.C.B. Mohr.
- Rickert, Heinrich, 1924b, *Kant als Philosoph der modernen Kultur. Ein geschichtsphilosophischer Versuch*, Tübingen: J.C.B. Mohr.
- Rickert, Heinrich, 1926, 6. und 7. durchgesehene und erg. Aufl., *Kulturwissenschaft und Naturwissenschaft*, Tübingen: J.C.B. Mohr.
- Rickert, Heinrich, 1927, "Die Erkenntnis der intelligiblen Welt und das Problem der Metaphysik, Erster Teil", in; *Logos*, Bd. 16. S. 162-203.
- Rickert, Heinrich, 1928, 6. Aufl., *Der Gegenstand der Erkenntnis, Einführung in die Transzendentalphilosophie*, Tübingen: J.C.B. Mohr. → 略号 GE6
- Rickert, Heinrich, 1929, "Die Erkenntnis der intelligiblen Welt und das Problem der Metaphysik, Zweiter Teil", in; *Logos*, Bd. XVIII. S. 36-82.

- Rickert, Heinrich, 1932, "Thesen zum System der Philosophie", in; *Logos*, Bd.22(1933), S.37-57.
- Rickert, Heinrich, 1934, "Die Heidelberger Tradition und Kant Kritizismus", in; *Deutsche systematische Philosophie nach ihren Gestaltern*, Bd.II. Berlin.
- Hrsg. von Ritter, Joachim, 1971-*Historisches Wörterbuch der Philosophie*, Völlig neubearbeitete Ausg. des "Wörterbuchs der philosophischen Begriffe" von Rudolf Eisler, Darmstadt: Wissenschaftliche Buchgesellschaft.
- 佐藤俊樹, 2016, 「ウェーバーの社会学方法論の生成③ リッカートの文化科学——価値関係づけの円環」『書齋の窓』有斐閣, No.648, 69-76 ページ。
- Scheler, Max, 1971, mit einem Anhang herausgegeben von Maria Scheler und Manfred S. Frings, *Frühe Schriften: Gesammelte Werke / Max Scheler*, Bern: Francke, Bd. 1.
- Schultess, Peter, 1984(←1883), Einleitung zu: Einleitung zu Das Prinzip der Infinitesimal-Methode und seine Geschichte, in; *Hermann Cohen, Werke*, Bd. VI.1. Hildesheim : G. Olms.
- Schnädelbach, Herbert, 1983, *Philosophie in Deutschland 1831-1933*, Frankfurt am Main; Suhrkamp = 舟山俊明／朴順南／内藤貴／渡邊福太郎訳, 2009, 『ドイツ哲学史 1831-1933』法政大学出版会。
- シュヴァイツァー著, 斎藤義一／上田閑照訳, 1959, 『カントの宗教哲学(上・下)』『シュヴァイツァー著作集; 第 15-16 卷』白水社。
- Sen, Amartya K., 1982, "Rights and Agency", *Philosophy & Public Affairs*, Vol.11. pp.3-39.
- Signore, Mario, 1994, "Philosophie zwischen Erkenntnistheorie und Weltanschauungslehre", in; Hrsg. von Orth, E.W./Holtzhey, H. *Neukantianismus: Perspektiven und Probleme, Studien und Materialien zum Neukantianismus*, Würzburg: Königshausen & Neumann, Bd.1. S.485-500.
- 塩野谷祐一, 2002, 「日本における経済哲学の源流——左右田喜一郎と杉村広蔵——」『経済と倫理 福祉国家の哲学』東京大学出版会, 387-407 ページ。
- 田邊元, 1963, 「措定判断について」『田邊元全集 第一巻』筑摩書房, 1-10 ページ。
- Wagner, Gerhard, 1987, *Geltung und normativer Zwang : eine Untersuchung zu den neukantianischen Grundlagen der Wissenschaftslehre Max Webers*, Freiburg: Karl Alber.
- Weber, Max, 1973[1922](←1903-1906), 4. Aufl., "Roscher und Knies und die logischen Probleme der historischen Nationalökonomischen Wissenschaften", in; *Gesammelte Aufsätze zur Wissenschaftslehre*, Tübingen: J.C.B. Mohr, S.1-145. = 松井秀親訳, 1955, 『ロツシャーとクニース(一)』未来社。
- Weber, Max, 1973[1922](←1904), 4. Aufl., Die » Objektivität « sozialwissenschaftlicher und sozialpolitischer Erkenntnis, in; *Gesammelte Aufsätze zur Wissenschaftslehre*, Tübingen: J.C.B. Mohr, S.146-214 = 富永祐治／立野保男訳／折原浩補訳, 2007, 『社会科学と社会政策にかかわる認識の「客観性」』岩波文庫。
- Weber, Max, 1973[1922](←1908), 4. Aufl., "R. Stammers 'Überwindung' der materialistischen Geschichtsauffassung", in; *Gesammelte Aufsätze zur Wissenschaftslehre*, Tübingen: J.C.B. Mohr,

- S.291-359.=松井秀親訳,1982,「R・シュタムラーにおける唯物史観の「克服」」『ウェーバー 社会科学論集』河出書房新社,95-206 ページ。
- Weber,Max,1973[1922](←1917),4.Aufl.,“Der Sinn der Wertfreiheit 《 der soziologischen und ökonomischen Wissenschaften“,in;*Gesammelte Aufsätze zur Wissenschaftslehre*,Tübingen: J.C.B.Mohr,S.291-359.=松代和郎訳,1976,『社会科学および経済学の「価値自由」の意味』創文社。
- Wiehl,Reiner,1985,“Die Heidelberger Tradition der Philosophie zwischen Kantianismus Hegelianismus.Kuno Fischer,Wilhelm Windelband, Heinrich Rickert“,in;*SEMPER APERTUS, Sechshundert Jahre Ruprecht-Karl-Universität Heidelberg 1386-1986*,Berlin/Heidelberg/New York/Tokyo:Springer-Verlag,Bd.II.S.413-435.
- Wiley,Thomas E.,1978,*Back to Kant : the revival of Kantianism in German social and historical thought, 1860-1914*,Detroit : Wayne State University Press.
- Windelband, Wilhelm,1884,1.Aufl.,*Präludien,:Aufsätze und Reden zur Einleitung in die Philosophie*,Freiburg &Tübingen:J.C.B.Mohr.(1919,6.unveränd.Aufl., *Präludien,:Aufsätze und Reden zur Philosophie und ihrer Geschichte*,Tübingen:J.C.B.Mohr.)
- Windelband,Wilhelm,1884(←1880),“Über Sokrates“, in; 1884,1.Aufl., *Präludien,:Aufsätze und Reden zur Einleitung in die Philosophie*, Freiburg &Tübingen:J.C.B.Mohr,S.54-87.
- Windelband,Wilhelm,1884(←1881),“Immanuel Kant“, in; 1884,1.Aufl., *Präludien,:Aufsätze und Reden zur Einleitung in die Philosophie*, Freiburg &Tübingen:J.C.B.Mohr,S.112-145.
- Windelband, Wilhelm,1884(←1882a),“Was ist Philosophie?“, in; 1884,1.Aufl., *Präludien,:Aufsätze und Reden zur Einleitung in die Philosophie*, Freiburg &Tübingen:J.C.B.Mohr,S.1-53.
- Windelband, Wilhelm,1884(←1882b),“Normen und Naturgesetze“, in; 1884,1.Aufl., *Präludien,:Aufsätze und Reden zur Einleitung in die Philosophie*, Freiburg &Tübingen:J.C.B.Mohr,S.211-246.
- Windelband,Wilhelm,1884(←1883a),“Kritische oder genetische Methode?“in; 1884,1.Aufl., *Präludien,:Aufsätze und Reden zur Einleitung in die Philosophie*, Freiburg &Tübingen: J.C.B.Mohr,S.247-279.
- Windelband,Wilhelm,1884(←1883b),“Vom Princip der Moral“in; 1884,1.Aufl.,*Präludien,:Aufsätze und Reden zur Einleitung in die Philosophie*, Freiburg &Tübingen:J.C.B.Mohr,S.280-311.
- Windelband,Wilhelm,1884(←1883c),“Sub specie aeternitatis“,in; 1884,1.Aufl., *Präludien,:Aufsätze und Reden zur Einleitung in die Philosophie*, Freiburg &Tübingen:J.C.B.Mohr,S.312-325.
- Windelband,Wilhelm,1900,*Vom System der Kategorien*,“Aus den "Philosophischen Abhandlungen", Christoph Sigwart zu seinem 70. Geburtstag 28. März 1900 gewidmet", Tübingen : J.C.B. Mohr.=篠田英雄訳,1928,『範疇の体系について』岩波書店哲学論叢。
- Windelband,Wilhelm,1907a,“Logik“,in;Hrsg.von Windelband,W.,*Die Philosophie im Beginn des*

zwanzigsten Jahrhunderts, Festschrift für Kuno Fischer. Heidelberg: Carl Winter's Universitätsbuchhandlung, S. 183-207.

Windelband, Wilhelm, 1907b, "Geschichte der Philosophie", in: (Hrsg. von) Windelband, W., *Die Philosophie im Beginn des zwanzigsten Jahrhunderts, Festschrift für Kuno Fischer*. Heidelberg: Carl Winter's Universitätsbuchhandlung, S. 529-554.

Windelband, Wilhelm, 1909a, 2. Aufl. *Die Philosophie im deutschen Geistesleben des XIX. Jahrhunderts, fünf Vorlesungen*, Tübingen: J.C.B. Mohr. = W. ヴィンデルバント 著, 吹田順助 訳, 1919, 『十九世紀獨逸思想史』 岩波書店。

Windelband, Wilhelm, 1909b, *Der Wille zur Wahrheit : Akademische Rede zur Erinnerung an den zweiten Gründer der Universität Karl Friedrich Grossherzog von Baden am 22. November 1909 bei dem Vortrag des Jahresberichts und der Verkündung der akademischen Preise / gehalten von Wilhelm Windelband*, Heidelberg : J. Hörning.

Windelband, Wilhelm, 1913, "Die Prinzipien der Logik, aus, Arnold Ruge", Ruge, Arnold. (Hrsg.), *Encyclopädie der philosophischen Wissenschaften in Verbindung mit Wilhelm Windelband*, Tübingen: J.C.B. Mohr.

Windelband, Wilhelm, 1914, Fritz Medicus, (Hrsg.) *Einleitung in die Philosophie, Grundriss der philosophischen Wissenschaften / in Verbindung mit Karl Joël . [et al.]*, Tübingen: J.C.B. Mohr.

Windelband, Wilhelm, 1916, Wolfgang Windelband und Bruno Bauch. Hrsg. von "Geschichtsphilosophie : eine Kriegsvorlesung " : Fragment aus dem Nachlass / von Wilhelm Windelband , *Kant-Studien : Ergänzungshefte im Auftrage der Kantgesellschaft*, Berlin : Reuther & Reichard,; No. 38.

Windelband, Wilhelm, 1919(←1894), "Geschichte und Naturwissenschaft", in; 1919, 6. Aufl., *Präludien, : Aufsätze und Reden zur Philosophie und ihrer Geschichte*, Tübingen: J.C.B. Mohr, Bd. II. S. 136-160.

Windelband, Wilhelm, 1919(←1902), "Das Heilige", in; 1919, 6. Aufl., *Präludien, : Aufsätze und Reden zur Philosophie und ihrer Geschichte*, Tübingen: J.C.B. Mohr, Bd. II. S. 295-332.

Windelband, Wilhelm, 1919(←1907), "Über gegenwärtige Lage und Aufgabe der Philosophie", in; 1919, 6. Aufl., *Präludien, : Aufsätze und Reden zur Philosophie und ihrer Geschichte*, Tübingen: J.C.B. Mohr, Bd. II. S. 1-23.

Windelband, Wilhelm, 1919(←1910), "Die Erneuerung des Hegelianismus", in; 1919, 6. Aufl., *Präludien, : Aufsätze und Reden zur Philosophie und ihrer Geschichte*, Tübingen: J.C.B. Mohr, Bd. I. S. 273-289.

Windelband, Wilhelm, 1921(←1884), *Beiträge zur Lehre vom negativen Urteil, unveränderter Ausdruck*, Tübingen: J.C.B. Mohr, S. 167-195. = 枝重清喜 訳, 1928, 『否定判断論』 哲学論叢, 岩波書店。

山本信, 1953, 『ライプニッツ哲学研究』 東京大學出版会。

山本幾生,2016,「生の統一的全体性と分散的多様性(その1)ディルタイの方向づけからするミッシュの現象学(ハイデガー、フッサール)批判を介して」關西大學文學會『關西大學文學論集』,65(3・4)卷,25-55 ページ。

湯浅正彦,2003,『存在と自我——カント超越論哲学からのメッセージ』勁草書房。

Zoher,Rudolf,1925,*Die objektive Geltungslogik und der Immanenzgedanke.Eine erkenntnistheoretische Studie zum Problem des Sinnes*, Tübingen:J.C.B.Mohr.

Zoher,Rudolf,1959,*Kants Grundlehre.Ihre Sinn,ihre Problematik,ihre Aktualität*, Erlangen: Universitätsbund Erlangen.

Zoher,Rudolf,1963,Heinrich Rickert zu seinem 100.Geburtstag,in;*Zeitschrift für philosophische Forschung*,Bd.18.S.457-462.